盛岡市内遺跡群

－平成13年度発掘調査概報－

宿田遺跡	第４次発掘調査
大館町遺跡	第71次発掘調査
台太郎遺跡	第40・41次発掘調査
田貝遺跡	第９次発掘調査
見前館遺跡	第２次発掘調査

２００２．３

盛岡市教育委員会

序　言

盛岡市には今から約10,000年以上前の縄文時代草創期の遺跡から、新しくは盛岡城跡に代表される江戸時代の遺跡まで517ヶ所の遺跡が確認されています。

これらの遺跡は、盛岡市の成り立ちと先人達のあゆみを考える上で、貴重な財産であることはいうまでもありません。しかし近年の各種開発により、遺跡やその周辺の環境は急激な変化を遂げつつあることも事実であります。

当市では文化財保護の立場より国の補助事業として今年度は宿田遺跡や台太郎遺跡など市内各地の遺跡において個人住宅新築にともなう事前の緊急調査を実施しました。その結果、盛岡市の歴史をひもとく上で大変貴重な成果をあげることができました。

本書は、その調査概報として資料の呈示を意図してまとめたものですが、市民をはじめ、学校や関係機関・研究者等の方々に活用していただければ幸いと存じます。

最後になりましたが、調査を実施するにあたり、指導や助言をくださった文化庁記念物課ならびに岩手県教育委員会生涯学習文化課に対して、深く感謝を申し上げるとともに、御理解と御協力を頂いた地権者各位ならびに地元関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成１４年３月

盛岡市教育委員会

教育長　石　川　悌　司

例　言

1．　本書は、平成13年度国庫補助事業「盛岡市内遺跡群」の発掘調査概報である。

2．　本書は遺構および遺物の実測など多くの資料の呈示を意図して、編集執筆に今野公顕、神原雄一郎、佐々木亮二、三浦陽一、岩城志麻があたり、千田和文、似内啓邦、室野秀文、津嶋知弘、藤村茂克、花井正香、平澤祐子、佐々木紀子が協議して編集した。尚、各編章の執筆者は文末に記した。

3．　遺構平面位置は、平面直角座標Ｘ系を座標変換した調査座標で表示した。
調査座標軸は第Ｘ系に準じる。

宿田遺跡　　調査座標原点　Ｘ－32,000・Ｙ＋25,300
大館町遺跡　調査座標原点　Ｘ－32,000・Ｙ＋24,500
台太郎遺跡　調査座標原点　Ｘ－35,500・Ｙ＋26,500
田貝遺跡　　調査座標原点　Ｘ－35,000・Ｙ＋23,700
見前館遺跡　調査座標原点　Ｘ－40,000・Ｙ＋28,000

4．　高さは標高値をそのまま使用している。

5．　土層図は堆積のしかたを重視し、線の太さを使い分けた。土層注記は層理ごとに本分でふれ、個々の層位については割愛した。層相の観察にあたっては『新版標準土色帖』（1994小山正忠・竹原秀雄）を参考にした。

6．　各遺跡における遺構記号は次のとおりである。

宿田遺跡・大館町遺跡・台太郎遺跡・見前館遺跡

遺　構	記号	遺　構	記号	遺　構	記号
竪穴住居跡	ＲＡ	土　　坑	ＲＤ	溝　　跡	ＲＧ
建　物　跡	ＲＢ	竪　　穴	ＲＥ	配石・集石	ＲＨ
柱　列　跡	ＲＣ	焼土遺構	ＲＦ	古　　墳	ＲＸ

志波城跡関連（田貝遺跡）

遺　構	記号	遺　構	記号	遺　構	記号
柱　列　跡	ＳＡ	溝　跡	ＳＤ	竪穴住居跡	ＳＩ
建　物　跡	ＳＢ	井　戸　跡	ＳＥ		ＳＪ
	ＳＣ	築地・土塁	ＲＦ	土坑・竪穴	ＳＫ

7．　使用した地図は建設省国土地理院発行の２万５千分の１「盛岡」「小岩井農場」「南昌山」「矢巾」の地形図である。

8．　発掘調査にともなう出土遺物および諸記録は、盛岡市教育委員会で保管してある。

9.　調査体制

[調査主体] 盛岡市教育委員会

教育長　石川悌司

[調査総括] 文化課長　大崎 琢夫

文化課長補佐　菊地 誠

副主幹　高橋 清明

文化財係長　千田 和文

[調　　査] 文化財主査　似内 啓邦

文化財主任　室野 秀文

文化財主事　津嶋 知弘、三浦 陽一、神原 雄一郎、藤村 茂克、今野 公顕、花井 正香、平澤 祐子、佐々木 亮二

文化財調査員　佐々木 紀子、岩城 志麻

[事　　務] 事務嘱託　阿部 徳乃

文化財調査員　野口 律子、仁杉 幸子、北田 公子、格矢 幸吉

[発掘調査および整理作業]

浅沼 はた、天沼 芳子、泉山 紀代子、井上 陽子、岩根 陽子、内山 陽子、大谷 憲子、大坪 華子、大宮 安子、大森 キヌ子、岡本 美知子、長内 理恵、加藤 高太郎、金沢 達也、鹿野 奈保美、兼平 千賀子、川村 昭三、岸本 慎也、菊池 武、工藤 繁子、工藤 則子、小松 愛子、斎藤 幸恵、斎藤 三郎、斎藤 静子、佐藤 公一、佐々木 淳子、澤口 君子、下川原 裕、白澤 和子、杉田 秀明、鈴木 賢治、駿河 チヨ、堰合 賢吉、田貝 恵子、高橋 貞子、竹花 栄子、立花 裕、伊達寿々子、谷藤 貴子、玉井 真由美、千葉 ふさ子、千葉 洋子、栃澤 等、中島 京子、野中 蕃、平賀眞利子、平野 淑子、深野 章、福田 香乃、藤田 友子、藤森 瑠美子、藤原 美知子、藤原 亮子、細田 肖子、松川 光海、松田 昭夫、南幅 千代、南幅 洋子、南幅 征子、宮澤 千賀子、村上 ヨウ子、村山 伊津子、百岡 峰子

[地権者]　浅沼 芳光、岩舘 勝治、熊谷 栄一、佐々木 巌、舘川 均、中村 和弘、中村 庄吉、向井 矩央

[調査協力] 岩手県教育委員会、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

[御指導・御助言]

相原 康二（岩手県立図書館）、相原 淳一（宮城県教育委員会）、井上 雅孝（滝沢村教育委員会）、日下 和寿（岩手県教育委員会）、工藤 雅樹（福島大学）、小向 裕明（遠野市教育委員会）、佐藤 浩彦（遠野市教育委員会）、高木 晃（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター）、高瀬 克範（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター）、高橋 憲太郎（宮古市教育委員会）、竹下 将男（宮古市教育委員会）、武田 良夫（岩手考古学会副会長）

（敬称略）

10.　遺物の表現について

（1）土器・・・出土土器の土器区分は、縄文土器・土師器・あかやき土器・須恵器に大別した。

a　縄文時代早期に属する土器の実測図・拓本は１／２スケールとし、ほかは１／３スケールとした。

b　挿図の土器配列については、モチーフおよび施文技法でまとめた。

c　縄文時代の土器で隆線・沈線の表現は上端・下端の実践・破線で表し、陰影は表現していない。

d　土師器の黒色処理をされたものはスクリーントーンで表現した。

（2）石器

a　剥片石器は２／３スケールとし、礫石器は１／３スケールとした。ただし長大な礫石器は１／６スケールとした。

b　石器の展開順序は、基本的には左に表面（本文では背面とする）、中央に右側縁、右に裏面（本文中では腹面とする―主要剥離面）を並べ、必要に応じて側縁および縦断面下に横断面を付け加えた。

c　挿図の配列は出土した層位順に配列し、さらに器種ごとにまとめた。

d　剥片石器の摩滅痕は網目スクリーントーンでしめし、礫石器の自然面はドットで示した。

（3）土製品・石製品

a　いずれも２／３スケールとした。

b　挿図の配列は出土した層位順とし、さらに器種ごとにまとめた。

（4）なお挿図中の記号番号は遺物の出土地点および出土層位を表している。

（例）　ＲＡ５４１　Ｃ層　　→ＲＡ５４１竪穴住居跡内埋土Ｃ層より出土

（例）　Ｄ４－Ｒ１　Ⅳ

↓　↓　↓

※１　※２　※３

※１　遺跡全体を５０ｍメッシュで区切り、大グリッドを設定し、北西から西－東をA・B・C・・・のアルファベット、北－南は１・２・３・・・の数字を付し、グリッドの呼称名はその組み合わせとした。

※２　さらに５０ｍメッシュを２ｍメッシュに分割し、小グリッドとした。北西から西－東をＡ～Ｙのアルファベット、北－南を１～２５の数字を付し、グリッドの呼称名はその組み合わせとした。

※３　遺物の出土層位を表している。

11.　遺構の表現について

遺構の挿図中、説明する当該遺構については、実線で表した。なお、説明遺構と切り合った遺構については二点鎖点で表した。

12.　遺跡の範囲については推定である。

目　次

序言
例言
目次
挿図目次・表目次・写真図版目次
Ⅰ　平成13年度発掘調査の概要　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
Ⅱ　宿田遺跡（第４次調査）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
Ⅲ　大館町遺跡（第71次調査）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39
Ⅳ　台太郎遺跡（第40次・41次）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
Ⅴ　田貝遺跡（第９次調査）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・80
Ⅵ　見前館遺跡（第２次調査）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・86
写真図版　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・89
報告書抄録・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・94

挿図目次

Ⅰ．平成13年度発掘調査の概要
第１図　地形分類と周辺の遺跡分布　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

Ⅱ．宿田遺跡（第４次調査）
第２図　宿田遺跡の位置（1：50,000）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
第３図　宿田遺跡全体図（1：1,000）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
第４図　宿田遺跡第４次調査区全体図（縄文時代）・・・・・・・・・・・・・・・・・7
第５図　ＲＤ００７・００８・００９・０１０・０１１・０１２土坑　・・・・・・・・・・・9
第６図　ＲＤ００７土坑出土遺物（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
第７図　ＲＤ００７土坑出土遺物（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
第８図　ＲＤ００７土坑出土遺物（３）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
第９図　ＲＤ００７土坑出土遺物（４）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
第10図　ＲＤ００７土坑出土遺物（５）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
第11図　ＲＤ００７土坑出土遺物（６）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
第12図　ＲＤ００７・００８・０１０土坑出土遺物（７）・・・・・・・・・・・・・・・17
第13図　ＲＤ００７土坑出土遺物（８）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
第14図　ＲＤ００９土坑出土遺物　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
第15図　宿田遺跡第４次調査区全体図（古代）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24

第16図　ＲＧ５０１・５０６円形周溝跡　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
第17図　ＲＧ５０７円形周溝跡　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
第18図　ＲＤ５０１・５０２土坑　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
第19図　ＲＧ５０１円形周溝跡出土遺物　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
第20図　遺構外・遺物包含層出土土器　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30
第21図　遺物包含層出土石器（１）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
第22図　遺物包含層出土石器（２）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
第23図　遺物包含層出土石器（３）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
第24図　続縄文・古墳時代遺物（１）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35
第25図　続縄文・古墳時代遺物（２）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36

Ⅲ．大館町遺跡（第71次調査）

第26図　大館町遺跡の位置（1：50,000）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39
第27図　大館遺跡群調査全体図（1：1,000）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・40・41

Ⅳ．台太郎遺跡（第40・41次調査）

第28図　台太郎遺跡の位置（1：50,000）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
第29図　台太郎遺跡全体図（1：2,000）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・46・47
第30図　台太郎遺跡第40・41次調査区全体図　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49
第31図　ＲＡ５３６竪穴住居跡　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・51
第32図　ＲＡ５３６竪穴住居跡出土遺物（１）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・52
第33図　ＲＡ５３６竪穴住居跡出土遺物（２）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・53
第34図　ＲＡ５３７竪穴住居跡　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・54
第35図　ＲＡ５３７竪穴住居跡出土遺物　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・54
第36図　ＲＡ５３８竪穴住居跡　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・55
第37図　ＲＡ５３８竪穴住居跡出土遺物　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・56
第38図　ＲＤ９７４・９７５・９７６・９７７土坑　・・・・・・・・・・・・・・・・・・57
第39図　ＲＧ１０１・３３６・３５９・３６０・３６１・４２４・
　　４２５・４２６・４２７・４２８溝跡、ピット　・・・・・・・・・・・・・・・・・60
第40図　ＲＧ１０１・３３６・３５９・３６０・３６１・４２４・
　　４２５・４２６・４２７・４２８溝跡、ピット土層断面　・・・・・・・・・・・・61
第41図　ＲＧ１０１溝跡出土遺物　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・62
第42図　ＲＧ３６０溝跡出土遺物　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・62
第43図　ＲＥ０５４竪穴跡　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・63
第44図　遺構外出土遺物　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・64
第45図　ＲＡ５３９・５４０竪穴住居跡　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・65
第46図　ＲＡ５３９・５４０竪穴住居跡出土遺物　・・・・・・・・・・・・・・・・・・66
第47図　ＲＡ５４１竪穴住居跡　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・67

第48図　ＲＡ５４１竪穴住居跡出土遺物　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・68
第49図　ＲＡ５４２竪穴住居跡　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・69
第50図　ＲＡ５４２竪穴住居跡土層断面　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・70
第51図　ＲＡ５４２竪穴住居跡出土遺物（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・71
第52図　ＲＡ５４２竪穴住居跡出土遺物（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・72
第53図　ＲＡ５４３・５４４竪穴住居跡　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・74
第54図　ＲＡ５４３竪穴住居跡出土遺物　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・74
第55図　ＲＤ９７８・９７９・９８０・９８１土坑　・・・・・・・・・・・・・・・・・・75
第56図　ＲＧ３３４・３３６・３６２・４３５溝跡、ピット　・・・・・・・・・・・・・・・77

Ⅴ．田貝遺跡（第９次調査）

第57図　田貝遺跡の位置（1：50,000）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・80
第58図　田貝遺跡全体図（1：2,000）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・82・83
第59図　田貝遺跡第９次調査区全体図　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・84

Ⅵ．見前館遺跡（第２次調査）

第60図　見前館遺跡の位置（1：50,000）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・86
第61図　見前館遺跡全体図（1：1,250）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・88

表目次

第１表　平成13年度盛岡市内遺跡群発掘調査事業調査遺跡一覧　・・・・・・・・・・・・・・1
第２表　台太郎遺跡調査成果　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・44・45・48
第３表　田貝遺跡調査成果　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・81

写真図版目次

第１図版　宿田遺跡第４次発掘調査区全景、宿田遺跡第４次発掘調査区北半部全景、
宿田遺跡ＲＤ００７土坑出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・91

第２図版　台太郎遺跡第40次発掘調査区全景、台太郎遺跡第41次発掘調査区全景、
台太郎遺跡ＲＡ５４２竪穴住居跡全景・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・92

第３図版　大館町遺跡第71次発掘調査区全景、田貝遺跡第９次発掘調査区全景、
見前館遺跡第２次発掘調査区北半全景・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・93

Ⅰ．平成13年度発掘調査の概要

1．平成13年度事業の概要

市内遺跡群　盛岡市内には、現在517箇所の遺跡が周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されている。近年では、周知の遺跡内における大規模公共事業、各種民間開発、個人住宅建築等の土地開発等にともなう事前の発掘調査や試掘調査を毎年100件前後実施しており、今年度は発掘調査・試掘調査・立会調査（公共事業・各種民間開発・個人住宅等）をあわせて約150件実施した。

発掘調査　平成13年度の国庫補助事業（盛岡市内遺跡群発掘調査事業）で実施した発掘・試掘調査件数は９件で、宿田遺跡第４次調査、大館町遺跡第71次調査、台太郎遺跡第40次・第41次調査、田貝遺跡第９次調査、見前館遺跡第２次調査の６件については発掘調査を実施した。

試掘調査　百目木遺跡第19次調査は調査面積も狭く、遺構・遺物が検出されなかったため下記の表に所在地・調査期間・調査面積を示すのみとした。なお、百目木遺跡は昭和53年以来からの調査によって奈良・平安時代の竪穴住居跡が約100棟確認されている市内屈指の古代集落遺跡である。

落合遺跡第12次・第13次調査では、試掘調査を実施した結果、縄文時代後期～晩期にかけての土坑群及び多量の土器・石器が出土したほか、12～13世紀の竪穴状遺構・掘立柱遺物跡、常滑産と考えられる陶器片が検出されたため本格的な発掘調査を平成14年度に実施することとし、事実報告についても平成14年度刊行予定の調査報告書にあわせて掲載するものとした。

遺　跡　名	所　在　地	調 査 期 間	調査面積	調査原因
宿田遺跡（第４次）	盛岡市前九年１丁目5-19	平成13年10月１日～31日	175.8㎡	個人住宅建設
大館町遺跡（第71次）	盛岡市大新町10-2	平成13年8月3日～7日	94.4㎡	個人住宅建設
台太郎遺跡（第40次）	盛岡市向中野字八日市場41-2・3	平成13年8月1日～9月19日	300㎡	個人住宅建設
台太郎遺跡（第41次）	盛岡市向中野字八日市場41-2他	平成13年8月1日～9月19日	220㎡	個人住宅建設
田貝遺跡（第９次）	盛岡市上鹿妻字田貝59-2	平成13年5月1日～11日	188.5㎡	個人住宅建設
見前館遺跡（第２次）	盛岡市西見前8-3	平成13年7月23日～27日	173.9㎡	個人住宅建設
(試掘)百目木遺跡（第19次）	盛岡市三本柳5-13-6	平成13年12月5日	20㎡	個人住宅建設
(試掘)落合遺跡（第12次）	盛岡市下米内238-3	平成13年10月17日	16㎡	個人住宅建設
(試掘)落合遺跡（第13次）	盛岡市下米内42-2	平成13年11月5日～７日	105㎡	個人住宅建設

第１表　平成13年度　盛岡市内遺跡群発掘調査事業調査遺跡一覧

2．盛岡市の地形・地質

北上山地　盛岡市は地質構造上、北上川東方に発達する先第三紀系の基盤岩からなる北上山地、西方の新第三紀系基盤岩からなる奥羽山脈に挟まれた北上平野北部に位置している。盛岡市東部は、北上山地の主要な境界である早池峰構造帯の西縁部にあり、北部北上山地と南部北上山地の双方を含む地域となっている。これらの山地縁辺には中津川・簗川・乙部川などの北上川水系の河川やその支流などにより浸食された丘陵地や中位・低位の段丘が発達する。

遺跡は主に、中津川・簗川・乙部川流域で多く確認されている。盛岡市北東部を流れる中津川は最大支流である米内川と合流して水量を増し、市街地を抜け合流点より下流約２㎞で北上川と合流する。遺跡は米内川との合流点付近に発達する中位・低位段丘面に多く立地しており、代表的な遺跡として縄文時代中期の集落遺跡である柿ノ木平遺跡、縄文時代早期・平安時代の集落や古墳時代の土坑墓が発見された薬師社脇遺跡、縄文時代後期の配石遺構が発見された落合遺跡などがある。

簗川は盛岡市東部、北上山地の分水嶺となる桐ノ木沢山（1,209m）北西支陵より流れ、最大支流である根田茂川と合流して水量を増し、盛岡市安庭・門付近で北上川と合流する。簗川は急流で知られ、その流れは丘陵地や高位段丘面を開析して流域沿いに中・小規模な低位段丘面を形成する。これらの低位段丘面上には川目Ａ遺跡、沢田遺跡など縄文時代後期以降の遺跡が立地する。また、簗川を望む丘陵・高位段丘面には縄文時代早期以降の遺跡が多数立地しており、縄文時代中期の集落遺跡である川目Ｃ遺跡・小山遺跡、中世城館である仁反田遺跡が立地する。

奥羽山脈　盛岡市西方には沼森山（581m）を中心とする沼森山山地・篠木山地が連なっており、さらに西方には岩手山（2,038m）をはじめとする岩手火山群が連なる。岩手山の東麓、滝沢村大石渡付近より大石渡岩屑なだれ堆積物を基盤とした滝沢台地が盛岡市北部にかけて発達しており、台地上には本概報に掲載した宿田遺跡、県指定史跡大館町遺跡など多数の遺跡が立地する。

沼森山山地・篠木山地の南端は烏泊山（389m）で、雫石川を挟み烏泊山の対岸には南昌山（848m）、赤林山（856m）、箱ヶ森（865m）を含む箱ヶ森山地が南北に連なる。箱ヶ森山地の東麓には扇状地が広がり、扇状地は大小の沢などにより開析され、その末端は雫石川・北上川沿いに発達する沖積平野に張り出す。

雫石川は奥羽山脈より東流し雫石盆地を形成するが、前記した烏泊山と箱ヶ森に挟まれた北ノ浦付近で急激に流路が狭められる。北ノ浦以東は沖積地が広がり、その地形は北上川流域に発達する北上平野とつながる。雫石川は盛岡駅南方約500m付近で北上川に合流し、同地点でさらに前述した中津川が合流する。雫石川が北上川と合流するまでの南岸では、雫石川の流路の転換によって形成された幾筋もの沖積段丘が発達し、段丘上からは主に古代（７～10世紀）から江戸時代にかけての遺跡が多数確認されている。国指定史跡志波城跡をはじめ本概報に掲載された台太郎遺跡・田貝遺跡は雫石川南岸に発達する沖積段丘上に立地し、見前館遺跡は合流点より下流約６㎞付近の北上川西岸に発達する沖積段丘上に立地する。

※引用・参考文献　土井宣夫2000.3『岩手山の地質－火山灰が語る噴火史－』滝沢村教育委員会

（神原　雄一郎）

第１図　地形分類と周辺の遺跡分布

Ⅱ．宿田遺跡　（第４次調査）

１．遺跡の環境

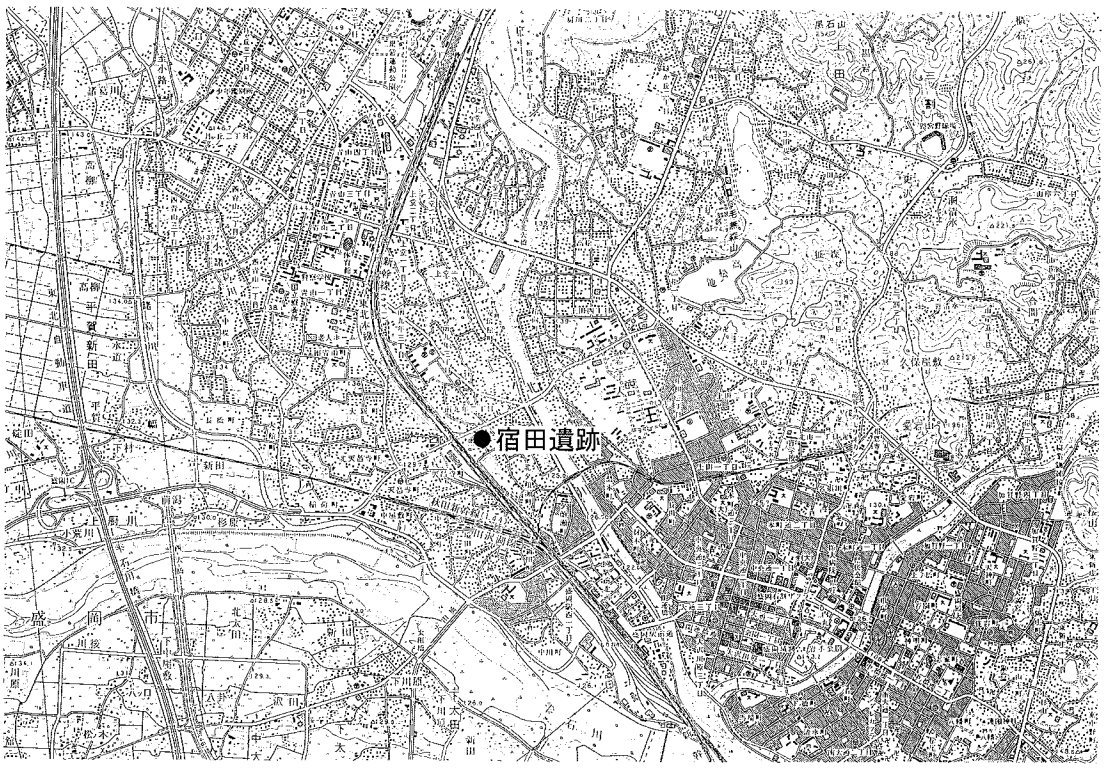
（１）遺跡の概要

遺跡の位置　宿田遺跡は盛岡市の北西部、盛岡市立厨川小学校より北西約0.1km の前九年一丁目地内に所在し現況は宅地である。第４次調査区は前九年一丁目５－19に所在し、個人住宅改築に伴う事前調査を実施したもので、調査は平成13年10月１日より10月31日にかけて行われた。調査面積は175.80㎡である。（第２図）

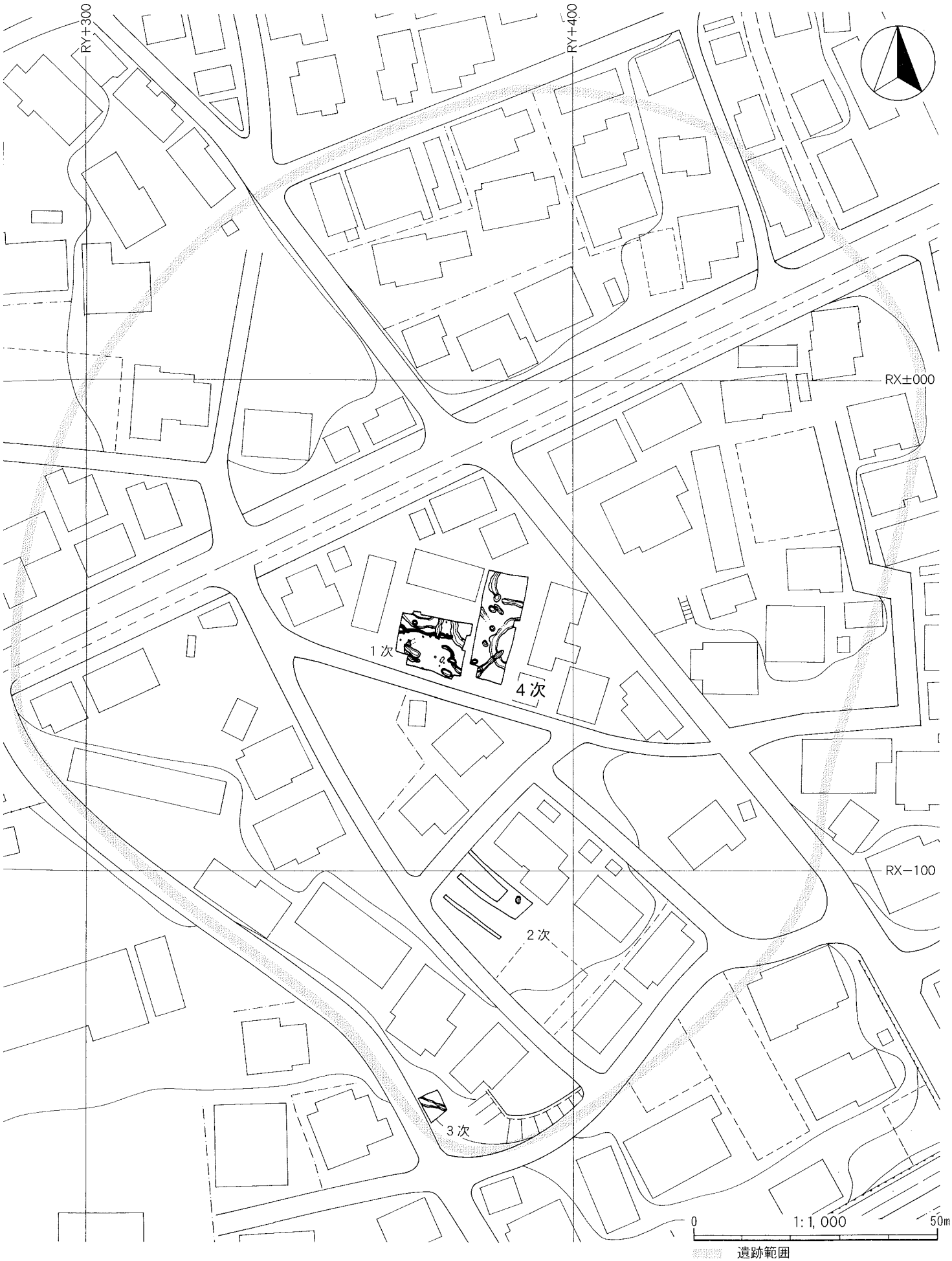
過去の調査　宿田遺跡は昭和25年頃に小岩末治氏によって縄文時代早期の遺跡であることが確認された遺跡である。当時、岩手県内において縄文時代早期遺物の発見例は稀有であったことから小岩氏は表面採集された資料を『岩手県史（上古編）』（1960年）に紹介している。資料紹介された遺物は縄文時代早期中葉の貝殻文土器、早期後葉の槻木１式に類似する土器で、県内における土器編年上重要な土器とされた。

その後、盛岡市教育委員会により平成２年度（第１次）、平成５年度（第２次）、平成８年度（第３次）の３次にわたる発掘調査が実施された。（第３図）

第１次調査では縄文時代の土坑４基、古墳時代の土坑１基、奈良～平安時代の円形周溝跡５基が検出されたほか、遺物包含層より多量の槻木１式土器、少量だが北海道系の土器である北大Ⅰ式土器、５世紀代の土師器片、黒曜石製の掻器・剥片が出土するなど多大な成果が得られた。



第２図　宿田遺跡の位置（1:50,000）



第３図　宿田遺跡全体図（1:1,000）

第１次調査で出土した早期後葉の槻木１式類似土器は平底を呈するものが多く、今回の調査で出土した尖底を呈する土器群とは若干異なる土器群であることが考えられる。

第２次調査では縄文時代早期後葉の土坑１基が検出され、土坑からは槻木１式に類似する土器が出土している（盛岡市教育委員会1998.3『盛岡市埋蔵文化財調査年報－平成５・６年度－』）。

第３次調査区は宿田遺跡南端部に位置し、東西に延びる時期不明の溝跡が検出された。

しかし、これらの発掘された資料の多くは、平成12年の文化財調査室の火災により第２次調査以外の成果を公表することが困難な状況になった。罹災後、罹災資料の整理作業が進められ、若干ではあるが第１次調査出土遺物が確認されたため、出土位置等が不明ではあるが遺物の一部を本概報に掲載した。

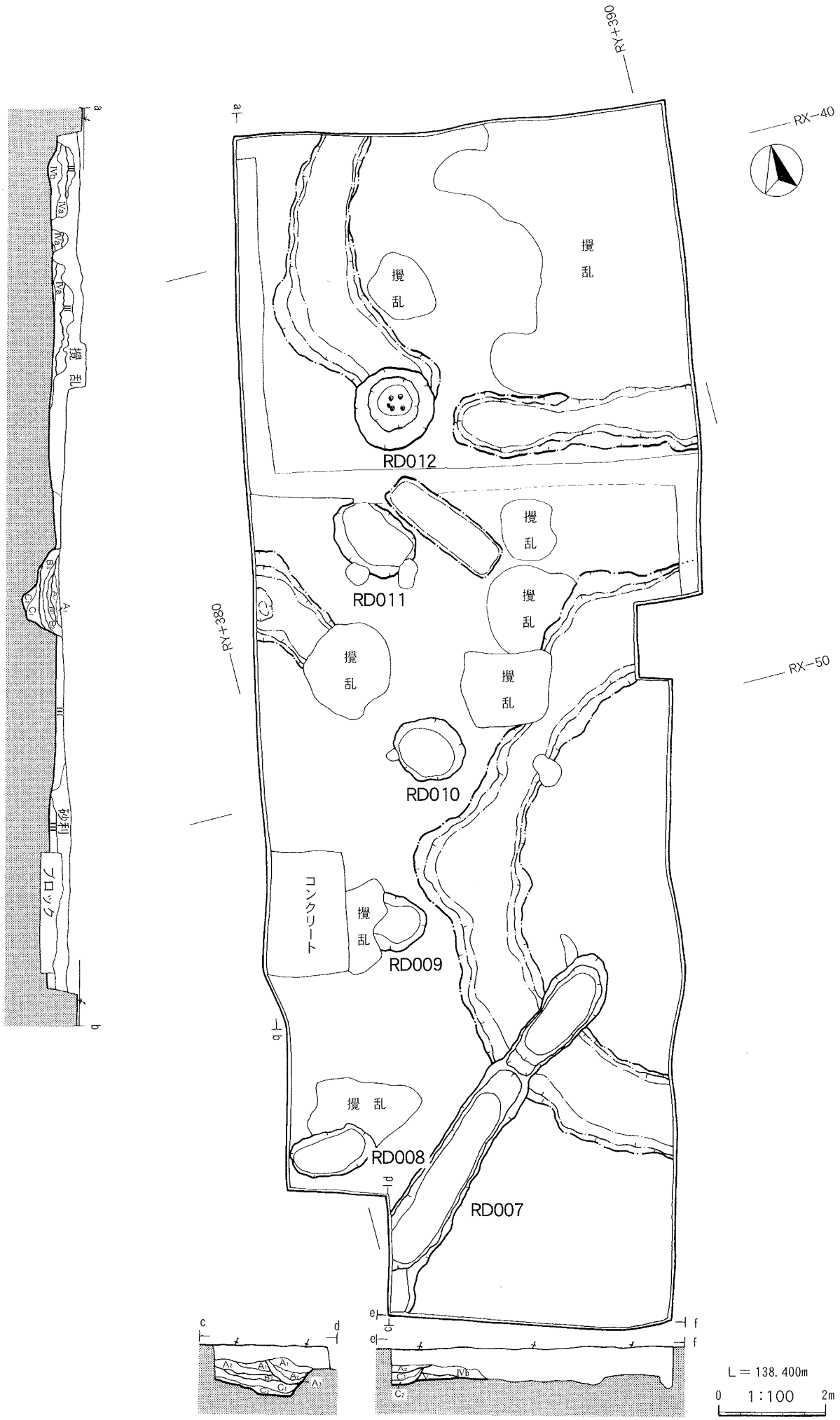
地形・地質　雫石川北岸には洪積段丘に相当する岩手山起源の大石渡岩屑なだれ堆積物（滝沢泥流）を基盤とした火山性砂台地（滝沢台地）が発達している。宿田遺跡は、滝沢台地南縁部に立地し、遺跡の東西は沢による浸食で解析され、南は緩やかな傾斜を持ちながら沖積地に至る。

宿田遺跡が立地する滝沢台地は火山灰で覆われており、下層より外山火山灰層・渋民火山灰層・分火山灰層が堆積する。最上部の堆積物となる分火山灰層は主に岩手山・秋田駒ヶ岳に噴出起源を持つ火山灰で構成される。分火山灰層は下層より十和田起源である八戸火山灰（八戸火砕流）が薄く堆積し（層厚１～２㎝）、八戸火山灰直上には秋田駒ヶ岳起源の小岩井軽石層が堆積する。八戸火山灰の降下年代は約13,000年前とされ、小岩井軽石層直上に堆積するローム質火山灰（柳沢軽石層）の降下年代が約11,000年前とされている。なお、小岩井軽石層は秋田駒ヶ岳より東に、盛岡市飯岡付近を南限、玉山村渋民付近を北限とした幅で東方に向かって降下しており、東辺は太平洋に面する普代村付近を北限に、南は宮古市付近まで火山灰層を露頭観察することができる。

分火山灰下部からの出土遺物は、玉山村小石川遺跡では八戸火山灰層より木葉形尖頭器を主とする石器群が、葛巻町泥這遺跡からは石斧と尖頭器を主とする石器群が発見されている。

大新町遺跡では前述した柳沢軽石層直上より縄文時代草創期の爪形文土器と共伴する石器が出土し、柳沢軽石層上に堆積する暗褐色土下部より縄文時代早期初頭の無文土器、早期前葉の押型文・沈線文土器が多量に出土している。前九年Ⅰ遺跡では柳沢軽石層と暗褐色土の斬位層付近より多量の無文土器と少量の爪形状刺突が施される土器が多量に出土している。なお、暗褐色土層は縄文時代早期の遺物が発見される層であるが、層位の細分が困難なほど変化が少なく、滝沢台地上の遺跡では早期初頭から末葉までの遺物が混在した状態で出土することが多い。

周辺の遺跡　前述した滝沢台地南縁部及び台地縁辺下に発達する沖積段丘（上田段丘相当）には数多くの遺跡が確認されている。滝沢台地南縁部では西より大館堤遺跡（縄文時代早期～中期・弥生時代・古代）・大館町遺跡（縄文時代早期～中期・古代）・大新町遺跡（縄文時代草創期～後期・古代）・小屋塚遺跡（縄文時代早期～後期・古代）・前九年Ⅰ遺跡（縄文時代早期～中期・古代）・前九年Ⅱ遺跡（縄文時代中期・古代）・宿田遺跡（縄文時代早期・続縄文・古代）・館坂遺跡（旧石器時代？・縄文時代早期）・安倍館遺跡（縄文時代草創期～中期・続縄文・中世）など旧石器時代から中世にかけての遺跡が立地している。沖積段丘面では稲荷町遺跡（古代末～中世・近世）・里館遺跡（中世）など比較的新しい時代の遺跡が立地する。（第１図）



第４図　宿田遺跡第４次調査区全体図（縄文時代）

２．調査内容

（１）縄文時代の遺構と遺物

遺　構　縄文時代の遺構は、早期後葉～末葉の土坑６基（ＲＤ００７～０１２）が検出されている。ＲＤ００７土坑底面付近からは多量の縄文時代早期後半の条痕文土器群が出土しているが、盛岡市周辺部において当該時期の土器が一括して出土した例は少なく、早期後半の土器編年を考える上で重要な成果を得ることができた。また、ＲＤ０１２土坑は底面に小ピットを伴う落し穴と考えられ、時期については埋土がＲＤ００７土坑など早期後半の埋土と近似することから同時期または近い時期の構築と考えられる。（第４図）

遺　物　遺物包含層については、既に削平されていたため僅かな遺物の出土をみただけだが、西に隣接する第１次発掘調査区では縄文時代早期中葉～末葉・中期前葉・後期、弥生時代後期、続縄文（北大Ｉ式）・古墳時代（５世紀）の遺物が出土している。住居跡等は未発見であるが、出土遺物から宿田遺跡は断続的ながらも長期にわたり土地利用があった遺跡であったことが伺うことができる。

ＲＤ００７土坑（第５図）

時　期　早期後葉　　**平面形**　溝状、底面起伏あり　　**長軸の傾き**　Ｎ40°Ｅ

規　模　長軸上端7.7m以上・下端6.48m以上、短軸上端0.66～1.14m・下端0.54～1.0m・深さ0.26～0.52m

掘込面　Ⅳｂ層？　　**検出面**　Ｖ層上面　　**壁の状態**　直立ぎみに外傾して立ち上がる。

埋　土　自然堆積によるもので、大きくＡ・Ｂ・Ｃ層に大別され、各層はさらに２層に細別される。A_1層上部にはⅣａ層が堆積する。

Ａ層―　スコリア粒を多量に含む暗褐色土を主体に塊状の褐色土を含む層。A_1層は暗褐色土の割合が多く、粒状の炭化物を微量含む。A_2層はA_1層より褐色土の割合が多く、粒状の炭化物を含む。

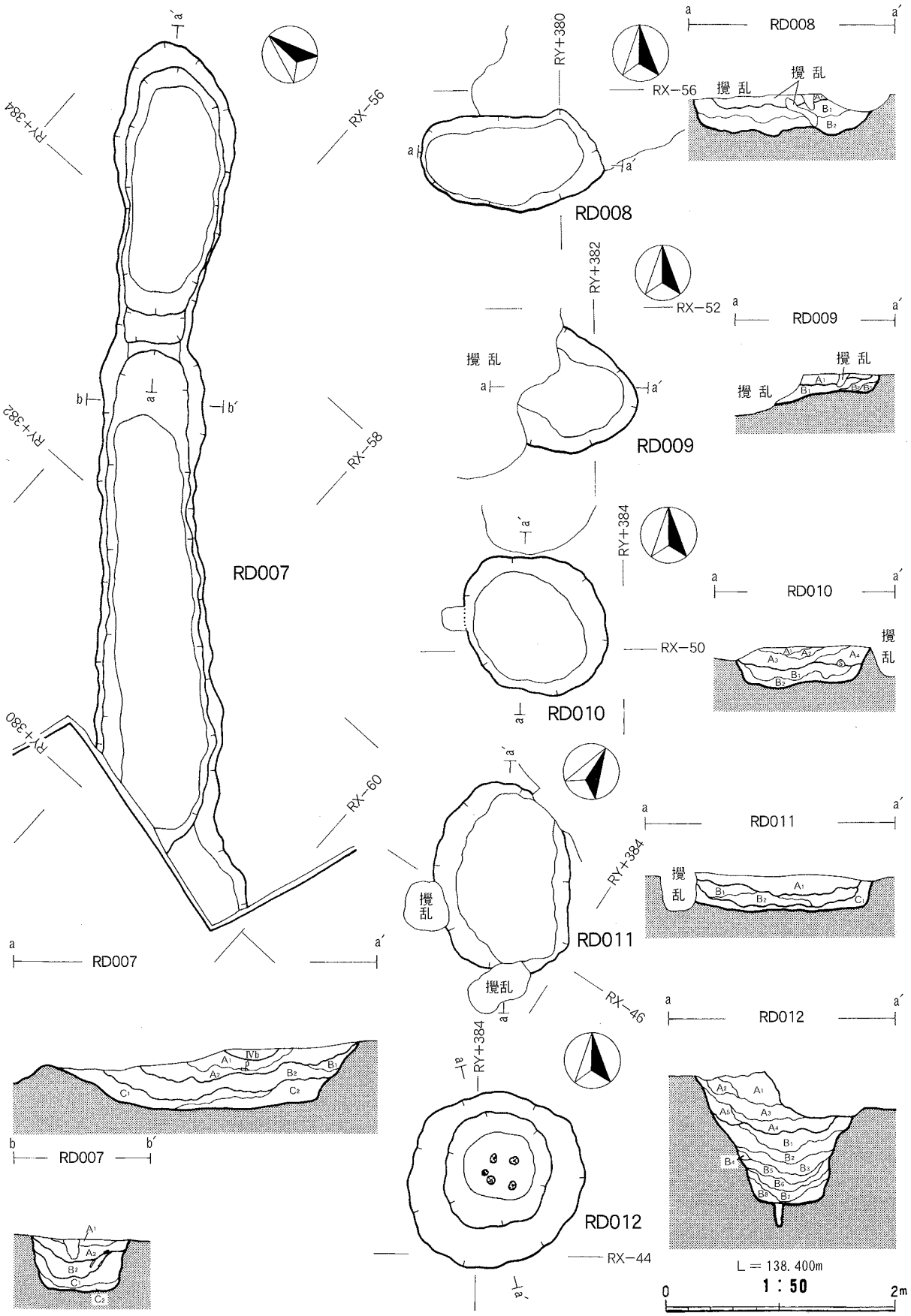
Ｂ層―　スコリア粒を多量に含む褐色土を主体に黒褐色土を含む層。B_1層は塊状の黒褐色土を少量含み、B_2層は褐色土を主体に多量の塊状の黒褐色土が混じる。土質は全体的に極めてかたく、密にしまる。

Ｃ層―　赤褐色のスコリア粒を含む黒褐色土層。C_1層は多量の炭化物を含み、土質はかたく、密にしまる。遺物を多量に含む層で、特にB_2層との間から多く出土する。C_2層は炭化物を微量含み、かたくしまる層である。遺物の出土量は少ない。

遺物の出土状況　遺物はC_1層を中心に各層より出土しているが、Ａ・Ｂ層からの出土量は少ない。C_1層より出土した土器は、微隆起線による文様を特徴とする土器群と沈線による文様を特徴とする土器群であり、両者の土器群は混在した状態で出土した。

出土遺物　**土器**（第６図１～第12図94）

微隆起線文　１は口縁部に４単位の波頂部を持ち、尖底部は乳頭状を呈する尖底深鉢である。製作時の歪みがあるが、口径は22.6～23.3cm、波頂部から底部までの高さは26.2cmをはかる。胎土には雲母と微量の繊維が含まれ、器壁は口縁部付近で４mm前後、体部５mm前後、底部～尖底部付近が４～６



第5図　RD007・008・009・010・011・012土坑

mmである。器形は口縁部～体部上半が直立ぎみに外傾し、体部下半に緩やかな屈曲部を持ち底部に至る。焼成は良好で硬く締まり、内外共に赤褐色の色調を呈す。地文として土器の表裏には条痕が施され、外面は光沢を帯びる。口唇下には横位の文様帯が設けられる。文様は地文に巾１cm未満の薄い粘土帯を貼付し、粘土帯中央を篦状？の工具で押し引きし、工具の縁よりあふれた粘土を工具でナデ調整することにより断面三角形の微隆起線を表出させるものと考えられる。

微隆起線の幅は約１mm前後で、全体の文様は、右下がり／方向の微隆起線を多条施文した後、左下がり＼方向の文様を充填多条施文することにより、ｙ字状の幾何学状文を構成する。

２は小波状口縁を持つ深鉢で、体部から底部にかけて欠損する。推定口径は23.8cm、残存高12.3cmをはかる。胎土には雲母・石英粒と微量の繊維が含まれ、器壁は口縁部付近で約４mm、体部上半部で約５mmをはかる。器形は口縁部～体部上半が直立ぎみに立ち上がり、口唇部付近でやや外反する。焼成は良好で硬く締まり、内外共に赤褐色の色調を呈す。土器の内外面には条痕が施されるが、体部外面の条痕は磨消される。文様帯は口唇下に設けられ、微隆起線は前述した１の施文方法と異なり、器面に貼付された細い粘土紐の縁に篦状工具によるナデ調整を施すことにより微隆起線が表出されるものである。全体の文様は山形状の区画文を施文した後、区画内外に梯子状文を施文することにより山形状文を基調とした幾何学状の文様が構成される。

３は小波状口縁を持つ深鉢で、体部下半以下が欠損する。約１/５周の破片より推定される口径を復元したもので、推定口径22.8cm、残存高18.4cmをはかる。胎土には雲母・石英粒が含まれ、繊維は含まない。器壁は口縁部付近で約４mm、体部で約５～６mmをはかる。器形は口縁部～体部上半が直立ぎみに立ち上がり、体部中央付近に緩やかな膨らみを持つ。焼成は良好で硬く締まり、外面は灰褐色・内面は暗赤褐色の色調を呈す。土器の外面に斜位、内面に横位の条痕が施される。文様帯は口唇下に設けられ、微隆起線は前述した２の施文方法と同様に、器面に貼付された細い粘土紐の縁に篦状工具によるナデ調整を施すことにより微隆起線が表出されるものである。全体の文様は梯子状文を山形状に配し、山形状の文様内に梯子状文を施文する。

４～21は同一個体の土器破片で、４～14が口縁部片、15・16が体部上半部片、17～20が体部下半片、21が平底底部片である。胎土には雲母・石英粒が含まれ、繊維は含まない。器壁は口縁部付近で約４mm、体部で約５～６mmをはかる。焼成は良好で硬く締まり、内外面は赤褐色の色調を呈す。土器の外面に横位・斜位の条痕が施される。口縁部付近内面に横位の条痕が見られるが、体部上半から底部にかけての内面器表面は細かく剥落しており、条痕等を観察することができなかった。文様帯は口唇下に設けられ、微隆起線は器面に貼付された細い粘土紐の縁に篦状工具によるナデ調整を施すことにより微隆起線が表出されるものである。全体の文様は梯子状文・区画内充填文を幾何学状に配したものである。

22・24は同一個体の口唇部を欠く口縁部付近の破片である。焼成は良好で硬く締まり、外面は暗赤褐色、内面は明赤褐色の色調を呈す。胎土には微量の長石・石英粒が含まれ、雲母・繊維は含まない。内外面には条痕が施され、外面には微隆起線による梯子状文が幾何学状に施される。

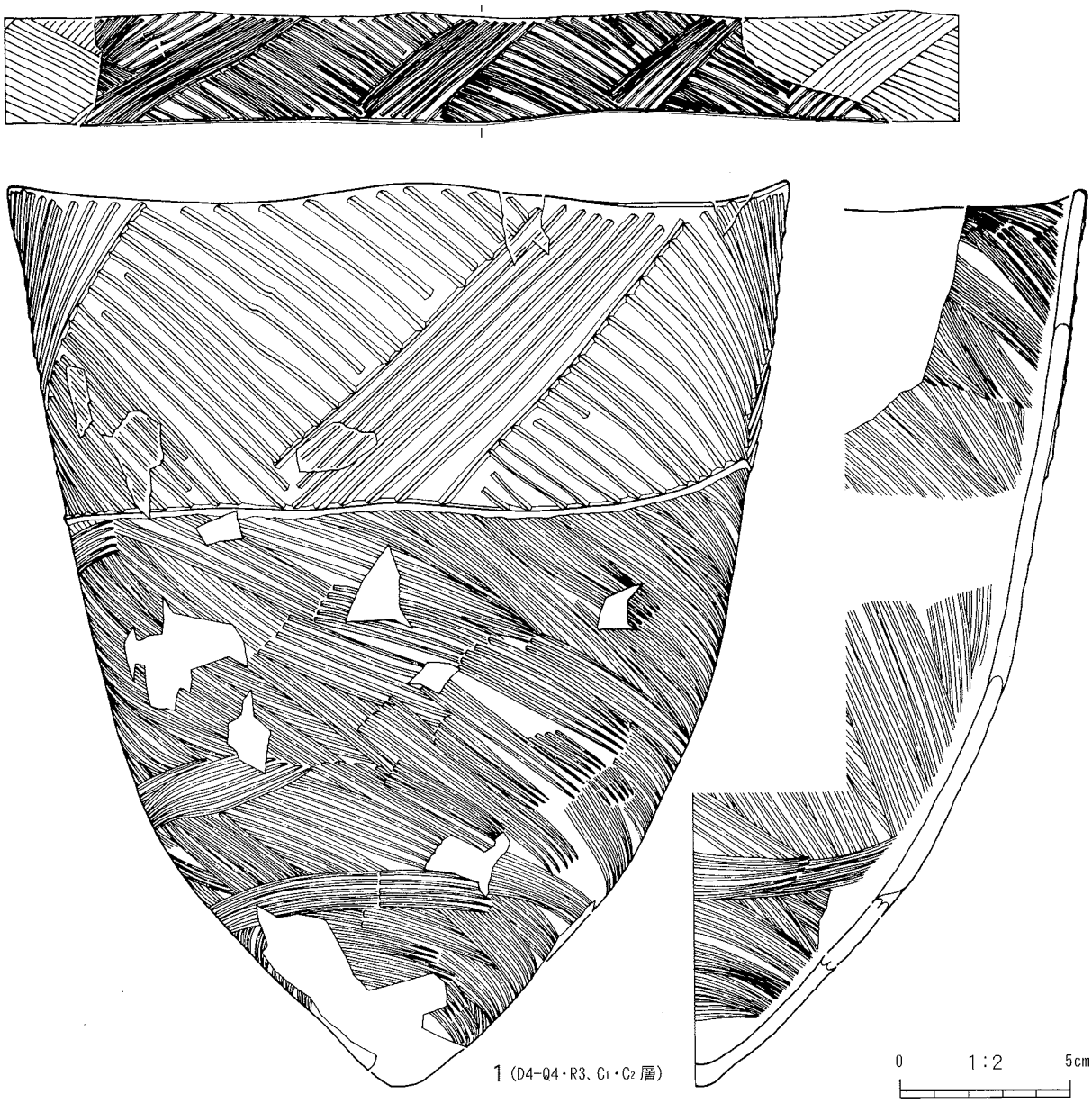
23・25は口縁部片である。内外面には条痕が施され、外面には微隆起線による文様が施文される。26～30は同一個体で、口縁部文様帯下半から体部上半にかけてのものである。焼成は不良で脆い。胎土には少量の雲母と微量の繊維が含まれる。文様帯には微隆起線による文様が施され、体部外面は条痕が施された後に、縦位方向のナデ調整により磨消される。31～36は同一個体と考

えられる破片である。内面が剥落したものもあるが内外面には条痕が施され、31～34には微隆起線による文様が施される。

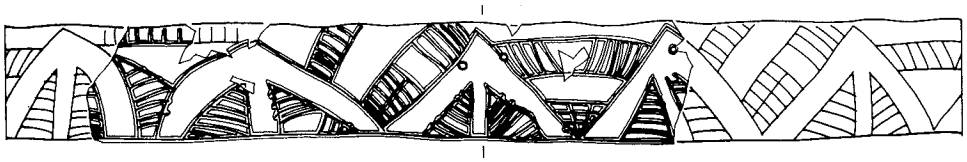
微隆起線文　37～43は同一個体で、口縁部文様帯に微隆起線による幾何学文、体部上半より底部にかけて沈線・短沈線による文様が描かれた尖底深鉢である。約1/3周の破片より推定される体部上半の径は21.2cm、推定器高は約30cmである。胎土には石英粒・微量の繊維が含まれ、雲母は含まれない。器壁の厚さは全体的に4mm～6mmで、器形は口縁部～体部上半が直立ぎみに立ち上がり、体部下半付近に緩やかな膨らみを持つ。焼成は良好で硬く締まり、外面は褐色・内面は暗赤褐色の色調を呈す。土器の内外面には地文として条痕が施され、地文上に主体となる文様が施される。

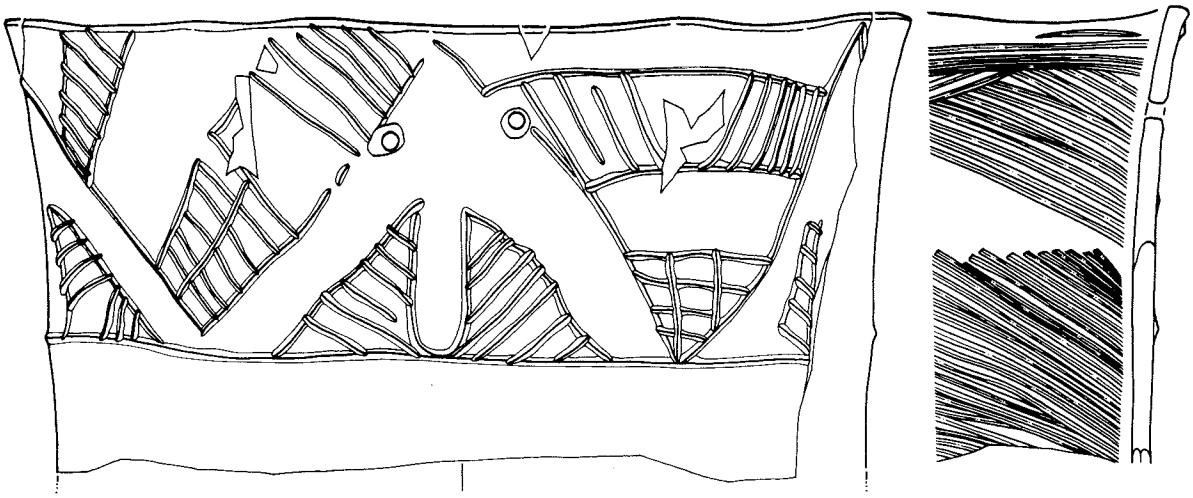
沈線文

沈線文　44～47は同一個体で、口縁部はやや内湾して体部に膨らみを持ち、乳頭状の尖底部を持つ深鉢である。口縁部の径は23.2cm、器高は26.9cmをはかる。胎土には雲母・石英粒を多量に含む他、微量の繊維も含む。焼成は不良で脆い。文様は縦位・横位・格子目状の平行沈線を横位展開に交互多段施文するものである。

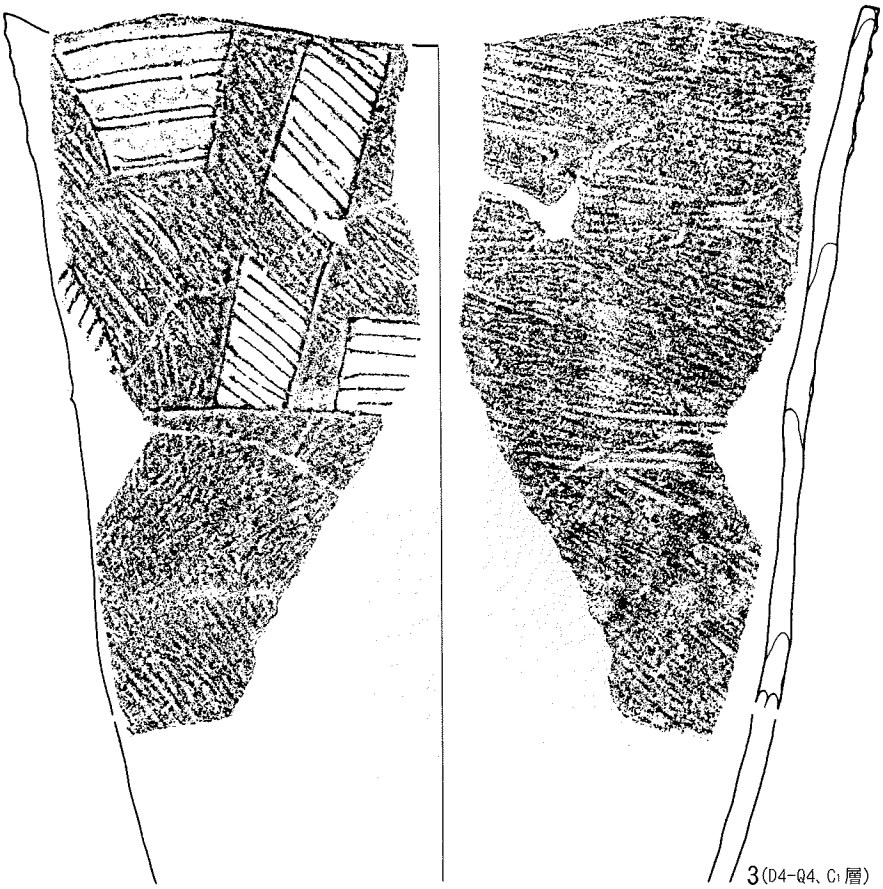


第6図　RD007土坑出土遺物（1）





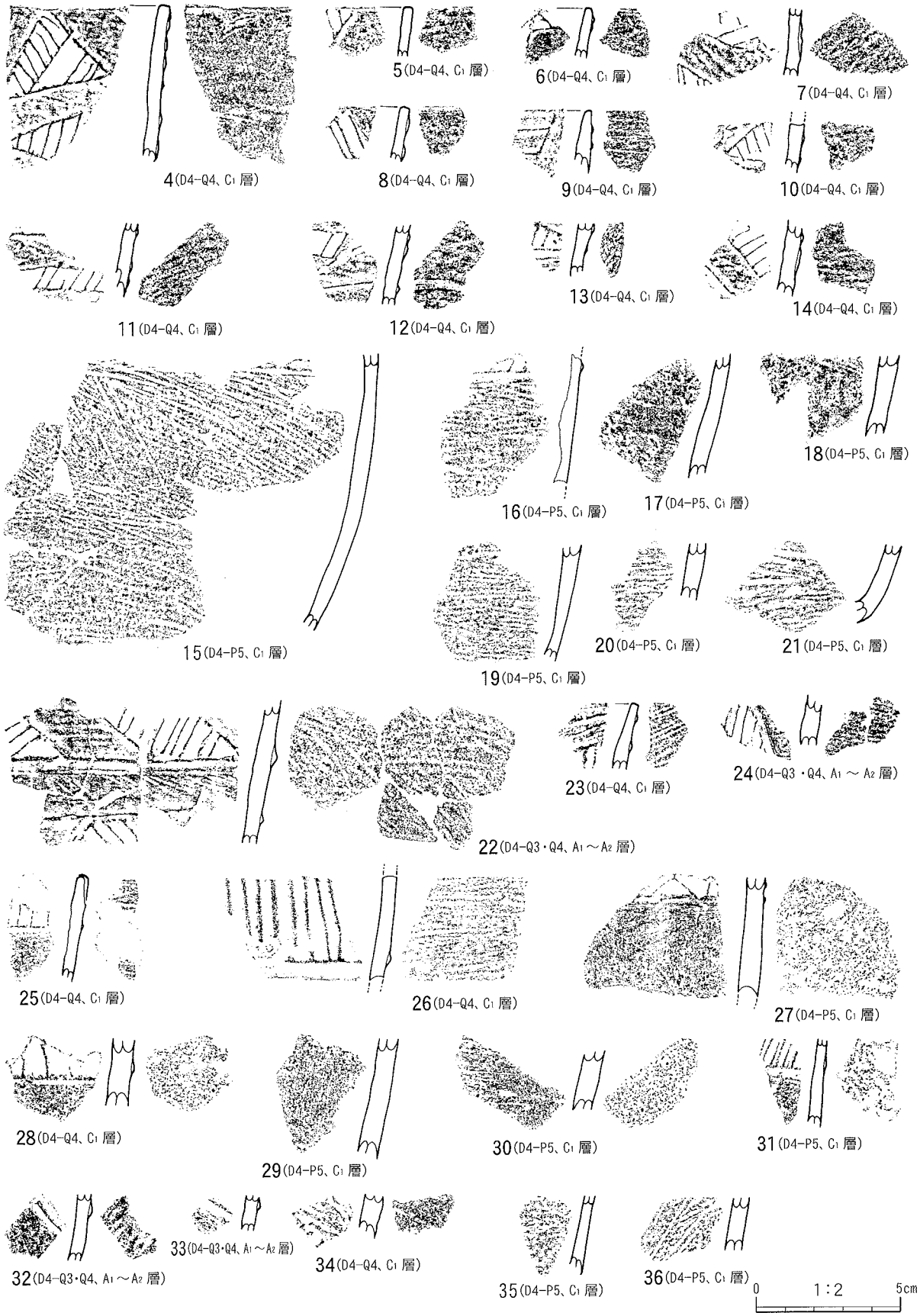
2(D4-Q3・Q4、C1層)



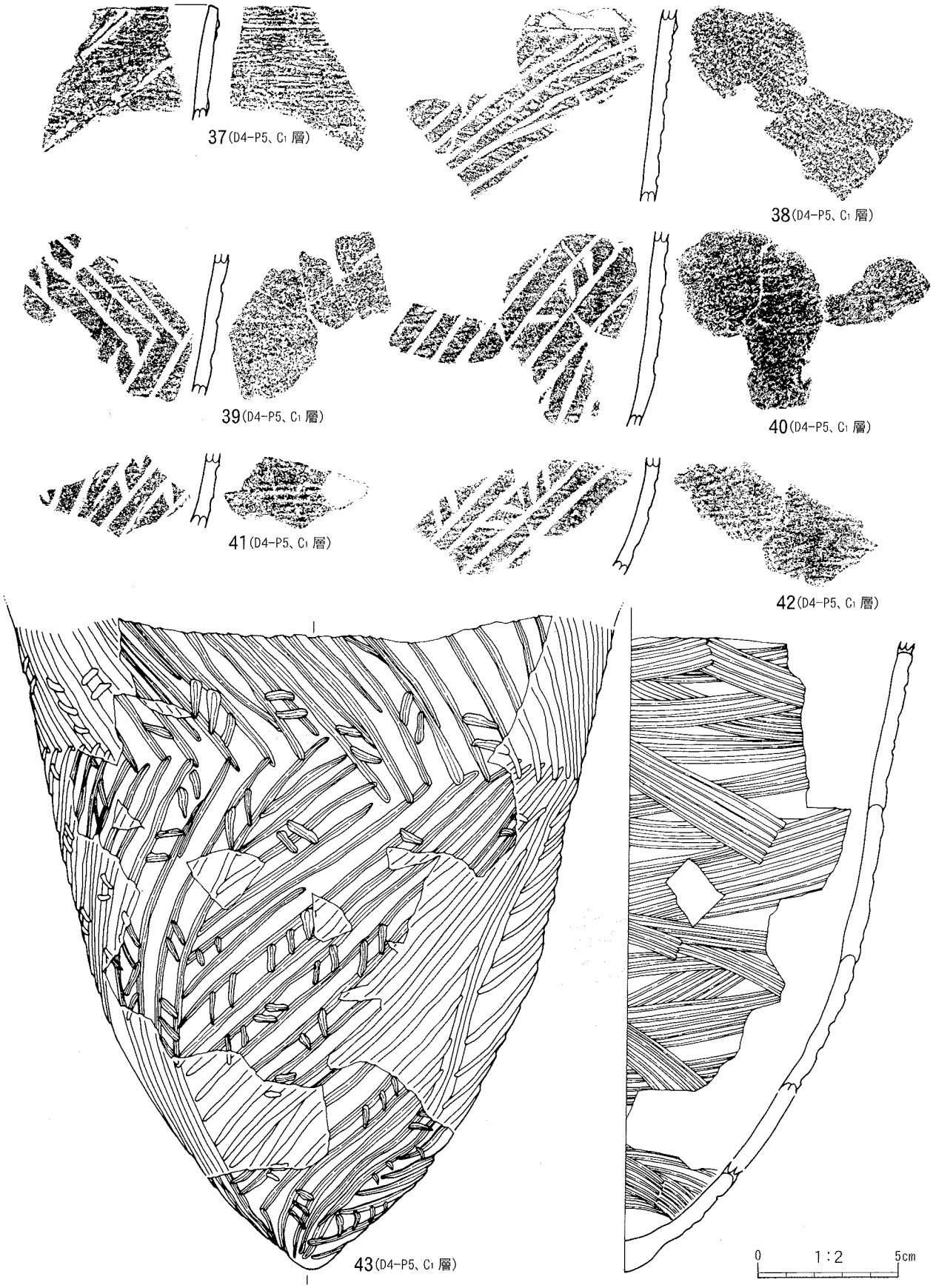
3(D4-Q4、C1層)

0 1:2 5cm

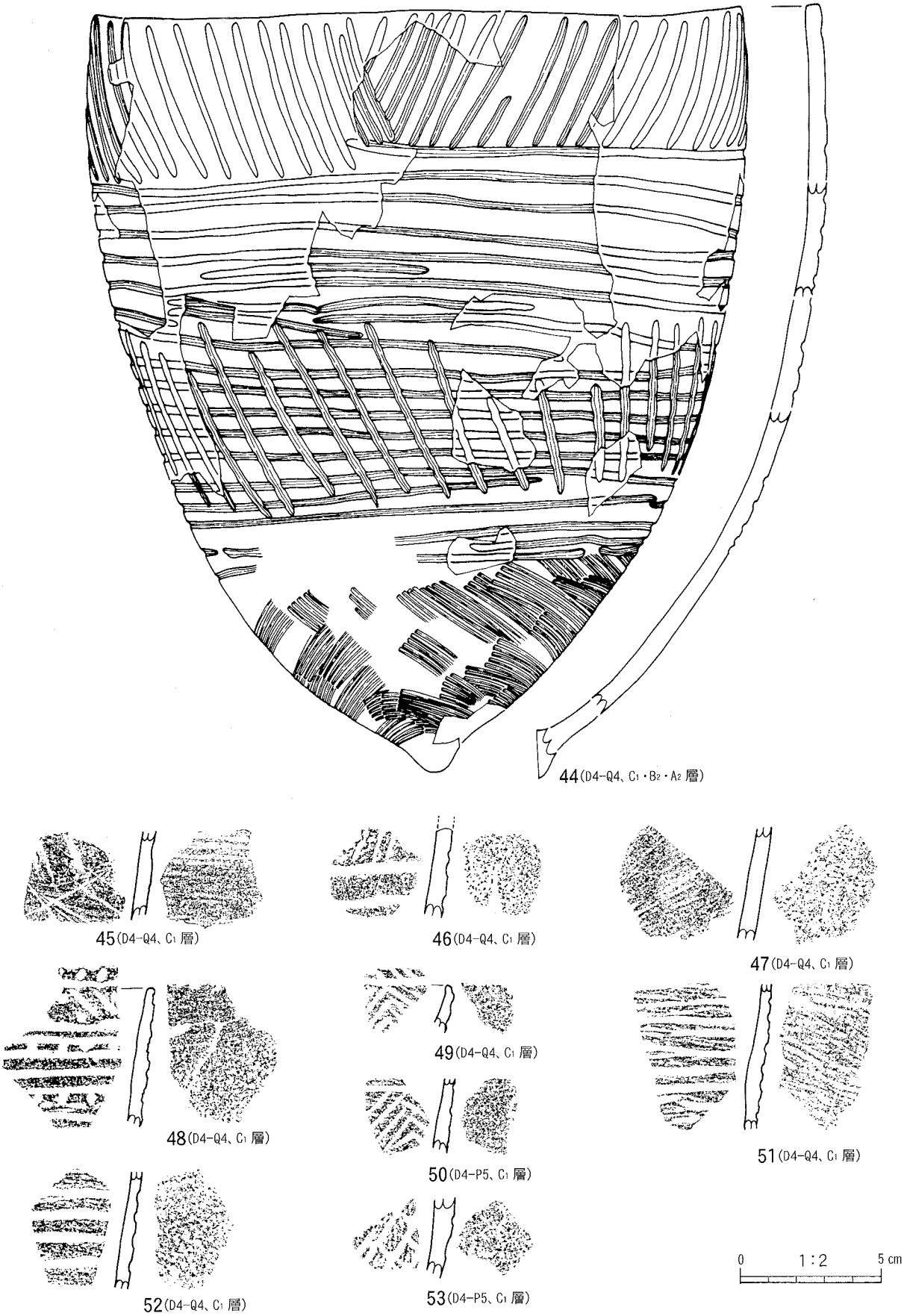
第7図　RD007土坑出土遺物（2）



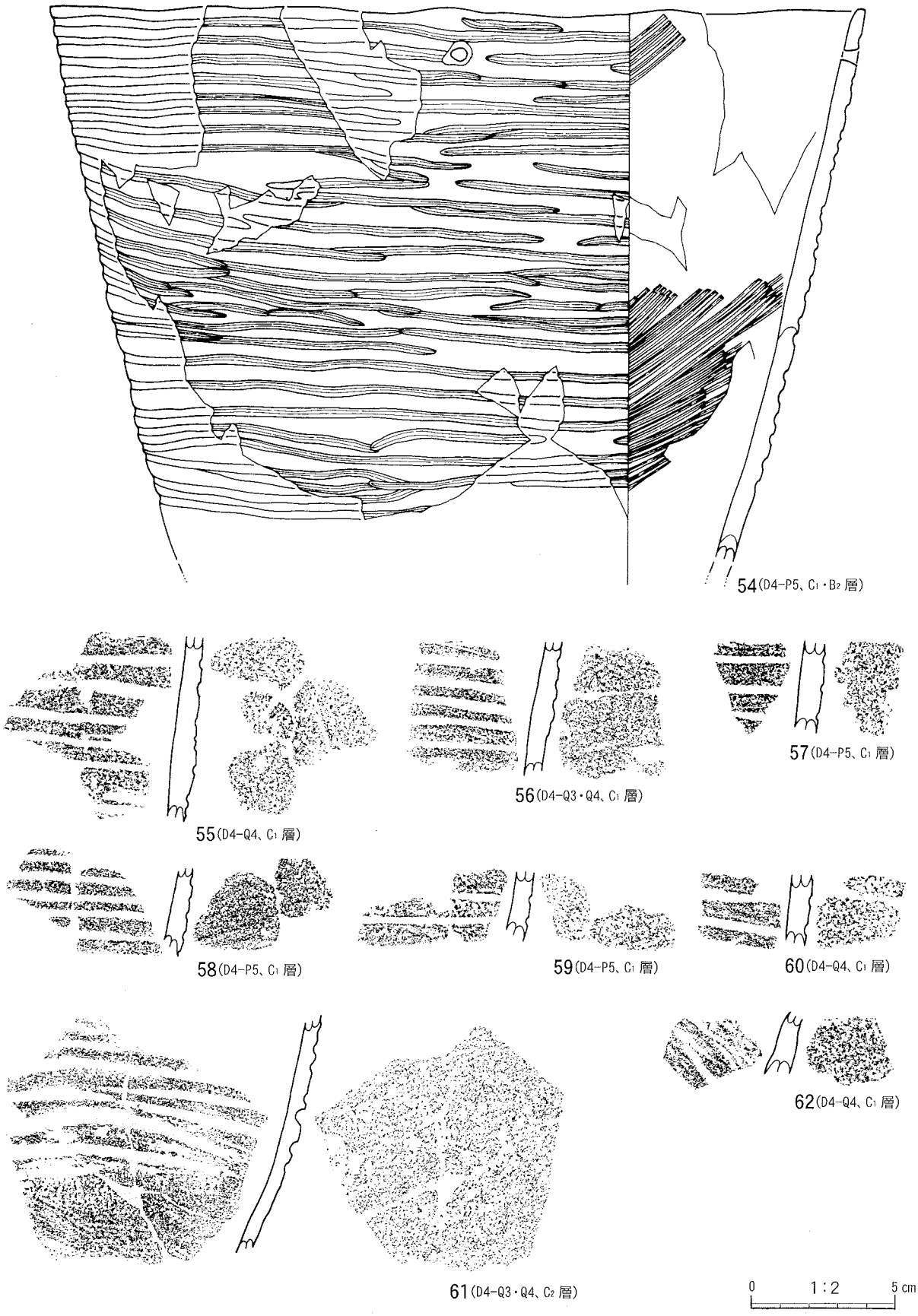
第８図　RD007 土坑出土遺物（3）



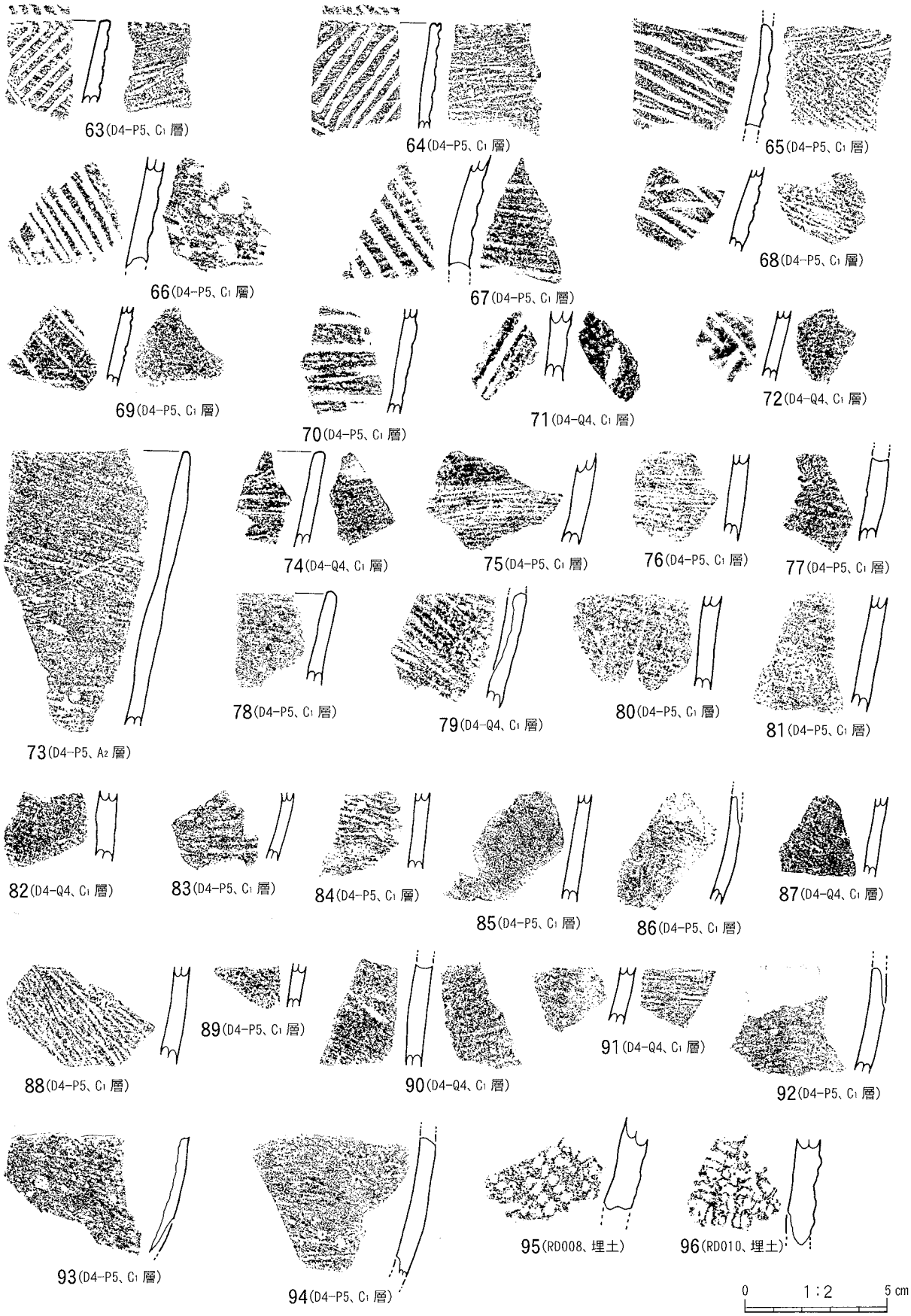
第 9 図　RD007 土坑出土遺物 (4)



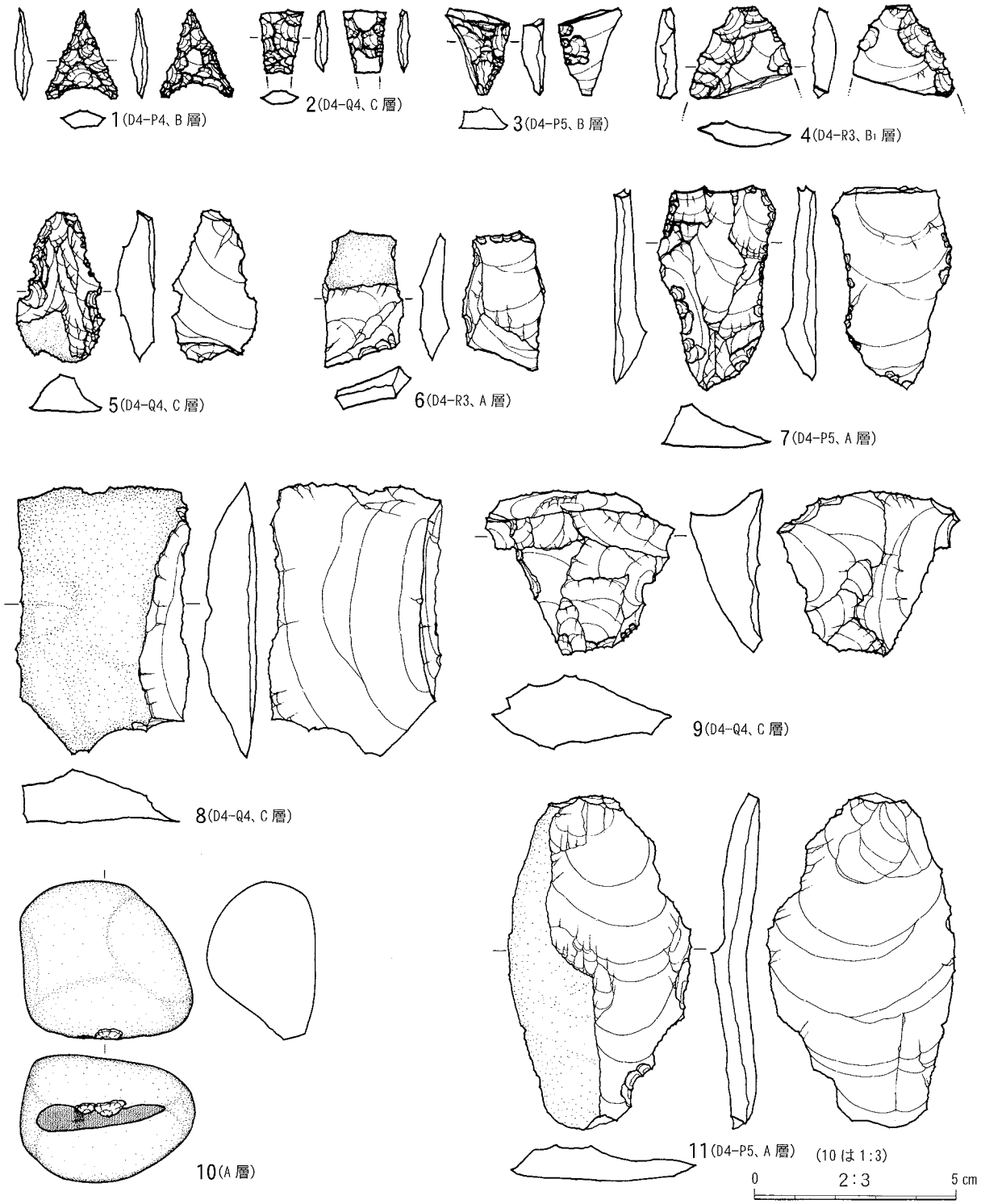
第 10 図　RD007 土坑出土遺物（5）



第 11 図　RD007 土坑出土遺物（6）



第 12 図　RD007・008・010 土坑出土遺物（7）



第 13 図　RD007 土坑出土遺物（8）

48は口唇部に円形の刺突が施され、口縁下には斜位・横位の平行沈線、円形刺突が施される深鉢である。49・50は鋸歯状沈線を施す深鉢口縁部片で、49の口唇部には刻目が施される。53は格子目状に沈線を施文するものである。

51～61は横位の平行沈線が多重に施される深鉢で、54～62は同一個体である。54は口縁部から体部下半にかけて横位の平行沈線を多重施文するもので、体部下半より下位には文様が施されない。胎土には多量の雲母・石英粒が含まれる。

63・64は口唇部に刻目が施される深鉢口縁部片で、方向を違えた斜位の多重平行沈線による幾何学文が施文される。65～69は斜位の多重平行沈線が施文される深鉢片で、68は斜位の平行沈線間に短沈線を充填するものである。69～72は沈線による文様が施される深鉢体部片で、69は斜格子目文、70は横位多重平行沈線文、71は斜位平行沈線文、72は矢羽根状沈線文を施文する深鉢である。

条痕文　73～94は条痕のみ施されたもので、73・74・78は口縁部、75～77・79～91は体部、92～94は体部下半～底部にかけての破片である。

石器（第13図１～11）

ＲＤ００７土坑より石鏃２点・未完成品？２点、削器及び微細剥離のある剥片６点、敲打磨石１点、剥片３点、砕片94点、自然礫14点が出土している。剥片石器の多くは珪質頁岩を利用しているが、図示されなかった砕片には珪質頁岩の他、安山岩・玉髄・硬質砂岩などが見られ、自然礫には石英の円礫２点、凝灰岩角礫12点が出土している。

１は脚部先端が直線的にのび、先端部がやや突出する凹基の石鏃である。腹面全周縁を剥離調整したのち背面右側縁→左側縁→基部の順で押圧剥離を施したものである。石材は珪質頁岩である。２は両端部が欠損する石鏃で、背面右側縁→左側縁→腹面右側縁→左側縁の順で押圧剥離を施したもので腹面には火熱によるハジケ痕がある。石材は珪質頁岩である。３・４は石鏃の未完成品と考えられるものである。３は背面右側縁より剥離加工を施す際に破損したものと考えられ、４は全周縁を整形する際に破損したものと考えられる。石材は３が珪質頁岩、４は砂質の頁岩である。５は背面両側縁を鋸歯状に調整した削器で、石材は珪質頁岩である。６は剥片両端を折断し、刃部を切出状にした削器である。７は先端が尖る削器で、背面両側縁に細かい剥離調整が施される。石材は珪質頁岩である。８は自然礫皮面を残す剥片で、背面左側縁に微細剥離痕が見られる。石材は砂質の安山岩と考えられる。９は両極からの剥離が行われた石核を削器としたもので、背面？左側縁には刃こぼれと思われる微細剥離が見られる。石材は玉髄と考えられる。11は断面形状が三角形を呈す敲打磨石で、磨面の長辺端には敲打の際に生じた剥離痕が見られる。石材は凝灰岩である。

ＲＤ００８土坑（第５図）

時　　期　早期末葉？　　**平面形**　楕円形　　**長軸の傾き**　W15°N

規　　模　長軸上端1.61m・下端1.41m、短軸上端0.85m・下端0.68m、深さ0.38m

掘込面　削平　　**検出面**　Ⅵ層　　**壁の状態**　外傾して立ち上がる。

埋　　土　自然堆積によるもので、大きくＡ・Ｂ層に大別され、Ｂ層はさらに２層に細別される。

A（A_1）層―　スコリア粒を多量に含む黒褐色土を主体に塊状の暗褐色土を含む層。少量の炭化物を含む。かたく、しまりのある層。

B層―　スコリア粒を多量に含む暗褐色土・褐色土を主体とする層。B_1層は褐色土を少量含み、B_2層は褐色土を主体に、塊状の暗褐色土が混じる。全体的に極めてかたく、密にしまる。

出土遺物　（第12図95）　95は胎土に多量の雲母を含む深鉢体部片である。表面にはＲＬ縄文が施され、裏面には浅い条痕状の調整痕が見られる。

ＲＤ００９土坑（第５図）

時　　期　早期　　**平面形**　楕円形？（西半部を撹乱される）　　**長軸の傾き**　N56°W

規　　模　長軸上端0.8m以上・下端0.68m以上、短軸上端1.1m・下端0.68m、深さ0.16～0.21m

掘込面　削平　　**検出面**　Ⅴ層　　**壁の状態**　外傾して立ち上がる。

埋　　土　自然堆積によるもので、大きくＡ・Ｂ層に大別され、Ｂ層はさらに２層に細別される。層相はＲＤ008土坑と近似する。

A（A_1）層―　スコリア粒を多量に含む黒褐色土を主体に塊状の暗褐色土を含む層。少量の炭化物を含む。かたく、しまりのある層。

B層―　スコリア粒を多量に含む暗褐色土を主体とする層。B_1層は褐色土を少量含み、B_2層は塊状の暗褐色土と褐色土が混合し、B_3層は褐色土の割合が多くなる。全体的に極めてかたく、密にしまる。$B_{1・2}$層には少量の炭化物が含まれる。

遺物の出土状況　B_1層下部より剥片が集中して出土している。土坑埋土中から砕片等が出土しなかったことから剥片貯蔵を目的とした土坑と考えることができる。

出土遺物　（第14図１～８）　１～８は頁岩製の剥片である。打撃方向に規則性は見られず、打面を転移させながらの剥離であったことが考えられる。６・８に微細剥離（刃こぼれ？）が見られる他は肉眼で観察できる顕著な二次加工痕は観察されなかった。

ＲＤ０１０土坑（第５図）

時　　期　早期末葉？　　**平面形**　不整円形　　**長軸の傾き**　N41°W

規　　模　長軸上端1.39m・下端1.02m、短軸上端1.19m・下端0.82m、深さ0.30～0.36m

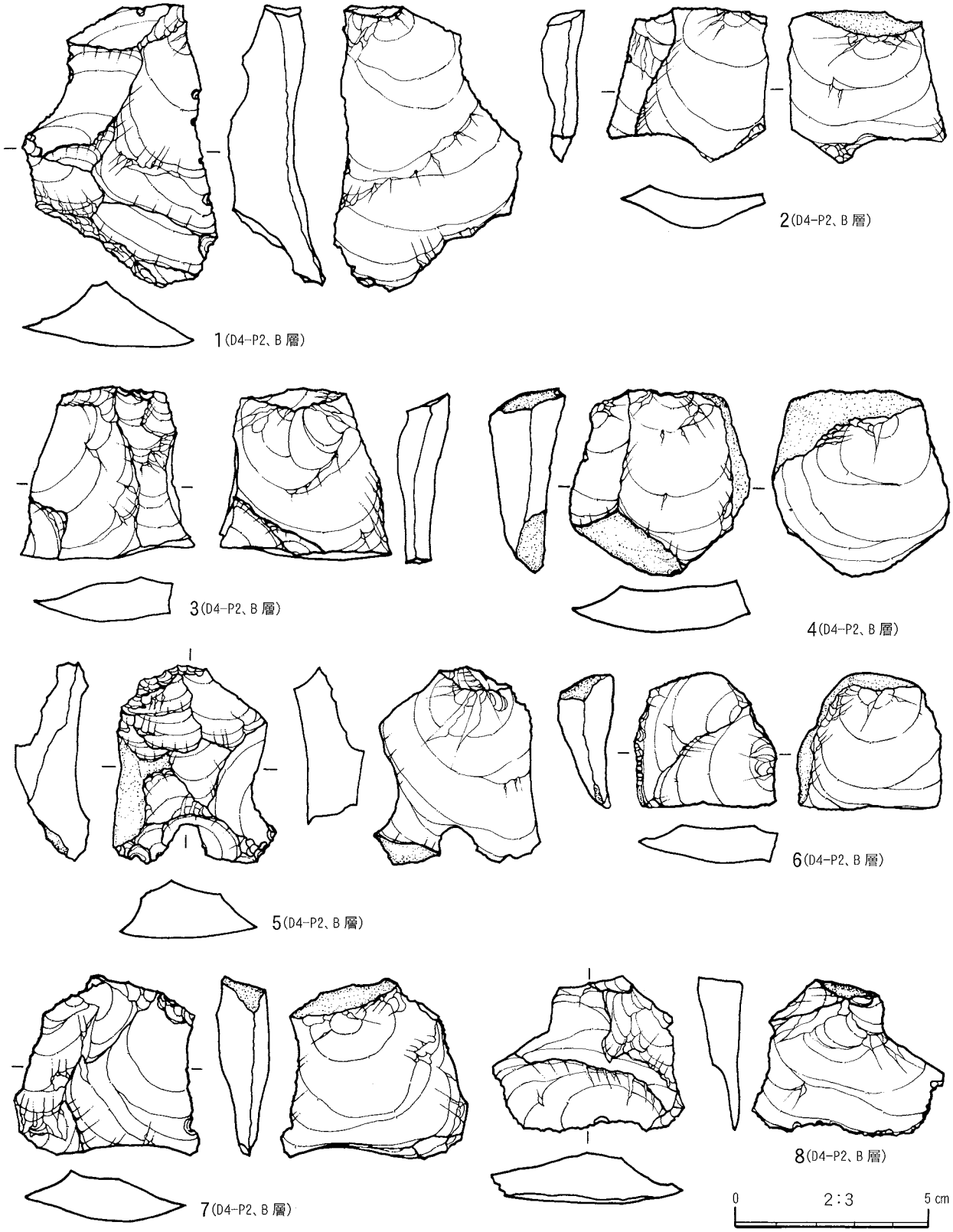
掘込面　削平　　**検出面**　Ⅵ層　　**壁の状態**　外傾して立ち上がる。

埋　　土　自然堆積によるもので、大きくＡ・Ｂ層に大別され、Ａ層は４層、Ｂ層は２層に細別される。層相はＲＤ008土坑など他の早期後葉～末葉の遺構埋土と近似する。

A層―　スコリア粒を多量に含む暗褐色土を主体に小塊状の黒褐色土を含む層。少量の炭化物を含む。かたく、しまりのある層。A_1層は暗褐色が強く、下層ほど明るい色調となりA_4層では塊状のスコリア粒を多量に含む黄褐色火山灰が多量に混入する。

B層―　スコリア粒を多量に含む暗褐色土を主体とする層。B_1層は塊状の黒褐色土を含み、B_2層には塊状の黒褐色土と粒状の黄褐色土が混入する。

出土遺物　（第12図96）　96は胎土に少量の繊維、微量の雲母を含む深鉢体部片。表面には縄文が施され、裏面には浅い条痕状の調整痕が見られる。



第 14 図　RD009 土坑出土遺物

ＲＤ０１１土坑（第５図）

時　　期　縄文時代　　**平面形**　楕円形　　**長軸の傾き**　N44° W

規　　模　長軸上端1.71m・下端1.46m、短軸上端1.22m・下端0.88m、深さ　0.32～0.34m

掘込面　削平　　**検出面**　Ⅵ層上面　　**壁の状態**　外傾して立ち上がる。

埋　　土　自然堆積によるもので、大きくＡ・Ｂ・Ｃ層に大別され、Ｂ層はさらに２層に細別される。層相はＲＤ008土坑など他の早期後葉～末葉の遺構埋土と近似する。

Ａ層―　A_1 層はスコリア粒を多量に含み、黒褐色土を主体に塊状の暗褐色土を含む層。全体的にかたく、密にしまる。

Ｂ層―　スコリア粒を多量に含む暗褐色土を主体とする層。B_1層は褐色土を少量含み、B_2層は褐色土の割合が多くなる。全体的に極めてかたく、密にしまる。$B_{1・2}$層には少量の炭化物が含まれる。

Ｃ層―　C_1層は黄褐色土と暗褐色土の混合土。スコリア粒を多量に含み、極めてかたく、密にしまる。

遺　　物　なし

ＲＤ０１２土坑（第５図）

時　　期　早期後葉～末葉　　**平面形**　円形

規　　模　長軸上端1.66m・下端0.59m、短軸上端1.49m・下端0.62m、深さ1.20m

掘込面　削平　　**検出面**　Ⅵ層上面

壁の状態　底面より上部約0.3m付近までは直立ぎみに立ち上がり、さらに上部は大きく外傾する。

底面の状態　ほぼ平坦。底面より５口の小ピットが掘り込まれる。深さは0.25m～0.20mである。

埋　　土　自然堆積によるもので、大きくＡ・Ｂ層に大別され、Ａ層は５層、Ｂ層は８層に細別される。層相はＲＤ008土坑など他の早期後葉～末葉の遺構埋土と近似する。

Ａ層―　スコリア粒を多量に含む暗褐色土を主体に小塊状の黒褐色土・褐色土を含む層。極めてかたく、密にしまる層。A_1層は暗褐色が強く、A_2層は地山である火山灰土の崩壊土である。上記した堆積関係はA_5層まで交互に続く。

Ｂ層―　スコリア粒を多量に含む黒褐色土を主体とする層。B_1～$_3$層には微量の炭化物が含まれ、B_5層壁際上位には地山崩壊土（B_4層）が堆積する。B_5層以下は上層に比して埋土がやや軟らかい。B_8層は褐色土・塊状のスコリアを多量に含む層である。

遺　　物　なし

（２）古代の遺構と遺物

遺　構　古代の遺構は、埋土に白色火山灰を含む土坑２基（ＲＤ５０１・５０２）、円形周溝３条（ＲＧ５０１・５０６・５０７）が検出されている。詳細な時代・時期については不明であるが、ＲＧ５０１溝跡C_1層上面より平安時代（９世紀前半？）の須恵器坏（第18図１）・須恵器長頸壺片・土師器坏小片が出土している他、ＲＧ５０６溝跡Ｂ層より土師器坏小片が出土している。なお、ＲＧ５０１溝跡は平成２年度の第１次調査で検出された溝跡の延長部である。（第15図）

遺　物　遺構外からは、古墳時代（５世紀？）の所産と考えられる土師器坏・甕、続縄文土器（北大Ｉ式）、黒曜石製掻器・剥片・石核などの遺物が出土している。今回の調査では僅かな出土量であったが、平成２年度に実施された第１次発掘調査（未報告）ではややまとまった資料が得られていることから今回の報告に合わせて掲載した（一部の資料については盛岡市教育委員会1997.3『永福寺山遺跡』）に掲載。本書にて再掲載される遺物有り）。

ＲＧ５０１円形周溝（第16図）

時　期　平安時代？

平面形　第１次調査で平面形が確認されている（第３図）。南部に開口部を持つ馬蹄形を呈し、今回確認されたのは溝の北端部付近に相当するが末端部は攪乱される。

規　模　周溝外径7.45m以上・内径5.90m以上、溝上端幅1.72m・下端幅1.21m、深さ0.72m

掘込面　削平　**検出面**　Ⅳ～Ｖ層上面　**壁の状態**　外傾して立ち上がる。

底面の状態　ほぼ平坦であるが部分により深く掘り込まれる。

埋　土　自然堆積によるもので、大きくＡ・Ｂ・Ｃ層に大別され、Ａ層は２層、Ｂ層は４層、Ｃ層は５層に細別される。Ｃ層は全体的に南東方向に傾斜して堆積する。

Ａ層―　A_1層では白色火山灰が層状に堆積する。A_2層は黒褐色土を主体に小塊状の白色火山灰が含まれる。

Ｂ層―　黒褐色土を主体とする層。各層に地山の褐色火山灰土が混入し、各層の細分は褐色火山灰土の混入量によって行われた。B_2層には少量の炭化物が含まれる。

Ｃ層―　C_1・C_3・C_5層が黒褐色土・暗褐色土・褐色土の混合土を主体とし、C_2・C_4層が黒褐色土を主体とする。

遺物の出土状況　C_1層上面より須恵器坏（第19図１）、須恵器長頸壺片・土師器坏小片が出土した。

遺　物（第19図１）　１は須恵器坏である。回転ヘラ切後に底部をナデによって再調整する。器高4.2cm・口径13.2cm・底径6.3cmをはかる。

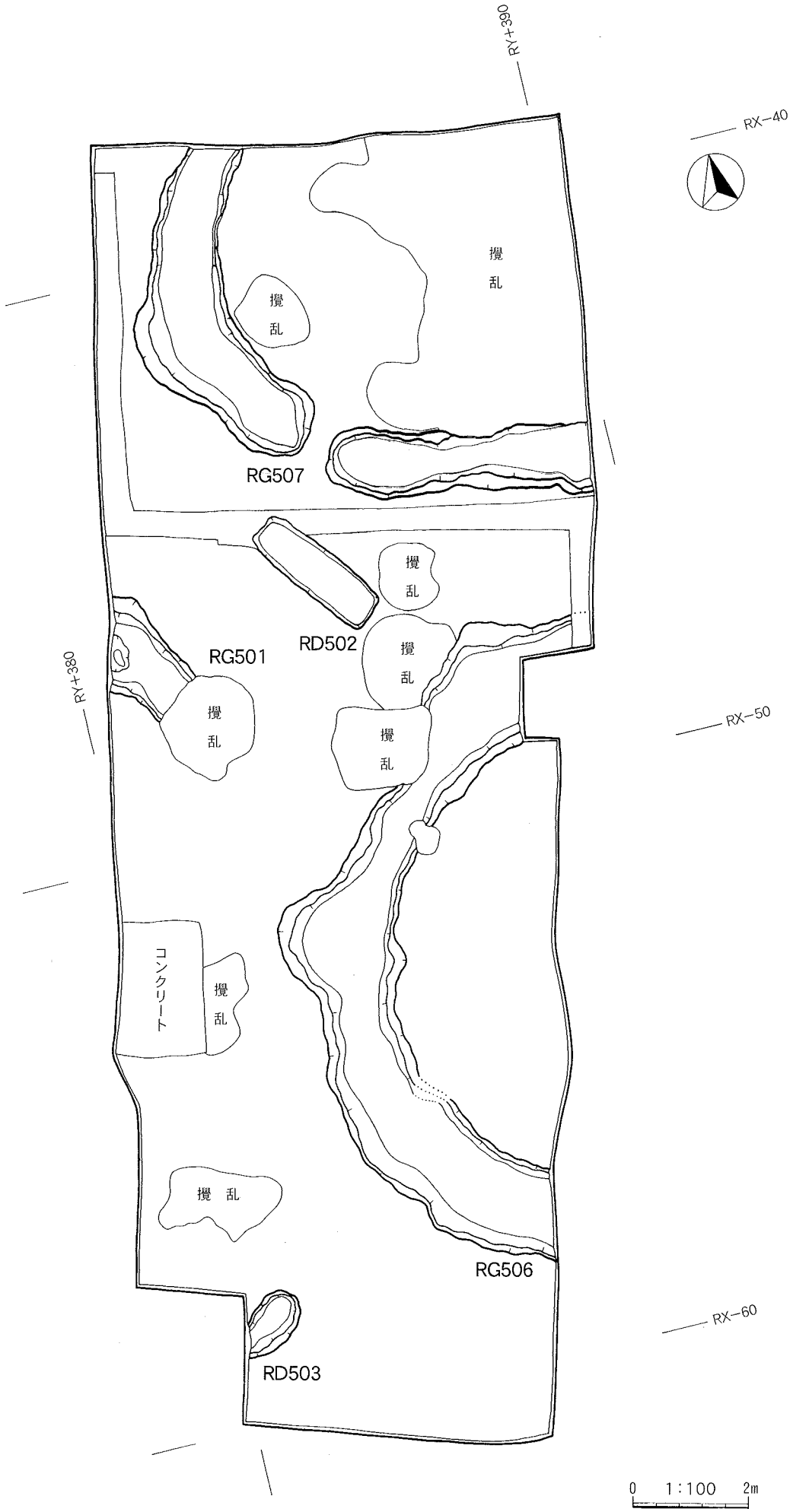
ＲＧ５０６円形周溝（第16図）

時　期　平安時代？　**平面形**　円形（馬蹄形）

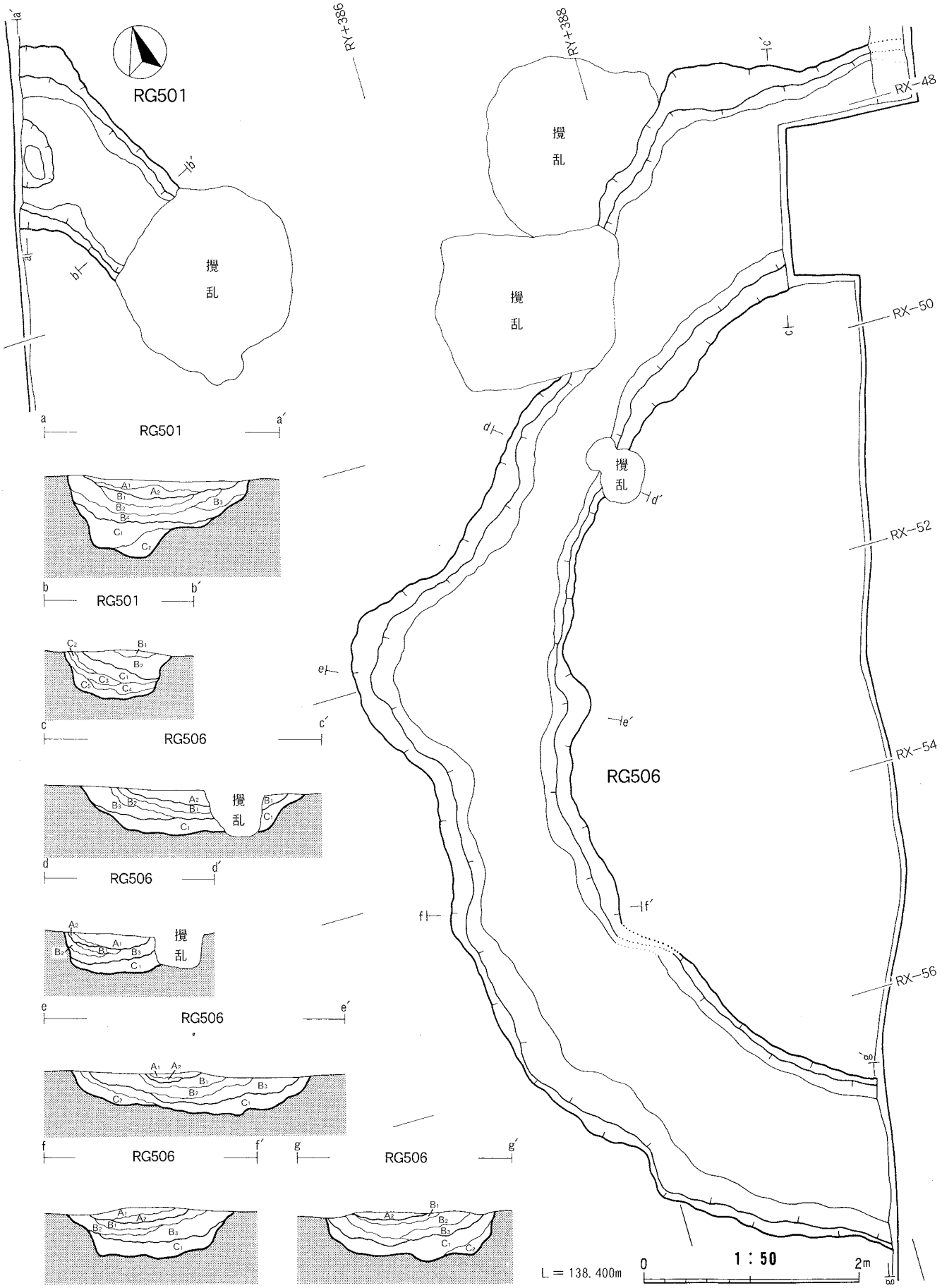
規　模　周溝外径11.0m以上・内径7.50m以上、溝上端幅0.89～2.26m・下端幅0.36～1.48m
深さ0.25～0.49m

掘込面　削平　**検出面**　Ⅳ～Ⅵ層上面　**壁の状態**　外傾して立ち上がる。

埋　土　自然堆積によるもので、層相はＲＧ５０１円形周溝とほぼ同様である。埋土は大きくＡ・Ｂ・



第15図　宿田遺跡第4次調査区全体図（古代）



第16図　RG501・506円形周溝跡

Ｃ層に大別され、Ａ層は２層、Ｂ層は３層、Ｃ層は２層に細別される。Ｂ層下部～Ｃ層では、周溝内側より埋土が流入したことを示す傾斜が認められる。

Ａ層―　A_1層では白色火山灰が層状に堆積する。A_2層は黒褐色土を主体に小塊状の白色火山灰が含まれる。

Ｂ層―　黒褐色土を主体とする層。各層に地山の褐色火山灰土が混入し、各層の細分は褐色火山灰土の混入量によって行われた。ＲＧ５０１周溝B_2層に相当する層が欠如する。

Ｃ層―　C_1層が黒褐色土・暗褐色土・褐色土の混合土を主体とし、C_2層が黒褐色土を主体とする。

遺　　物　図示しなかったが、C_1層上面より土師器坏小片が出土している。切離しは糸切りによるもので、内面は黒色処理されるものである。

ＲＧ５０７円形周溝（第17図）

時　　期　平安時代　　**平面形**　円形（馬蹄形）

規　　模　周溝外径9.12m以上・内径7.65m以上、溝上端幅0.88～1.75m・下端幅0.39～0.94m
深さ0.14～0.50m

掘込面　削平　　**検出面**　Ⅵ層上面　　壁の状態　直立ぎみに外傾して立ち上がる。

埋　　土　自然堆積によるもので、層相はＲＧ５０１円形周溝とほぼ同様である。埋土は大きくＡ・Ｂ・Ｃ層に大別され、Ａ層は２層、Ｂ層は３層、Ｃ層は３層に細別される。

Ａ層―　A_1層では白色火山灰が層状に堆積する。A_2層は黒褐色土を主体に小塊状の白色火山灰が含まれる。

Ｂ層―　黒褐色土を主体とする層。各層に地山の褐色火山灰土が混入し、各層の細分は褐色火山灰土の混入量によって行われた。ＲＧ５０１周溝B_2層に相当する層が欠如する。

Ｃ層―　C_1層が黒褐色土・暗褐色土・褐色土の混合土を主体とし、C_2層が黒褐色土を主体とする。C_3層は塊状の褐色火山灰土（地山土）を含む暗褐色土で、褐色火山灰土以外は軟らかく、しまりがない層である。　　**遺物**　なし

ＲＤ５０１土坑（第18図）

時　　期　古代　　**平面形**　長方形　　**長軸の傾き**　N39°W

規　　模　長軸上端2.47m・下端2.28m、短軸上端0.72m・下端0.69m、深さ0.42m

掘込面　削平　　**検出面**　Ⅵ層上面　　**壁の状態**　ほぼ直壁　　**底面の状態**　ほぼ平坦

埋　　土　自然堆積によるもので、大きくＡ・Ｂ・Ｃ層に大別され、Ｂ層はさらに５層に細別される。

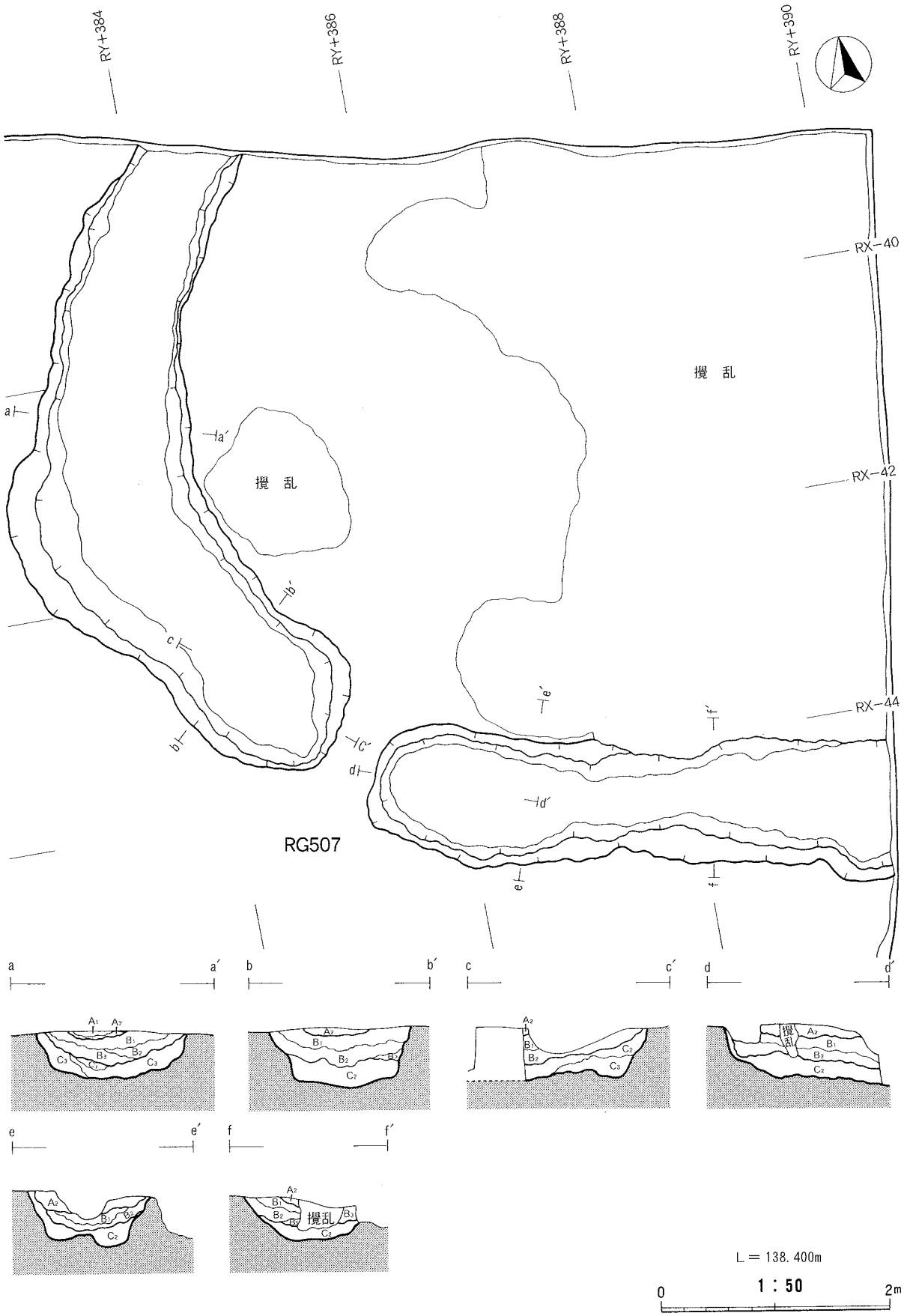
Ａ層―　A_1層は粉状の白色火山灰を含む黒褐色土層。

Ｂ層―　B_1～$_5$層は黒褐色土を主体とする層。各層に地山の褐色火山灰土が混入し、各層の細分は褐色火山灰土の混入量によって行われた。

Ｃ層―　C_1層は褐色土と黒褐色土の混合土。かたく、密にしまる。　　**遺物**　なし

ＲＤ５０２土坑（第18図）

時　　期　古代　　**平面形**　楕円形？（西端部は調査区にかかる）



第17図　RG507円形周溝跡

重複関係　ＲＤ００７土坑を切る　　**長軸の傾き**　N55°Ｅ　　**底面の状態**　ほぼ平坦

規　　模　長軸上端1.18m以上・下端1.08m以上、短軸上端0.75m・下端0.39m、深さ0.39m

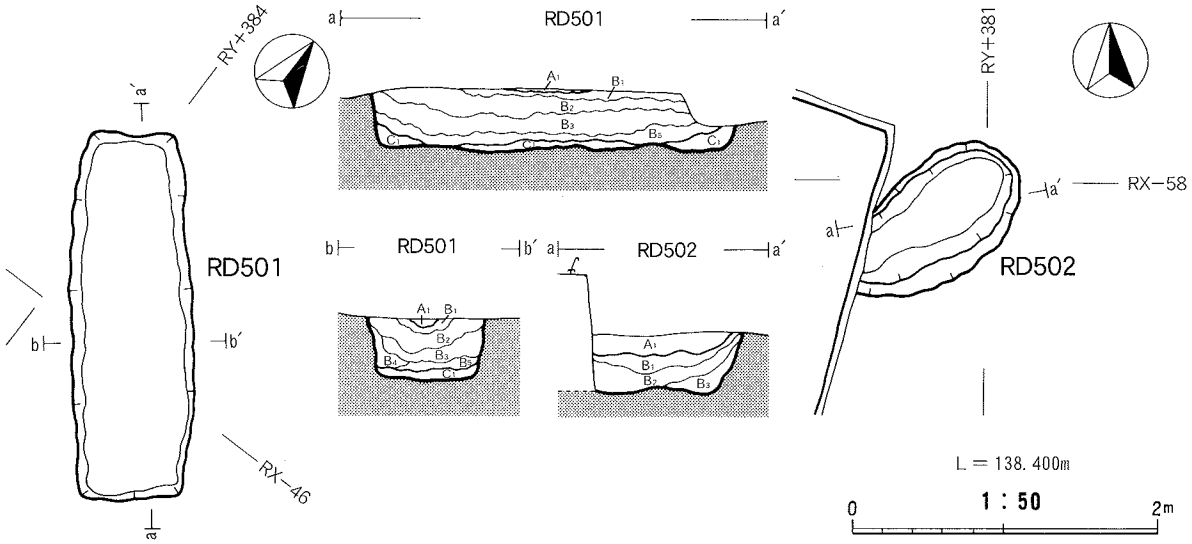
掘込面　削平　　**検出面**　Ⅳ層　　**壁の状態**　外傾して立ち上がる。

埋　　土　自然堆積によるもので、大きくＡ・Ｂ層に大別され、Ｂ層はさらに３層に細別される。

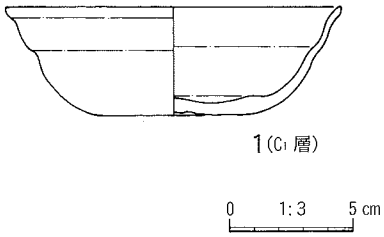
Ａ層―　A_1層は多量の白色火山灰、少量の炭化物を含む黒褐色土層。

Ｂ層―　B_1～$_3$層は黒褐色土を主体とする層。B_1層全体に小塊状の白色火山灰が含まれ、下層ほど白色火山灰の含有量が減じ、B_3層では火山灰を全く含まなくなる。

遺　　物　なし



第18図　RD501・502土坑



第19図　RG501円形周溝跡出土遺物

（３）遺物包含層・遺構外出土遺物

第４次調査区は過去の削平により旧地形及び包含層があまり残存していない。調査区南半部の一部、西辺中央部付近に縄文時代早期～前期初頭の遺物を主に包含する暗褐色土層（Ⅳ層）が若干確認されたのみである。今回の調査では分火山灰下部に発達する褐色・黄褐色土上部（Ⅵ層）まで層を精査しているが、Ⅴ・Ⅵ層より遺構・遺物は発見されなかった。なお、層位については同じ地形・地質上にある大館町・大新町遺跡で確認された層位・層位名を使用した。大館町・大新町遺跡で確認されている主な層位は下記の通りである。また、各層は遺跡別によりさらに細分される場合がある。

層　　位　Ⅰ層－表土・耕作土、Ⅱ層－黒色・黒褐色土主体－縄文時代後期以降の遺物が出土。Ⅲ層－黒褐色土（大館町Ⅲ層は暗褐色土）主体－上～中層からは縄文時代中期の遺物が出土。Ⅳ層－黒褐色土主体－Ⅴ層との斬位層付近より前期初頭の遺物が出土。Ⅴ層－暗褐色土主体－下層より早期初頭～前葉の遺物が、上層より早期前葉～中葉の遺物が出土。Ⅵ層－褐色・黄褐色火山灰土主体（分火山灰下部）－草創期～早期初頭の遺物が出土。

縄文時代の遺物

土器（第20図１～21）　１は縦位の貝殻腹縁文が施される深鉢口縁部片で、口唇部には刻目が施される。

２～16は表裏に条痕が施され、胎土に雲母を含む深鉢片である。２・３は微隆起線による幾何学状文が施される。４～15は体部、16は底部付近の部位と考えられる。

17～21は縄文が施される深鉢で、17は胎土に雲母を含み、18～21は胎土に繊維を含むものである。17は内面に浅い条痕が施され、20・21は原体圧痕による文様が施される深鉢で、21は口縁部である。

石器（第21図１～第23図26）　１は頁岩製の石鏃である。全周縁を押圧剥離によって調整加工するもので

剥片石器　ある。剥離順は大きく、背面左側縁→背面右側縁→背面基部→腹面右側縁→腹面左側縁→腹面基部→腹面左側先端部付近と考えられる。

２～４は石錐と考えられるものであるが、２・３は石鏃の未完成品である可能性がある。２は背面・腹面を粗い剥離で形状を整え、背面両側縁に細かい剥離を加えたものである。３は剥片の基端部付近を素材としたもので、腹面に細かい剥離が施される。４は遠端部が幅広い剥片を縦位に利用した石錐と考えられ、背面右側縁・腹面右側縁に微細な剥離調整が施される。石材は２～４全て頁岩製である。

５は箆状石器基部で刃部は欠損するものである。剥離順は大きく、腹面右側縁→背面左側縁→腹面左側縁→背面左側縁→背面基部→腹面基部と考えられる。石材は頁岩である。

６～８・10は側縁に刃こぼれが観察される頁岩製の剥片で、９は基部及び腹面左側縁基部～中央部・右側縁端部に剥離調整が施される頁岩製の削器である。11は背面全周縁に部分的な微細剥離痕のある頁岩製の剥片で、12は背面左側縁・腹面右側縁の同一部位に抉りを入れた頁岩製の剥片である。

13～16は全周縁に部分的な刃こぼれがある頁岩製の剥片である。17は剥片腹面縁端部・左側縁に剥離調整を施した頁岩製の掻器である。

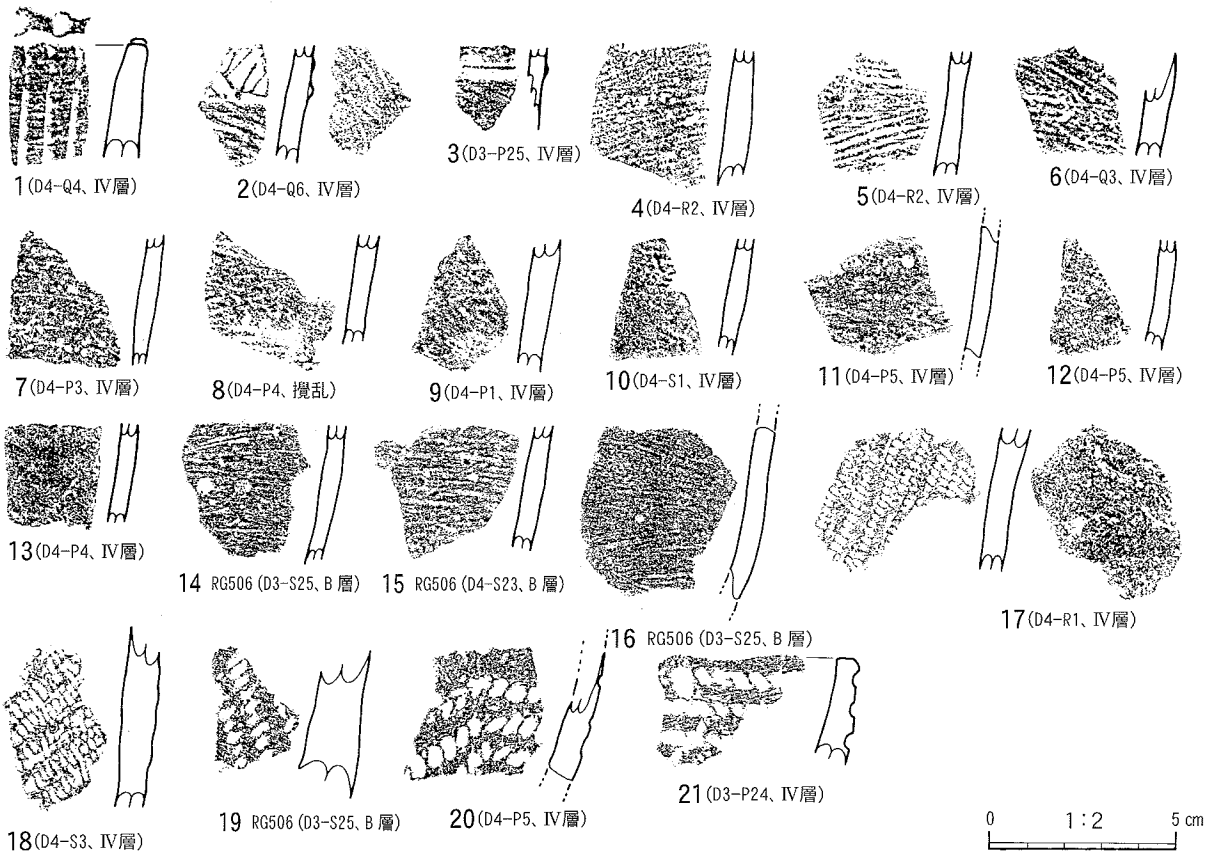
18は楔形石器、もしくは石核である。両面に多方向からの剥離が認められ、縁辺には細かい剥離調整が施される。石材は珪質頁岩である。

19は腹面基部に剥離調整を施した頁岩製の石匙？である。20は腹面右側縁に微細剥離を施した頁岩製の削器である。21・22は礫皮面を残す剥片で、刃こぼれと考えられる微細剥離痕が部分的に見られる。24は刃こぼれのある頁岩製の剥片である。

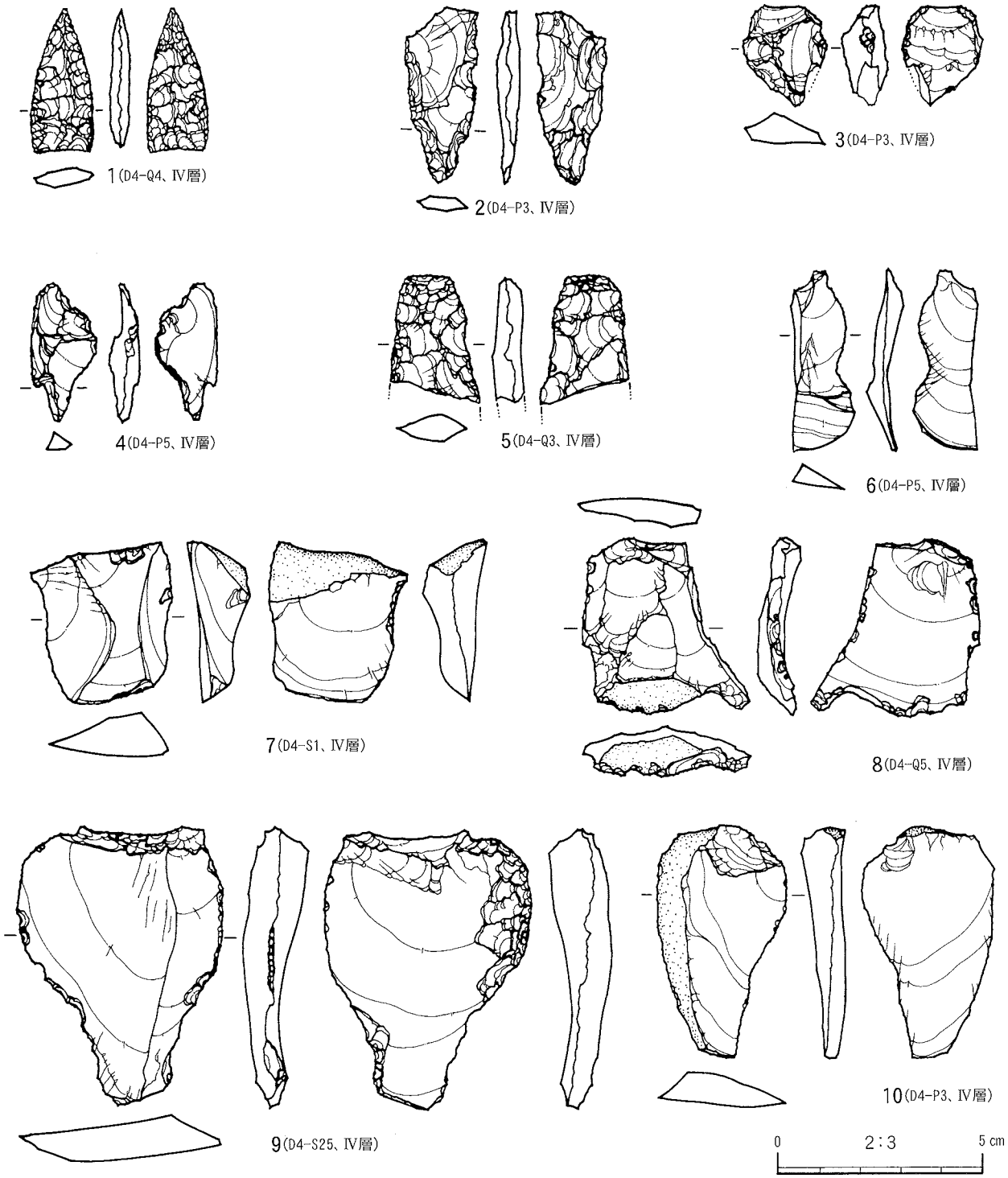
礫石器　23は断面三角形を呈す長円礫の一辺に磨面が形成される砂質凝灰岩製の敲打磨石である。磨面縁辺には使用時に生じたものと考えられる貝殻状の衝撃剥離が、左面には硬い物質を敲打した痕跡が観察される。25には３面の磨面が形成され、端部には硬い物質を敲打した痕跡が観察される。

なお、23・25の敲打磨石の磨面には、硬い物質を敲打した痕跡が観察されないほか、面の整形を示す痕跡も肉眼観察では不明瞭であった。また、23・25共に半割していながらも衝撃点ともいうべき箇所も不明瞭であった。しかし、23・25にも敲打の際に生じたものと考えられる剥離痕が磨面縁辺にあることから軟質の台（木材？）を利用した敲打作業を行うための石器であることが想定される。

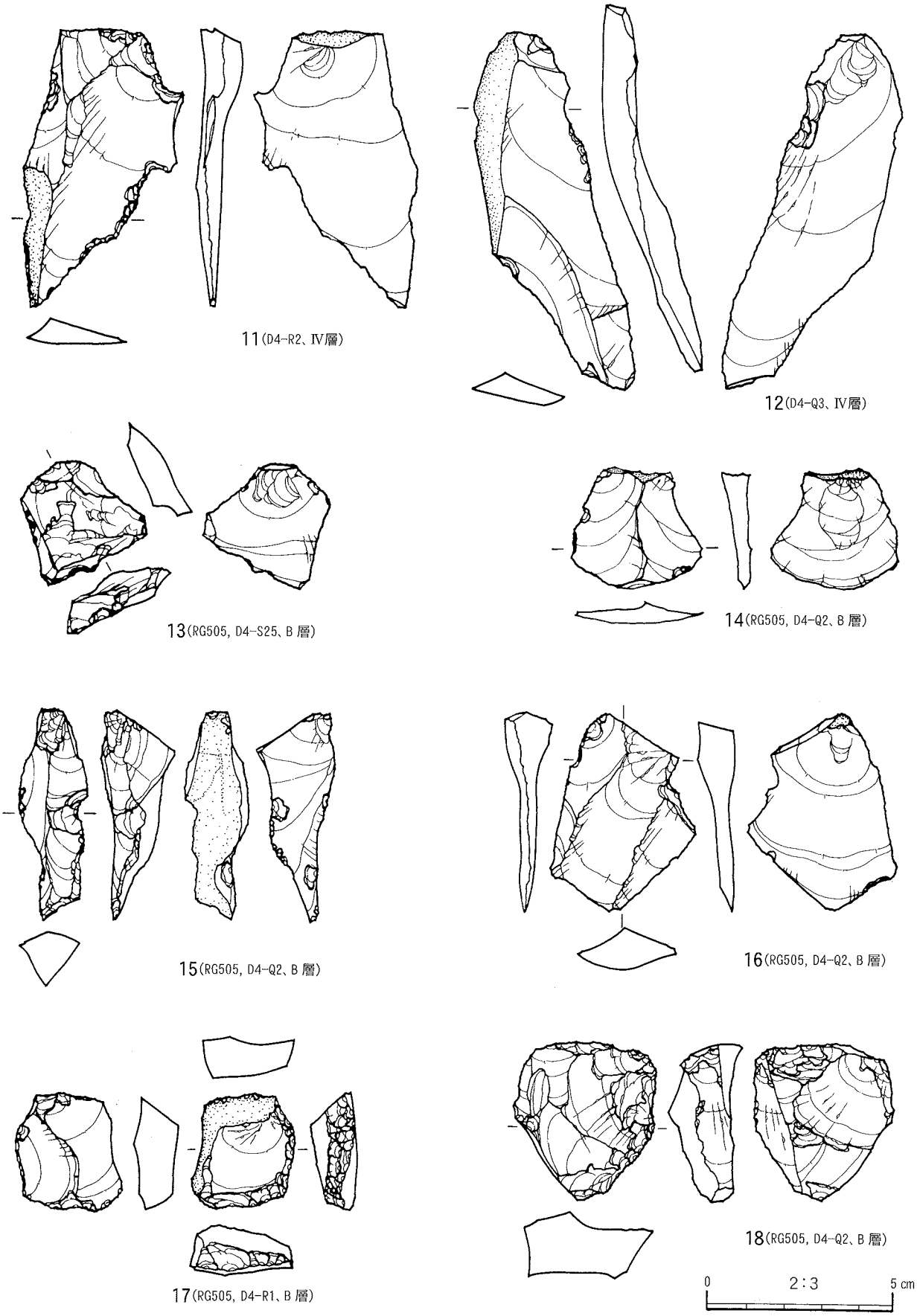
26は半分が欠損または半割された凝灰岩製の敲石で、端部縁辺には敲打痕がみられ、その痕跡は整然としたものではない。



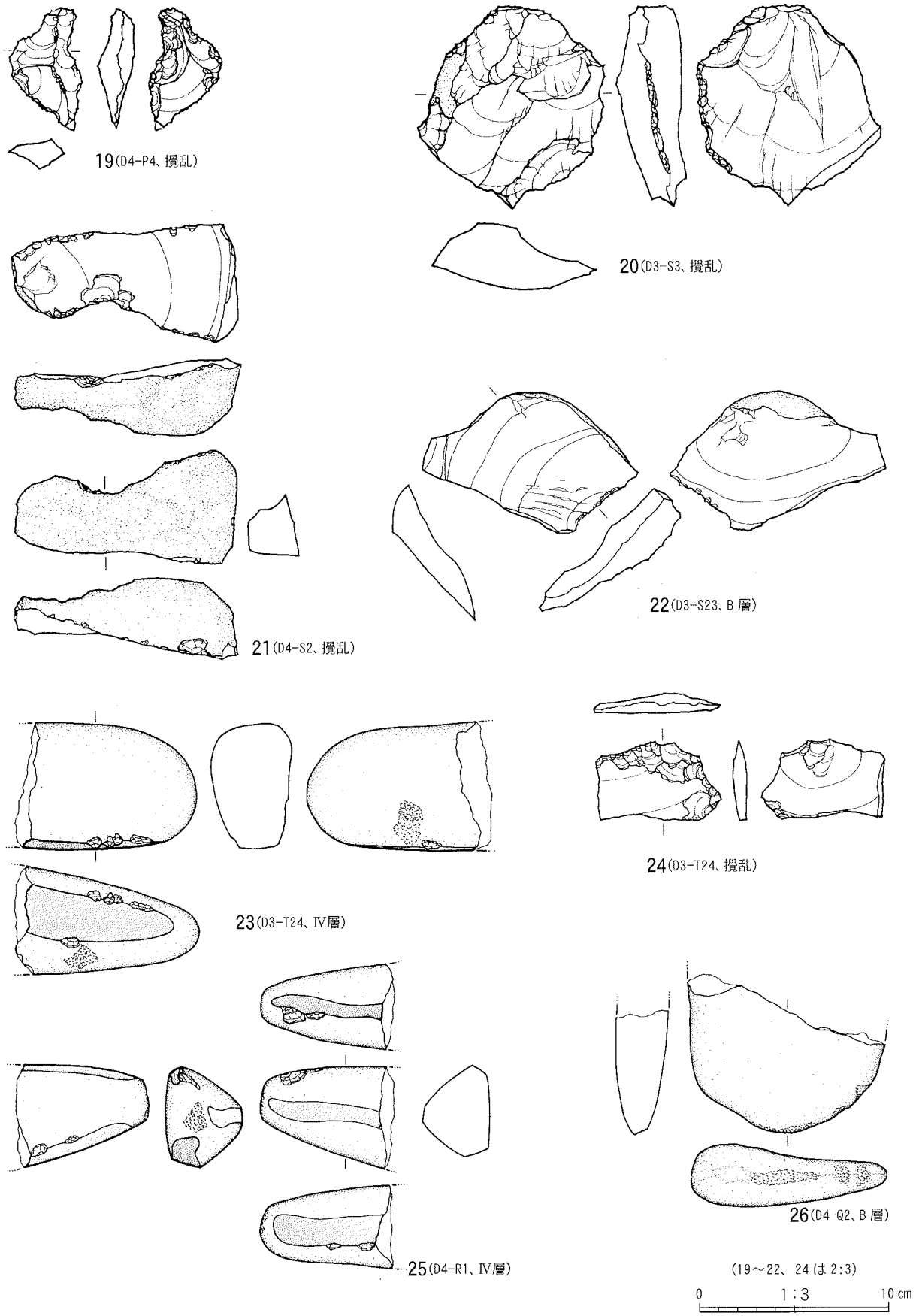
第20図　遺構外・遺物包含層出土土器



第 21 図　遺物包含層出土石器（1）



第 22 図　遺物包含層出土石器（2）



第 23 図　遺物包含層出土石器（3）

続縄文・古墳時代の遺物

宿田遺跡第４次調査区より第24図３・５～７の遺物が出土している。隣接する第１次調査区では少量ながら北大Ⅰ式、南小泉式に類似する土師器、黒曜石など東北地方北部の古墳時代中期～後期前葉（５世紀後半～６世紀前半）に特徴的な遺物が出土している。今年度実施した第４次調査区においても北大Ⅰ式土器など盛岡市において出土例の少ない重要な遺物が出土した。また、遺跡南端付近の畑地においても過去に北大Ⅰ式土器、黒曜石製の掻器が土地所有者によって採集されていることから、古墳時代の遺構・遺物等が遺跡のほぼ全域に拡がる可能性が高い。

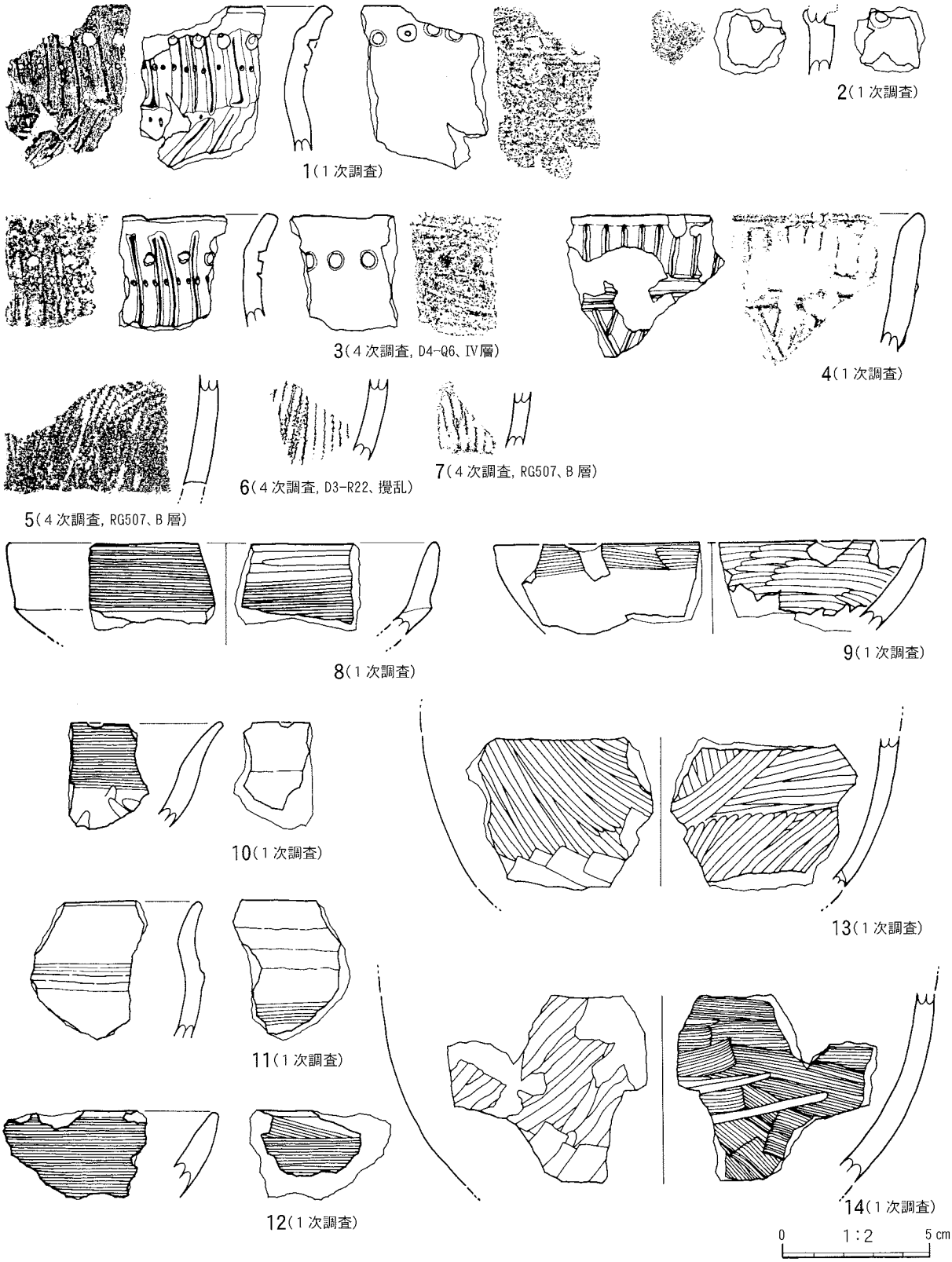
宿田遺跡周辺（厨川地区）における古墳時代の遺跡は、安倍館遺跡・大館町遺跡の２遺跡と、同じ滝沢台地上に立地する滝沢村高柳遺跡で確認されている。安倍館遺跡では古墳時代前期（４世紀）？と考えられる土師器甕と後北C_2式土器が共伴して土坑内より出土しており（盛岡市教育委員会1999.3『安倍館遺跡－厨川城跡の調査－』）、大館町遺跡では古墳時代後期（７世紀）の竪穴住居跡が検出されている（盛岡市教育委員会1995.11『小屋塚遺跡－第１～27次発掘調査報告－』）。宿田遺跡に関連する盛岡市内における古墳時代中葉～後葉の遺跡としては、浅岸字橋場に所在する薬師社脇遺跡、同じく浅岸字大塚に所在する大塚遺跡がある。大塚遺跡では1993年度の調査によって北大Ⅰ式土器が出土している（盛岡市教育委員会1997.3『永福寺山遺跡－昭和40・41年発掘調査報告書－』）。薬師社脇遺跡では平成13年度の調査によって、古墳時代中期（５世紀）の土師器坏・鉢・小形甕が副葬される土坑墓が４基検出されている（未報告）。

以上が宿田遺跡を含む盛岡市内の古墳時代中葉～後葉にかけての遺跡の概要である。以下は第１・４次調査出土の続縄文・古墳時代遺物である。

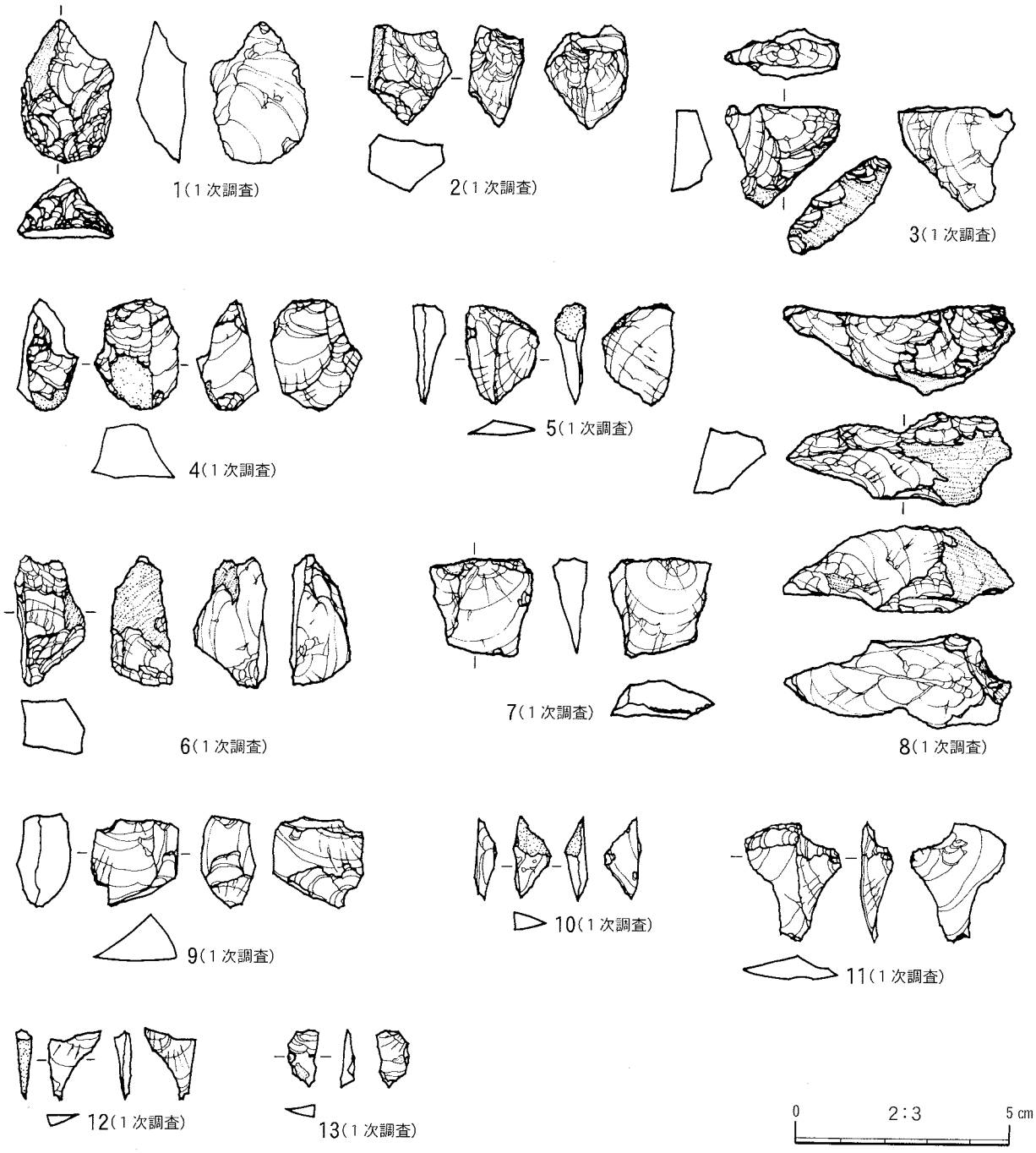
続縄文（第24図１～７）　１～７は続縄文（北大Ⅰ式）と考えられる土器である。１・２は同一個体と考えられる甕口縁部で、口縁は外反し縦位の微隆起線が等間隔に施される。微隆起線は粘土紐の貼付後に指または工具でナデ調整を施して微隆起線を表出させたものと考えられる。微隆起線の間には外面からの刺突による「突瘤文」が横位に施され、突瘤文の下には列点文が横位に施される。内面にはハケメがみられる。３は突瘤文が施される甕破片である。４は口唇下に縦位の微隆起線が等間隔に施され、下位には微隆起線による幾何学文が施される。５～７は縞縄文が施される甕体部～底部にかけての部位である。

土師器（第24図８～14）　８は体部と口縁部が稜によって画される坏で、口縁部は直立し外面はヨコナデ、内面はヨコナデ後、口唇部付近にミガキなどの調整が施される。９は口唇下にヨコナデ、内面がミガキによる調整が施される坏である。10・11は坏口縁部片で、10の外面はヨコナデによる調整が施される。12は甕？口縁部で、内外面にはヨコナデによる調整が施される。13・14は小型甕である。体部から底部付近にかけての部位で、13の内外面にはミガキによる調整が施され、外面下半にはケズリによる調整が施される。14の外面はミガキ・ケズリによる調整が施され、内面はヘラナデによる調整が施される。

黒曜石（第25図１～13）　１は背面に礫皮面を残す拇指状掻器である。刃部調整は全体の約２／２まで行われるが剥離順に規則性は認められない。２～４・６・８・９は石核として考えられる石器で、２～４・６・９は両極技法による剥離が施された石核と想定される。５・７はその剥片と考えられよう。８は嘴状を呈した石核である。10～13はチップ及び小剥片である。



第24図　続縄文・古墳時代遺物（1）



第25図　続縄文・古墳時代遺物（2）

3．調査のまとめ

（1）縄文時代

宿田遺跡第６次調査の結果、縄文時代早期・古墳時代中葉～後葉（５世紀～６世紀）・平安時代の遺構・遺物を主体とする遺跡であることが確認された。

縄文時代の遺構では早期後葉から末葉にかけての土坑６基（ＲＤ００７～０１２）が検出されている。埋土は全て堅くしまる暗褐色土であり、個々の土坑において大きな差異はなかった。遺物が確認されたのはＲＤ００７・００８・０１０土坑で、ＲＤ００７土坑からは早期後葉の槻木１式に類似する微隆起線文土器、沈線文土器が多量に出土している。ＲＤ００８・０１０土坑からは小片であるが早期末葉の時期と考えられる縄文土器が出土している。

土　坑　今回の調査で確認された土坑は、楕円形（ＲＤ００８～０１１）、溝状（ＲＤ００７）、円形（ＲＤ０１２）の３形態が認められた。楕円形を呈す土坑は、掘り込みが浅く、遺物も僅少なため詳細な性格については明らかでない。ＲＤ００７土坑は溝状を呈しながらも、断続的に起伏部を持ち、底面は平坦で底面直上の埋土（Ｃ層）から多量の遺物が出土した特異な土坑である。岩手県内においては当該時期の類例となる遺構の検出例がないため、比較検討することができないが、Ｃ層において多量の炭化物とスス状炭化物の付着する土器が混在して出土したことから、廃棄坑または廃棄を伴う儀礼に関連する土坑であることも考えられる。

ＲＤ０１２土坑は陥し穴状土坑と考えられ、掘り込みは検出面より底面まで1.2mと深く、平面形は円形を呈し、底面に小ピット（逆木？）が掘り込まれるなどの特徴が見られる。

ＲＤ００７土坑出土土器について

遺物包含層（Ⅱ～Ⅴ層）の大部分は既に削平されていた為、包含層からの出土遺物は僅かでしかなかった。しかし、ＲＤ００７土坑より多量の遺物が出土しているので、ＲＤ００７土坑出土遺物について若干の考察を加えたい。

土　器　出土した土器は縄文時代早期後葉の条痕文土器である。本稿では便宜上、微隆起線文を主文様とする土器群（第６図１～第９図43）をＡ群、沈線文を主文様とする土器群（第10図44～第12図72）をＢ群とする。

微隆起線文を主文様とする土器群－Ａ群は、口縁が波状を呈し、口縁部～体部上半が直立ぎみに外傾し、体部下半に緩やかな屈曲部を持ち底部に至る。底部は乳頭状の尖底を呈する。文様帯は口縁部に設けられ、体部から底部にかけては条痕が密に施される。主文様となる微隆起線の施文手法は大きく２種類あるようである。

１－地文に巾１㎝未満の薄い粘土帯を貼付し、粘土帯中央を篦状？の工具で押し引きし、工具の縁よりあふれた粘土を工具でナデ調整することにより巾１㎜前後の断面三角形の微隆起線を表出させる。

２－器面に細い粘土紐を貼付し、粘土紐の縁を篦状工具などによりナデ調整を施すことによって微隆起線を表出させたもの。

１の手法によるものは第６図１の深鉢のみに認められるもので、その他の微隆起線は２の手法によって文様が施される。これらのＡ群土器は宮城県槻木貝塚出土土器を標式とする「槻木１式」

に文様が近似する。

沈線文を主体とする土器群－Ｂ群は、器形については前述したＡ群土器に近似するが、文様帯の構成が横位多段の文様構成であることが特徴的である。第10図44の深鉢は４段の文様帯で構成され、口縁部文様帯より斜位平行沈線－横位平行沈線－斜格子目状沈線－横位平行沈線の順で文様帯は充填される。個体別では、各段の文様に違いがあるものの第10図48においても文様帯が多段であることが伺われる。第11図54は横位平行沈線を底部付近まで多重施文するものであるが、横位方向に文様を展開させることからＢ群の範疇に入る土器であろう。これらＢ群土器は近隣で類例を求めると青森県ムシリ遺跡出土土器を標式とする「ムシリ１式」に近似する。ムシリ１式は平底であることが多く、文様は沈線による幾何学文、鋸歯状文、斜位・縦位・横位の平行沈線文、刺突文が施される土器群である。しかし、宿田遺跡Ｂ群土器は器形が砲弾状、底部形態が乳頭状の尖底を呈し、基本となる文様帯は規則的な横位多段構成であることから所謂「ムシリ１式」とは若干異なる地方色の濃い土器群と考えられよう。

Ａ・Ｂ群土器は文様や施文に異なる点があるが、遺構内からの一括出土であり、第９図43の土器のように口縁部文様帯に微隆起線による幾何学文が施され、体部から底部にかけて沈線・短沈線による幾何学文が描かれる折衷的な土器の存在からＡ・Ｂ群土器が同時期に存在する土器群であることが伺えよう。

（2）古　代

古代の遺構では、円形周溝３基（ＲＧ５０１・５０６・５０７）と土坑２基（ＲＤ５０２・５０３）が検出された。ＲＧ５０６円形周溝は南西部に開口部を持つもので、その他の円形周溝においても開口部があるものと考えられるが、今回の調査では確認されなかった。

構築時期は、埋土中より平安時代（９世紀）の須恵器坏・長頸壺片、土師器坏片が出土していることから、９世紀を下らない時期に構築されたものと考えることができよう。

古代の土坑は２基検出されており、遺物は出土していないが埋土上位より十和田起源と考えられる白色火山灰が確認されている。

遺構外ではあるが、続縄文・古墳時代中期中葉～後期前葉にかけての遺物が若干出土している。第24図１～７は北大Ｉ式、第24図８～14は南小泉式併行の古式土師器、第25図１～13は黒曜石製の石器である。黒曜石については肉眼による観察ではあるが、宮城県湯ノ倉産の黒曜石に酷似するものである。

以上のように、宿田遺跡は縄文時代早期から平安時代にまで至る遺跡であることが確認された。特に、盛岡周辺部では検出例が少なかった縄文時代早期の遺構や古代の円形周溝が検出されたことは重要である。また、北海道系の土器である「北大Ｉ式」や東北地方南部に広く分布する南小泉式類似の土師器が出土したことにより、今回の調査区では確認されなかったが、本調査区周辺において当該時期の遺構が存在する可能性が考えられる。

（神原　雄一郎、岩城　志麻）

Ⅲ. 大館町遺跡　（第71次調査）

1．遺跡の概要

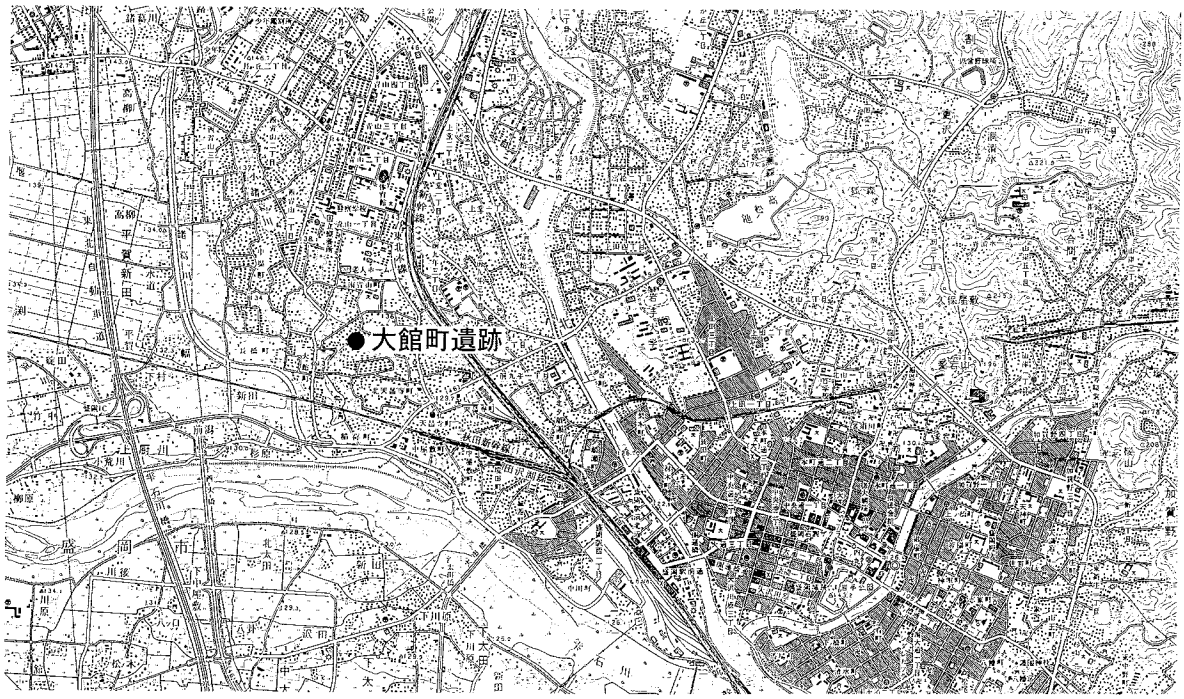
遺跡の位置　大館町遺跡は、盛岡市の中心部より北西へ約3.5kmの盛岡市大新町・大館町地内に位置する。遺跡中央部には畑地が残されているが、周辺部は近年の開発による宅地化が進んでいる。遺跡の範囲は東西約220m、南北約250mと推定され、標高は132～137mである。（第26図）

遺跡の地形　滝沢台地の南東部は北上川に沿って南へ舌状に張り出しており、諸葛川、木賊川、巣子川などで開析され、幾筋もの埋没谷が入りこんでいる。大館町遺跡はその滝沢台地南縁の緩斜面に立地している。周辺には大新町・大館堤・小屋塚遺跡など縄文時代早期～中期を中心とした遺跡が分布し、各遺跡は埋没谷や旧河道などによって画されている。（第１図）

2．調査成果

（1）これまでの調査

過去の調査　古くから大館町遺跡は土器・石器が出土することで知られており、昭和31年には岩手大学草間俊一教授によって初めて学術調査が行われ（草間俊一1958「先史期」『盛岡市史』第１分冊１）多量の縄文時代の遺物が層位ごとに出土することが確認された。また、昭和39年には土器の変遷を明らかにするための調査が実施されている。その後も岩手大学板橋源教授および同大学考古学



第 26 図　大館町遺跡の位置（1:50, 000）

第27図　大館遺跡群調査全体図（1:1,000）

研究会により、宅地造成に伴う発掘調査が昭和48・50・51年に行われ、その結果30棟以上の縄文時代中期の竪穴住居跡が重複して検出された（昭和51（1976）年調査については、岩手大学考古学研究会1978『大館町遺跡』）。これらの調査により、大館町遺跡は長期にわたる大規模な集落遺跡であることが確認された。

盛岡市教育委員会による発掘調査は、昭和55年の遺跡範囲確認および宅地造成に伴う第１次調査以降、現在まで69次にわたり実施されている。これまでの調査で縄文時代中期中葉から後葉、いわゆる大木８a・８ｂ式期を主体とした竪穴住居群をはじめ、遺跡北西から南西にかけては前期末葉から中期中葉の密度の濃い遺物包含層が確認されている。検出された遺構数はおおよそ竪穴住居跡500棟、竪穴20棟、掘立柱建物跡15棟、土坑400基である。このように大館町遺跡は県内でも有数の縄文期の集落跡であり、その重要性から平成12年度に岩手県指定史跡に指定されている。（第27図）

（２）平成13年度の調査

平成13年度の大館町・大新町遺跡の発掘調査は、国庫補助事業として１件の個人住宅新築に係る事前本調査（大館町遺跡第71次調査）および、市費単独事業で１件の公共下水管敷設に伴う事前本調査（大新町遺跡第70次調査）を実施した。

第70次　第70次調査区は大新町遺跡の南端、昭和60年度に実施された第19次調査区の西側に位置する。公共下水管敷設に伴う掘削箇所の本調査として実施した。調査期間は平成13年４月16日から４月20日まで行い、調査面積は2.5㎡である。

検出された遺構は、埋設土器１基と平安時代の溝跡１条である。溝跡は東西方向に延びており、第19次調査区南側で検出されたRG8704溝跡と同一のものと考えられる。

第71次　第71次調査区は、大館町遺跡の北部、昭和59年度実施の第15次調査区のすぐ北側に位置する。個人住宅新築に係る事前本調査として実施した。調査期間は平成13年８月３日から８月７日まで行い、調査面積は94.40㎡である。

調査区は南東から北西に傾斜し、標高はおおよそ南東隅で136.2m、北西隅で135.7mをはかる。今回の調査では遺構・遺物等は確認されなかった。

３．調査のまとめ

大館町遺跡北部の発掘調査は、これまでに第５・６・８・９・12・15・25・26・27・38・49次の計11地点が実施されている。なかでも第５・12・15次調査区は遺構密度が高く、縄文時代中期の竪穴住居跡や土坑が多数重複して検出されている。その他の調査区では、竪穴住居跡はほとんど検出されず貯蔵穴や陥し穴状遺構が散発的に分布しているのみである。遺跡北西～南部では住居域周辺の傾斜面に大量の遺物（大木７a～８b式期主体）が廃棄され、遺物包含層が形成されている。

71次調査区では前述のとおり遺構・遺物は検出されなかったが、遺跡北部で縄文中期の集落範囲の境界と想定される地点を確認した意義は大きい。　（佐々木　亮二）

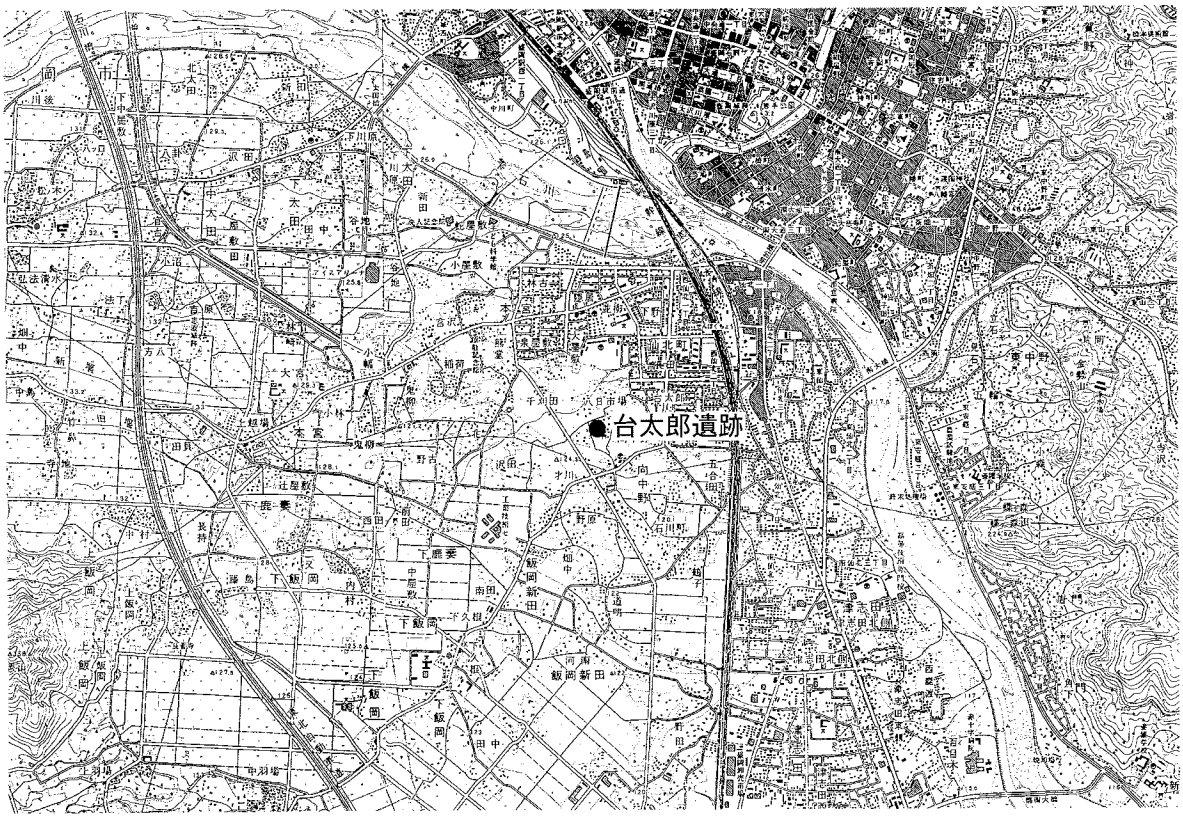
Ⅳ. 台太郎遺跡　（第40・41次調査）

1．遺跡の環境

（1）遺跡の概要

遺跡の位置　台太郎遺跡は、盛岡市の中心部より南西へ約２km の盛岡市向中野地内に所在する。（第28図）かつては水田、畑、宅地などの農地が主体となっていたが、近年は盛岡南新都市土地区画整理事業区域内のため、急速に宅地化が進められている。遺跡の範囲は東西約750m、南北約500mと推定され、標高は121～123mである。

遺跡の地形　本遺跡は雫石川南岸の沖積段丘上に立地する。雫石川は奥羽山脈より東流し雫石盆地を形成するが、烏泊山と箱ヶ森に挟まれた北ノ浦付近で急激に流路が狭められる。北ノ浦以東は沖積地が広がり、その地形は北上川流域に発達する北上平野とつながる。雫石川は盛岡駅南方約500m付近で北上川に合流し、同地点でさらに中津川が合流する。北上川との合流点までの雫石川南岸では、雫石川の流路の転換によって形成された幾筋もの沖積段丘が発達する。その段丘上からは主に古代（７～10世紀）から江戸時代にかけての遺跡が多数確認されており、各遺跡は雫石川の細かい旧河道によって画されている。（第１図）



第 28 図　台太郎遺跡の位置（1:50, 000）

（2）歴史的環境

台太郎遺跡のある、雫石川によって形成された沖積段丘上には、７世紀中葉以降より集落が見られるようになり、８世紀になると西鹿渡遺跡・百目木遺跡など大規模な集落が営まれるようになる。９世紀初頭に古代城柵である志波城が造営されるがこの時期の集落は少なく、志波城廃絶後より飛躍的に遺跡数が増加する傾向がある。しかし、11世紀代になると当時の遺跡は皆無に等しいほど減少し、周辺地域においても滝沢村大釜館遺跡・八幡館山遺跡、盛岡市上堂頭遺跡、岩手町沼崎遺跡など数えるほどしか確認されていない。

周辺の遺跡　本遺跡の西側には飯岡沢田遺跡、熊堂Ｂ遺跡、野古Ａ遺跡、南側には飯岡才川遺跡、向中野館遺跡が立地している。各遺跡は網状に入り組んだ小旧河道によってそれぞれ画されている。これらの遺跡は主に７世紀後半～10世紀代の集落遺跡である。本遺跡はこの周辺では最も大規模かつ濃密に遺構が分布する。また、飯岡沢田遺跡では45基もの終末期古墳群が検出されていることが特筆できる。

２．調査の概要

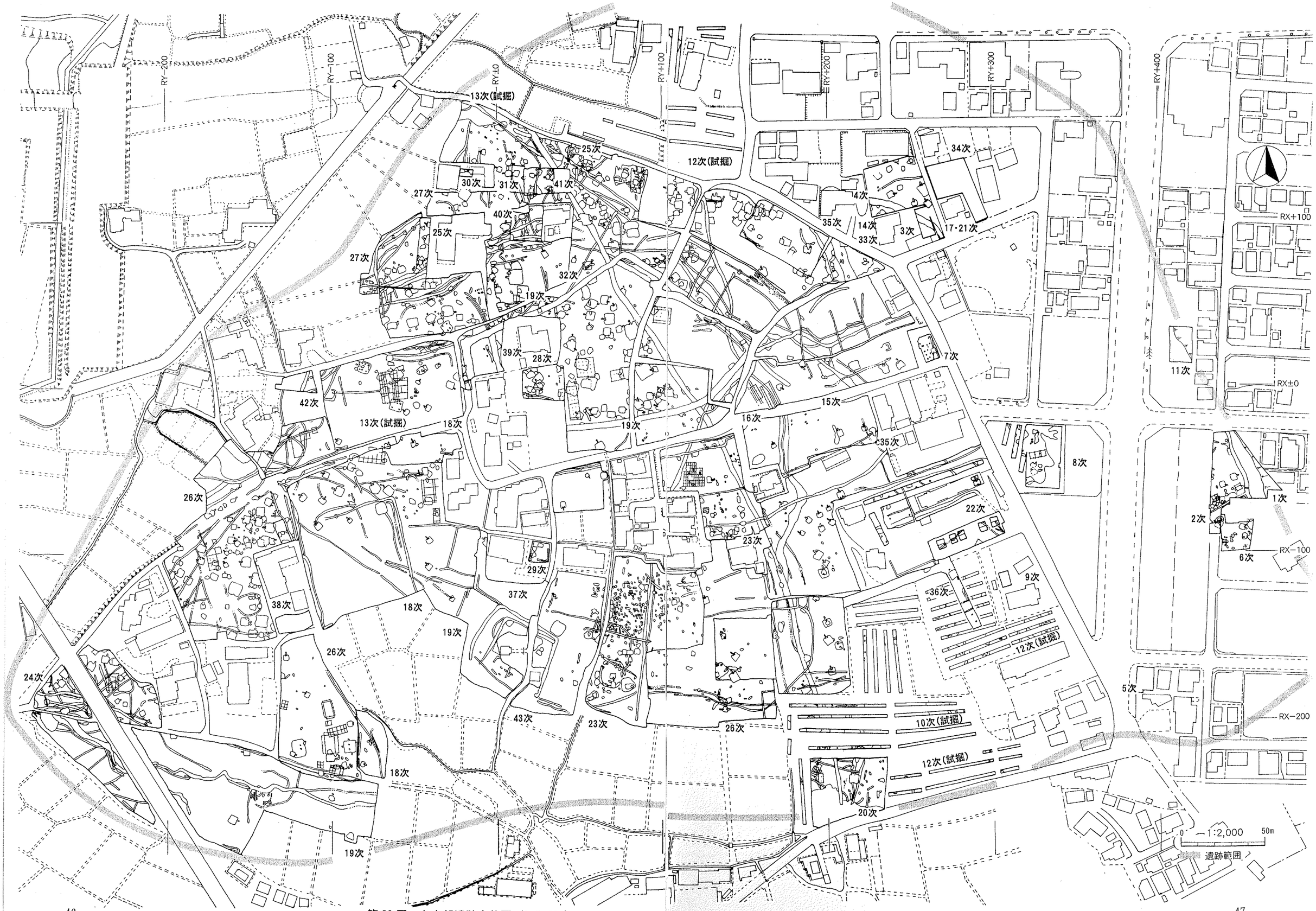
（1）これまでの調査

発見の経緯　台太郎遺跡は、昭和60年度の仙北西地区区画整理事業時の工事現場にて、平安時代の竪穴住居跡等が発見され、周知された遺跡である。平成５年度からは、盛岡南新都市土地区画整理事業（盛南開発）にともなう発掘調査が実施され、以後43次にわたって調査されている。盛南開発にともなう調査は（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターと盛岡市教育委員会によって実施されている。なお市教育委員会による盛南開発関連調査については、別途報告の予定である。

（第２表・第29図）

次数	所在地	調査原因	面積	期間	検出遺構・遺物
1	向中野１丁目地内 (向中野字台太郎7-1)	仙北西地区区画整理 (宅地分)	734	85,05,24 85,06,25	平安時代竪穴住居跡３棟、土坑１基、 溝跡１条、ほか
2	向中野１丁目地内 (向中野字台太郎7-1)	仙北西地区区画整理 (道路分)	515	85,07,01 85,07,31	平安時代竪穴住居跡６棟、竪穴１基、 掘立柱建物跡2棟、土坑9基、溝跡３条、他
3	向中野２丁目３番地内 (向中野字台太郎18-1)	倉庫改築	125	85,11,13 85,11,30	奈良時代竪穴住居跡１棟、平安時代溝１条、 ほか
4	向中野２丁目３番地内 (向中野字台太郎18-3)	共同住宅新築	100	86,06,02 86,07,29	奈良時代竪穴住居跡７棟、土坑２基、 平安時代竪穴住居跡５棟、溝跡２条、ほか
5	向中野１丁目地内 (向中野字台太郎	個人	50	89,05,10 89,05,11	平安時代竪穴住居跡１棟
6	向中野１丁目地内 (向中野字台太郎7-1他)	個人	302	90,05,07 90,05,26	平安時代竪穴住居跡６棟、土坑１１基、 ほか
7	向中野字向中野36-3	住宅新築	138	91,04,25 91,05,08	奈良時代竪穴住居跡１棟、溝跡２条、ほか
8	向中野２丁目７番 (向中野字台太郎12-2他)	タクシー会館新築	830	91,06,17 91,06,27	平安時代竪穴住居跡5棟、掘立柱建物跡１棟 ほか

9 試掘	向中野字向中野40	農作業小屋新築	50	93,05,11	遺構・遺物なし
10 試掘	向中野字八日市場地内	盛南開発関連	1,200	95,04,04 95,04,06	竪穴住居跡８棟、土坑７基、ほか
11 試掘	向中野１丁目９番地内 (向中野字台太郎９他)	倉庫新築	320	95,06,19 95,06,27	遺構・遺物なし
12 試掘	向中野字八日市場地内	盛南開発関連	5,174	95,09,01 95,11,30	竪穴住居跡５３棟、溝跡５条、ほか
13 試掘	向中野字八日市場地内	盛南開発関連	4,064	96,10,14 96,10,25	竪穴住居跡１１棟、柵列３条、ほか
14	向中野２丁目３番地内 (向中野字台太郎18-1)	下水道引込管工事	25	96,11,25 96,11,29	竪穴住居跡１棟、溝跡１条
15 県セ	向中野字八日市場地内	盛南開発関連	12,906	97,04,04 97,11,26	竪穴住居跡６８棟、掘立柱建物跡４棟 溝跡５６条、土坑６０基、竪穴４棟、
16 県セ		盛南開発関連	790	97,08,01 97,08,29	焼土遺構４基、ほか
17 試掘	向中野字向中野地内	個人下水配管工事	10	97,08,23	遺構・遺物なし
18 県セ	向中野字八日市場地内 〃　　向中野地内	盛南開発関連	26,404	98,04,15 98,11,20	竪穴住居跡１０８棟、掘立柱建物跡１３棟、 竪穴１９棟、土坑１６３基、中世堀跡３条、
19 県セ		盛南開発関連	4,755	98,07,02 98,08,31	溝跡１００条、波板状凹凸３ヶ所、 円形周溝２基、井戸跡２基、ほか
20	向中野字向中野地内	盛南開発関連	1,400	98,09,17 98,12,21	掘立柱建物跡４棟、柵列１条、 溝跡２１条、土坑１２基、ほか
21 試掘	向中野２丁目４番地内 (向中野字台太郎18-7)	車庫新築	324	98,09,25 98,09,25	遺構・遺物なし
22 県セ	向中野字向中野地内	盛南開発関連 (県警待機宿舎)	2,500	99,09,01 99,11,02	竪穴住居跡１棟、掘立柱建物跡１棟、 土坑１０基、溝跡１０条、ほか
23 県セ	向中野字八日市場地内 〃　　向中野地内	盛南開発関連	27,800	99,04,16 99,11,15	竪穴住居跡７３棟、掘立柱建物跡９棟 竪穴１６棟、
24	向中野字向中野地内	盛南開発関連	3,425	99,05,06 99,07,16	竪穴住居跡２０棟、掘立柱建物跡２棟 土坑１８基、溝跡５４条、
25	向中野字八日市場地内	盛南開発関連	2,141	99,07,07 99,12,15	竪穴住居跡７３棟、掘立柱建物跡１棟 土坑７４基、竪穴２棟、溝跡３３条、他
26 県セ	向中野字向中野地内 〃　八日市場地内	盛南開発関連	14,229	00,04,19 00,10,31	竪穴住居跡７５棟、掘立柱建物跡９棟、 土坑１２６基、竪穴３棟、ほか
27	向中野字八日市場地内	盛南開発関連	2,513	00,06,12 00,11,14	竪穴住居跡２３棟、溝跡２９条 土坑２２基、ほか
28	向中野字八日市場地内	盛南開発関連	460	00,06,29 00,09,08	竪穴住居跡９棟、掘立柱建物跡２棟 土坑１１基、溝跡１条、ほか
29	向中野字向中野２０地内	盛南開発関連	125	00,07,19 00,08,25	竪穴住居跡１棟、土坑３基、ほか
30	向中野字八日市場４３地内	盛南開発関連	35	00,07,25 00,07,31	竪穴１棟、溝跡１条
31	向中野字八日市場４５地内	盛南開発関連	128	00,08,01 00,08,08	竪穴住居跡２棟、土坑１基、溝跡２条



第 29 図　台太郎遺跡全体図（1:2, 000）

32	向中野字八日市場地内	盛南開発関連	1,030	00,09,18 00,10,20	竪穴住居跡６棟、土坑８基、竪穴１棟 溝跡５条、井戸跡２基、ほか
33	向中野字八日市場以内	盛南開発関連	694	00,09,22 00,10,13	竪穴住居跡３棟、溝跡３条、 遺構保存処置
34 試掘	向中野２丁目４番地内 (向中野字台太郎地内)	共同住宅新築	156	00,11,20 00,11,22	竪穴住居跡３棟、溝跡１条、ほか 遺構保存処置
35 県セ	向中野字八日市場地内 〃　向中野地内	盛南開発関連	4,394	01,04,17 01,08,02	竪穴住居跡１６棟、土坑５基、溝跡１１条 焼土遺構２基、竪穴１棟、その他、
36 県セ		盛南開発関連	290	01,05,22 01,06,05	小柱穴、ほか
37	向中野字向中野20他	盛南開発関連	872	01,05,28 01,06,22	奈良時代竪穴住居跡１棟、 土坑５基、溝跡２条、ほか
38	向中野字向中野15-2他	盛南開発関連	309	01,06,01 01,06,15	土師器・須恵器少量 遺構なし
39	向中野字八日市場地内	盛南開発関連	1,096	01,08,01 01,11,02	竪穴住居跡１１棟、掘立柱建物跡１棟、土坑、 溝跡、中世堀跡、ほか
40	向中野字八日市場 41-2,41-3	住宅建替	300	01,08,01 01,09,19	竪穴住居跡、土坑、竪穴、溝跡、
41	向中野字八日市場45-2他	住宅建替	220	01,08,02 01,09,19	奈良時代竪穴住居跡３棟、 平安時代竪穴住居跡２棟、溝跡４条、土坑他
42	向中野字八日市場48-4	盛南開発関連	123	01,11,26 01,12,12	竪穴住居跡１棟、土坑２基、溝跡２条、
43	向中野字向中野20-1	盛南開発関連	112	01,11,26 01,12,12	遺構・遺物なし

(※県セ：(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターによる調査)

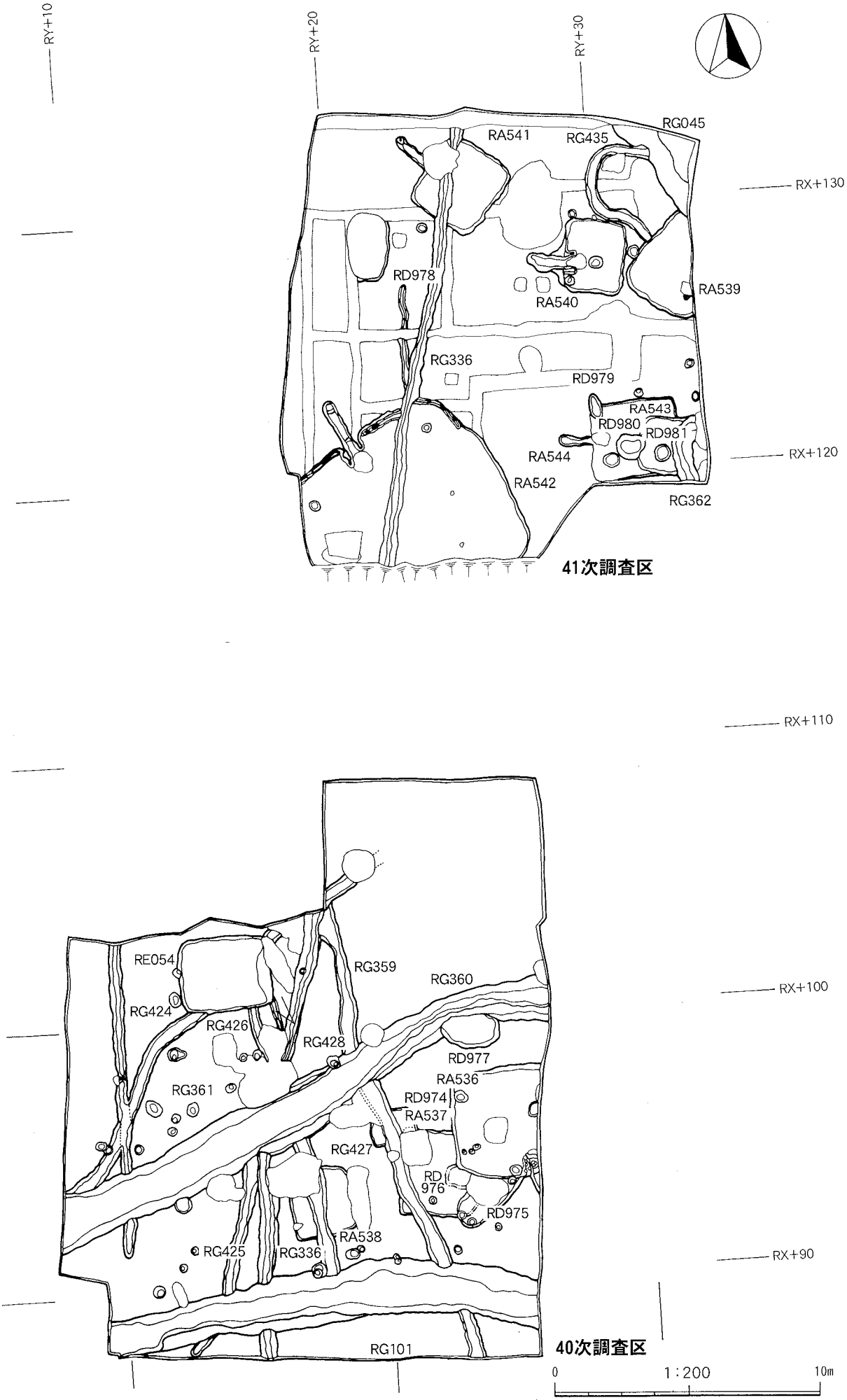
第２表　台太郎遺跡調査成果

（２）平成13年度の調査

今年度の調査のうち、第37次～39次・第42・43次調査は盛南開発関連による調査、第40次・41次調査は盛南開発区域内の個人住宅建て替えにともなうもので、市教育委員会が国庫補助事業としておこなったものである。(第30図)

位　置　第40・41次調査区は、遺跡のほぼ中央北寄りに位置する。周辺は盛南開発にともなう発掘調査がおこなわれており、奈良時代・平安時代を中心とする遺構が多数検出されている。両調査区とも以前の住宅基礎による撹乱をひどく受けていたため、遺構の残存はよくなかった。標高は約123.000mである。

(今野　公顕)



第 30 図　台太郎遺跡第 40・41 次調査区全体図

３．調査内容

（１）第40次調査

古代の遺構と遺物

ＲＡ５３６竪穴住居跡（第31図）

位　　置　調査区南東　　**平面形**　正方形　　**主軸方向**　Ｓ３°Ｅ

規　　模　東西　3.5m以上、南北4.2m

重複関係　ＲＡ537竪穴住居跡・ＲＤ975土坑を切り、ＲＤ976土坑に切られる。

掘込面　削平　　**検出面**　表土直下褐色シルト層上面

埋　　土　自然堆積で層相の違いによりＡ～Ｄの４層に分かれる。黒褐色土主体で褐色および黄褐色土を粒状に含むＡ層、同じく黒褐色土を主体とし、褐色土を粒状に少量含むＢ層、黒褐色土を主体とし、褐色土を粒～塊状に多く含むＣ層、暗～黒褐色土を主体とし、炭化物および焼土粒を含むＤ層からなる。床面構築土（Ｅ層）はほぼ全面にみられ、シルト質の褐色土に若干の黒褐色土を含み、しまりがあり堅い。

壁の状態　検出面から床面までの深さは0.18～0.35mをはかる。壁は、上方に向かってやや外傾する。

床の状態　床面は、かまど付近で低くなっているほかはほぼ平坦である。全面に構築土を確認している。構築面は砂礫層および褐色シルト面で、構築土の層厚は0.05～0.20mをはかる。

かまど　かまどは南壁東よりに位置する。煙道は調査区外に延びており、検出された煙道平面形は溝を呈している。煙道底面は壁際から若干高くなり、煙出しに向かって深くなっている。煙道の規模は、南壁から0.73m以上、幅0.32m以上をはかる。

かまどのそでは西側のみを検出しており、東側のそでは調査区外にあると考えられる。そでの下部には、褐色シルトに暗褐色土を少量含むかまど構築土（Ｌ層）がみられる。そでは、しまりのある黄褐色シルトに若干の暗褐色土の混合土から構築されており、補強材として径が0.10～0.30mほどの自然礫が使用されている。そでの規模は、長さ0.78m、幅0.06～0.38m、床面からの高さ0.12～0.32mをはかる。

火床面は、そでに囲まれた壁内よりもやや外側に長径0.34mほどの不整楕円形の範囲で確認されており、堅くしまる。かまど崩壊土（Ｊ層）は、褐色～暗褐色土に焼土および炭化物を多く含む層相を呈している。かまど天井を構築していたと考えられる自然石が、火床面上に落下している。また、かまど支脚はそでに囲まれたほぼ中央に土師器甕を倒立させたものを配置している。

柱　　穴　貯蔵穴（Ｐ１）が南壁とかまど近くに検出されている。埋土は黒褐色土に褐色土を含むもので、平面形は楕円形で、長軸0.45m、床面からの深さは0.15mをはかる。その他ピット（Ｐ２～６）は床面に５口検出している。いずれも不整円形を呈しており、規模もまばらで浅い。埋土は黒褐色土を主体としており、褐色土を粒～粉状に含んでいる。

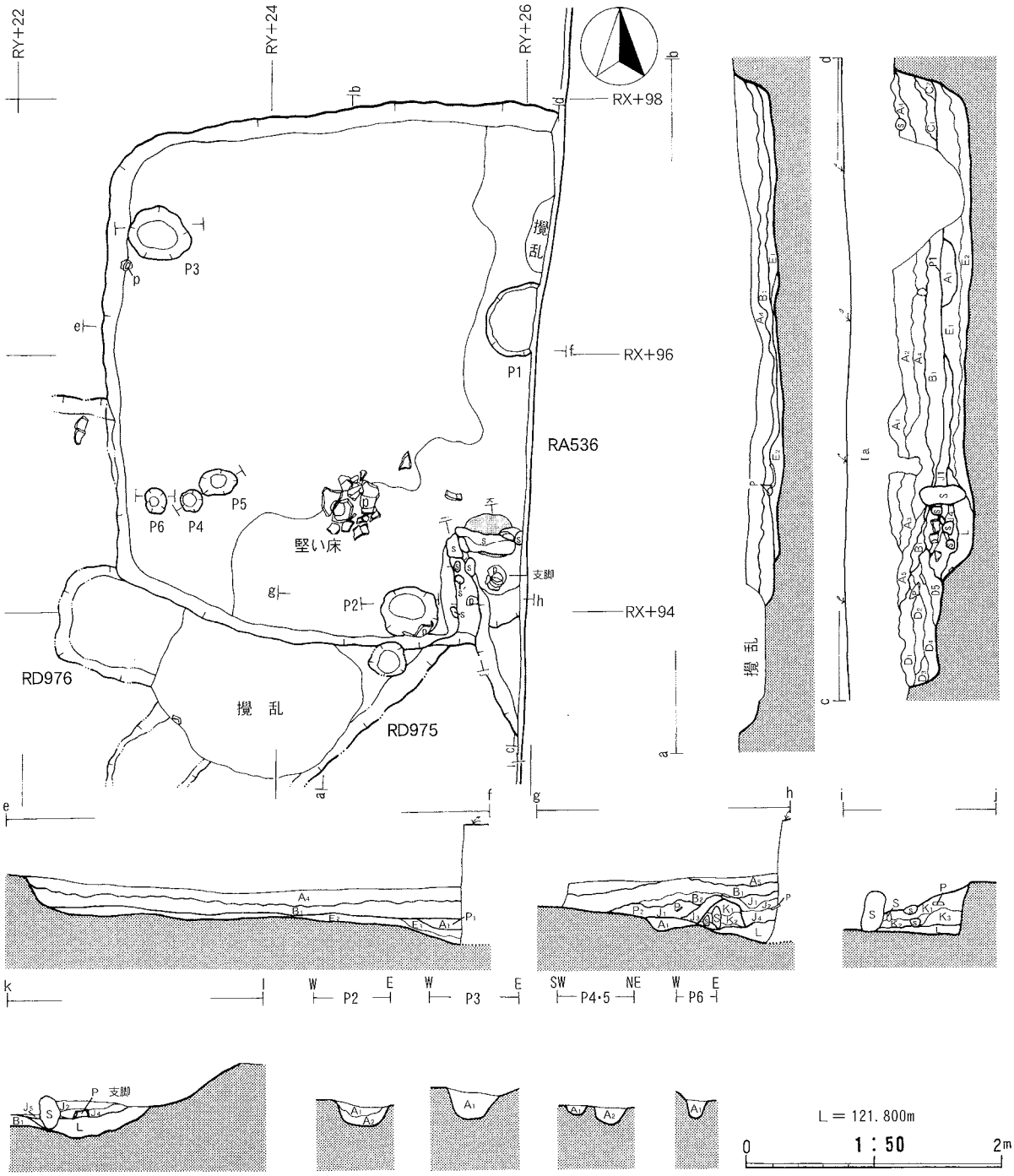
出土遺物（第32・33図１～22）　１は須恵器坏である。ロクロ成形によるもので、底部は糸切り無調整、口縁部は若干外反している。２～10はあかやき土器坏である。全てロクロ成形で、口縁部は若干外反している。底部は、２が底部糸切り後に回転ヘラケズリによる再調整が一部に施されているほ

かは、糸切り無調整である。

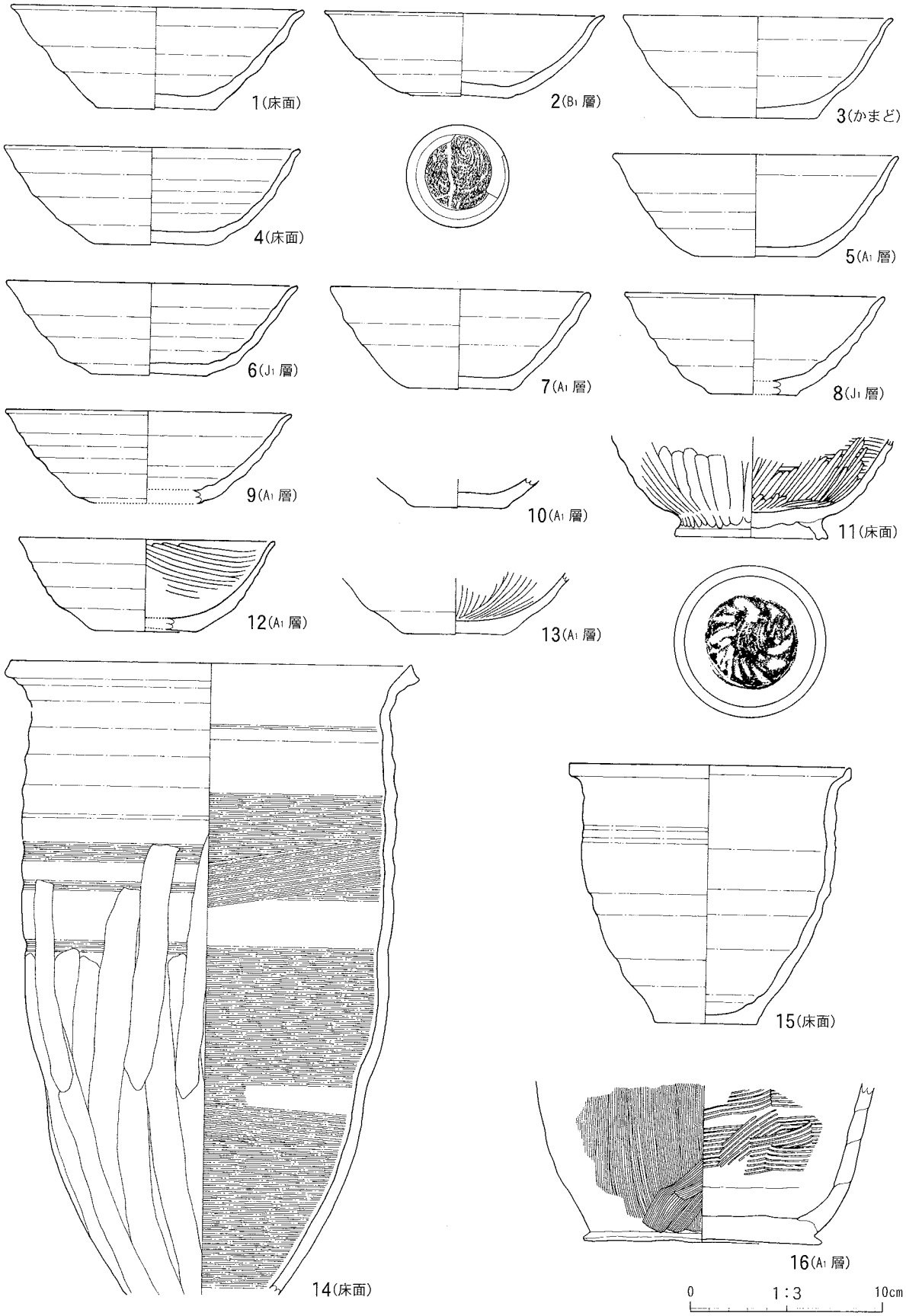
11は、内外面共に黒色処理を施す高台付坏で、内外面共にヘラミガキが施されている。12・13は土師器坏である。どちらもロクロ成形で、内面には黒色処理を施しヘラミガキが施されている。

14は底部を欠くあかやき土器長胴甕で、体部外面にはカキメを施した後縦方向のヘラケズリ調整を施し、内面にはカキメが施されているものである。15はあかやき土器小形甕で、底部は糸切り無調整である。

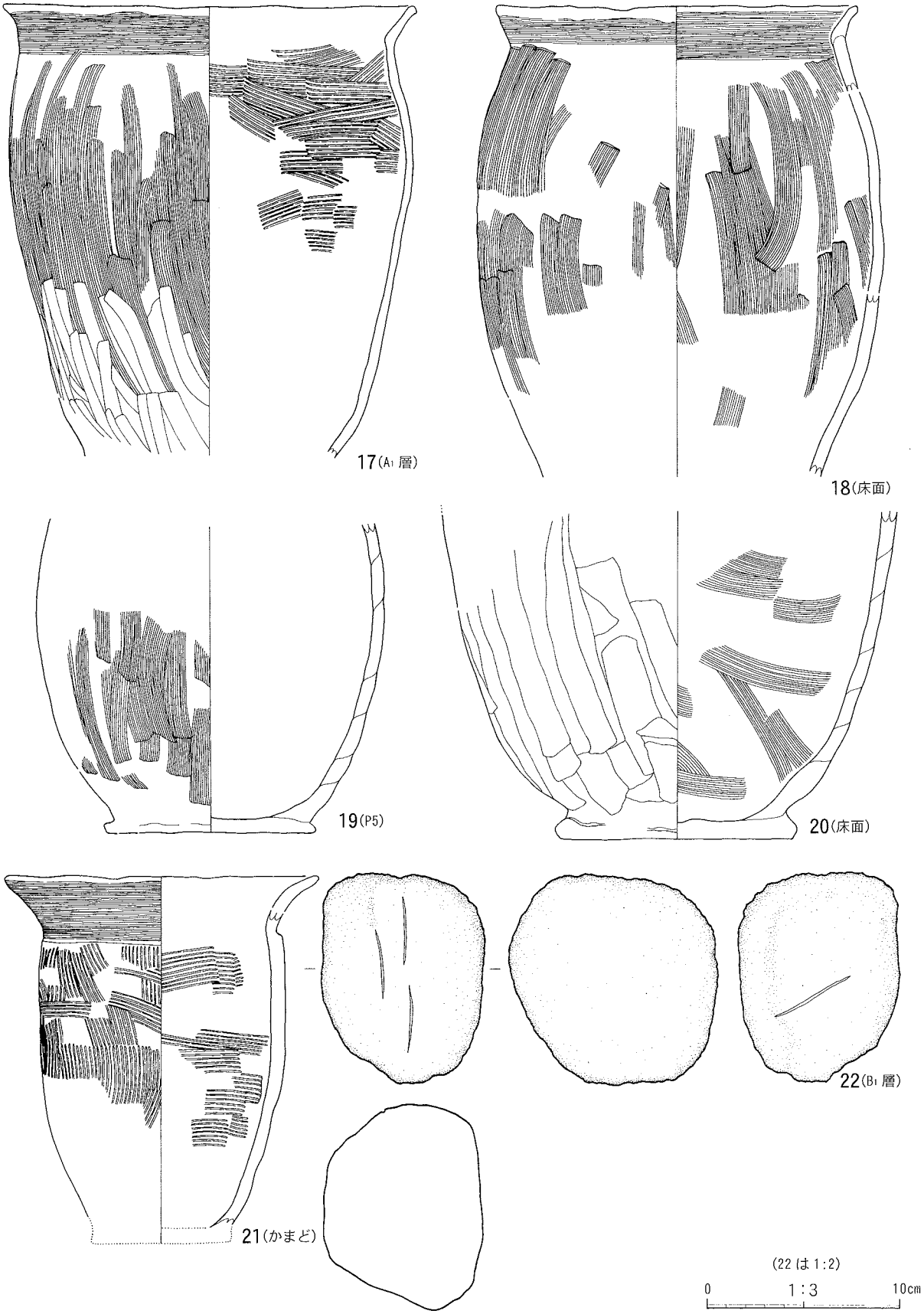
16～20は土師器長胴甕で、16は体部下半～底部を残すもので、体部外面には縦方向にヘラナデが施され、内面には横方向にハケメが施されている。17は口縁部～体部下半を残すもので、口縁



第31図　RA536 竪穴住居跡



第 32 図　RA536 竪穴住居跡出土遺物（1）



第 33 図　RA536 竪穴住居跡出土遺物 (2)

部にはヨコナデが施されているほか、体部外面には縦方向のヘラナデが施された後ヘラケズリが施されるものである。15も口縁部～体部下半を残すもので、口縁部内外面ともにヨコナデが施され、体部内外面には縦方向のヘラナデが施されている。19は体部下半～底部を残すもので、体部外面に縦方向のヘラナデが施されるもの。20も体部下半～底部を残すもので、体部外面には縦方向のヘラケズリが施され、内面にはヘラナデが施されているものである。21はかまどの支脚として転用されていた土師器小形甕である。口縁部にヨコナデ、体部の内外面にハケメが施されるものである。

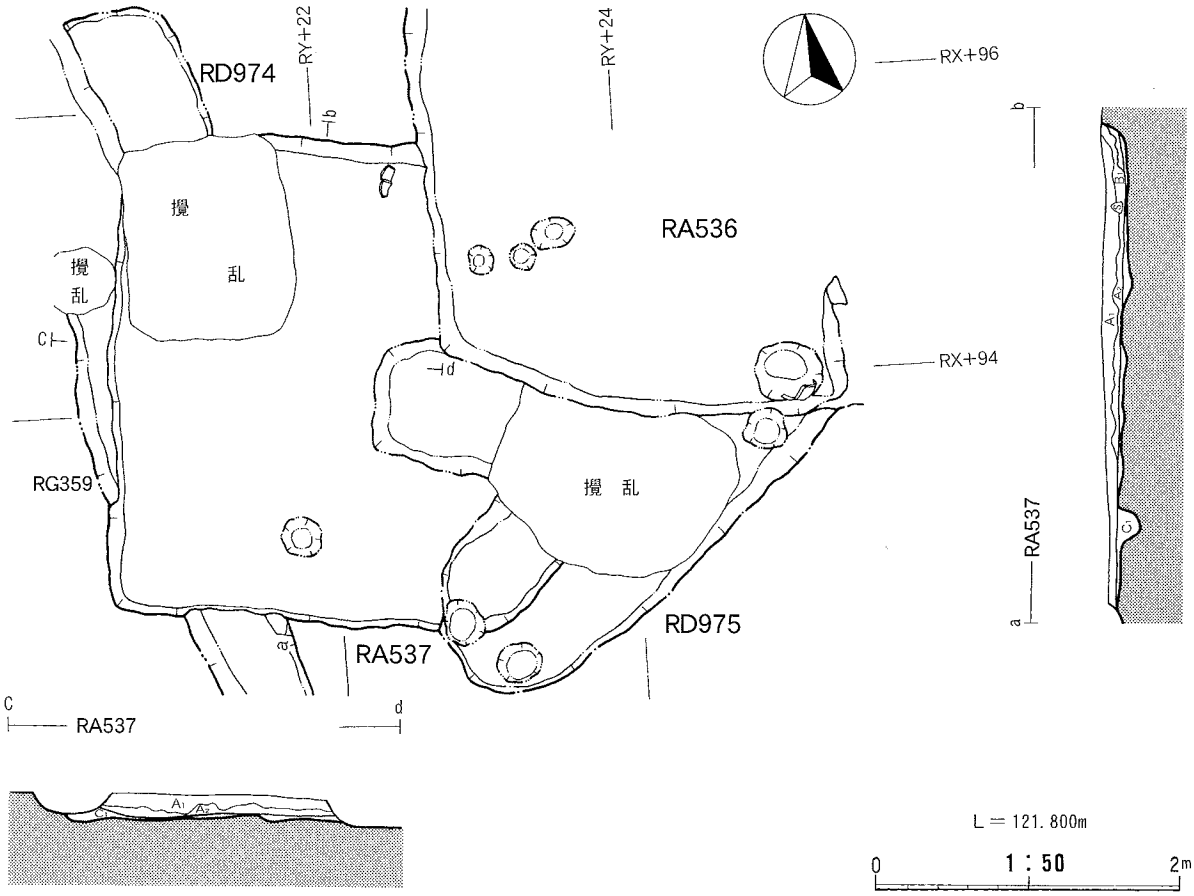
22は安山岩製の砥石で、２面に使用痕がみられるものである。

ＲＡ５３７竪穴住居跡（第34図）

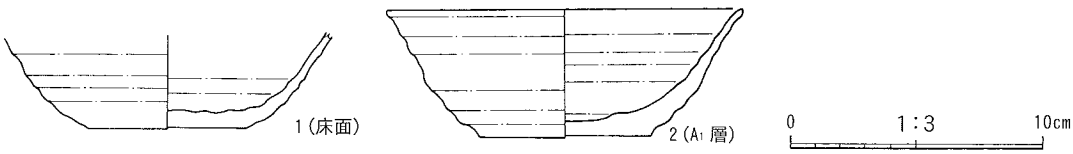
位　　置　調査区南東　**平面形**　正方形か　**主軸方向**　Ｅ10°Ｓか

規　　模　東西2.71m以上、南北3.21m

重複関係　ＲＡ536竪穴住居跡に切られ、ＲＤ975土坑を切る。　**掘込面**　削平



第 34 図　RA537 竪穴住居跡



第 35 図　RA537 竪穴住居跡出土遺物

検出面　表土直下褐色シルト層上面

埋　土　自然堆積で層相の違いにより２層に分けられる。暗褐色を主体とし、褐色土を粒状に含むＡ層、黒褐色土を主体とし、褐色土を少量含むＢ層からなる。床面構築土（Ｃ層）はシルト質の褐色土に若干の黒褐色土を含むものである。

壁の状態　壁は上方に向かいやや外傾するもので、検出面から床面までの深さ0.08～0.18mをはかる。

床の状態　床面はほぼ平坦である。床面下は一部が地山褐色シルト面のほかは構築土（Ｃ層）が層厚0.05～0.08mで確認されている。構築面は若干の起伏があり、底面には一部砂礫層がみられる。

出土遺物（第35図１・２）　１は口縁部を欠く須恵器坏で、ロクロ成形で糸切り後無調整のもの。２はあかやき土器坏で、口縁部にむかい外反するもの。ロクロ成形で、底部は糸切り後無調整である。

ＲＡ５３８竪穴住居跡（第36図）

位　置　調査区南東　　**平面形**　正方形か　　**主軸方向**　Ｅ３°Ｅ

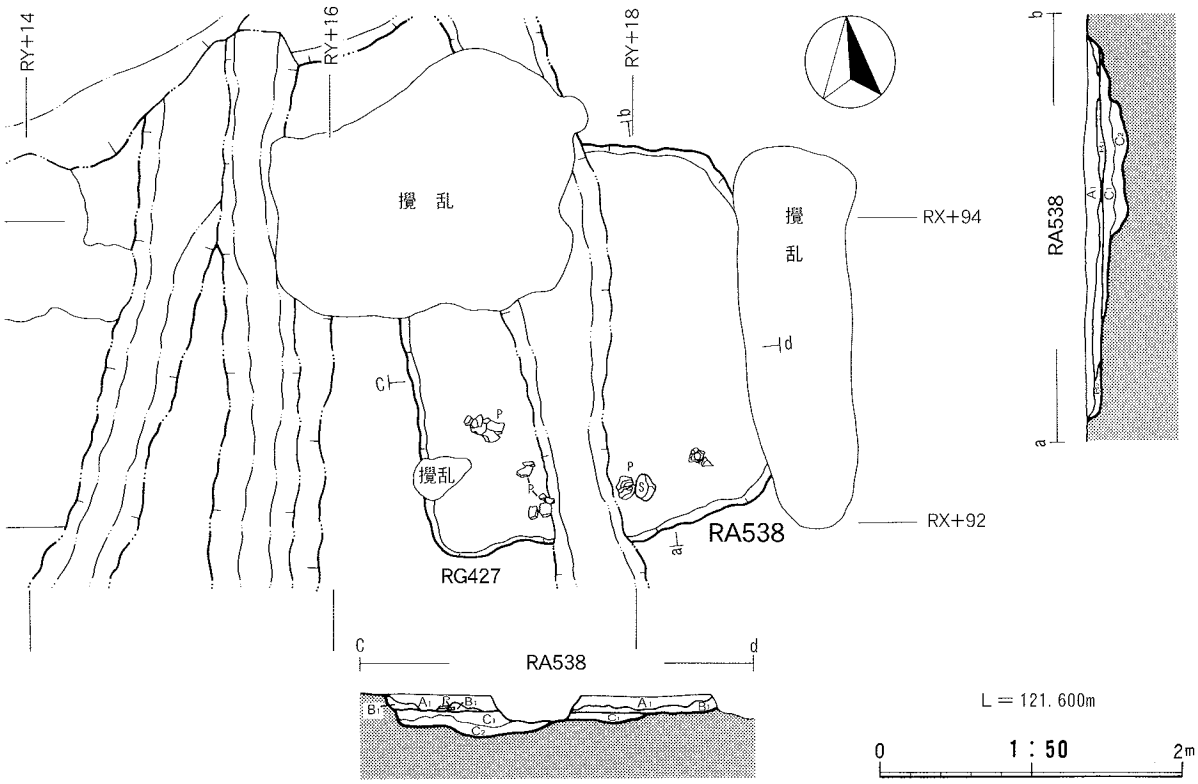
規　模　東西2.40m以上、南北2.64m　　**掘込面**　削平　　**検出面**　表土直下褐色シルト層上面

埋　土　自然堆積で層相の違いにより２層に分けられる。黒褐色土を主体とし、褐色土を粒状に含むＡ層。同じく黒褐色土を主体とし、褐色土を粒状に多く含むＢ層からなる。

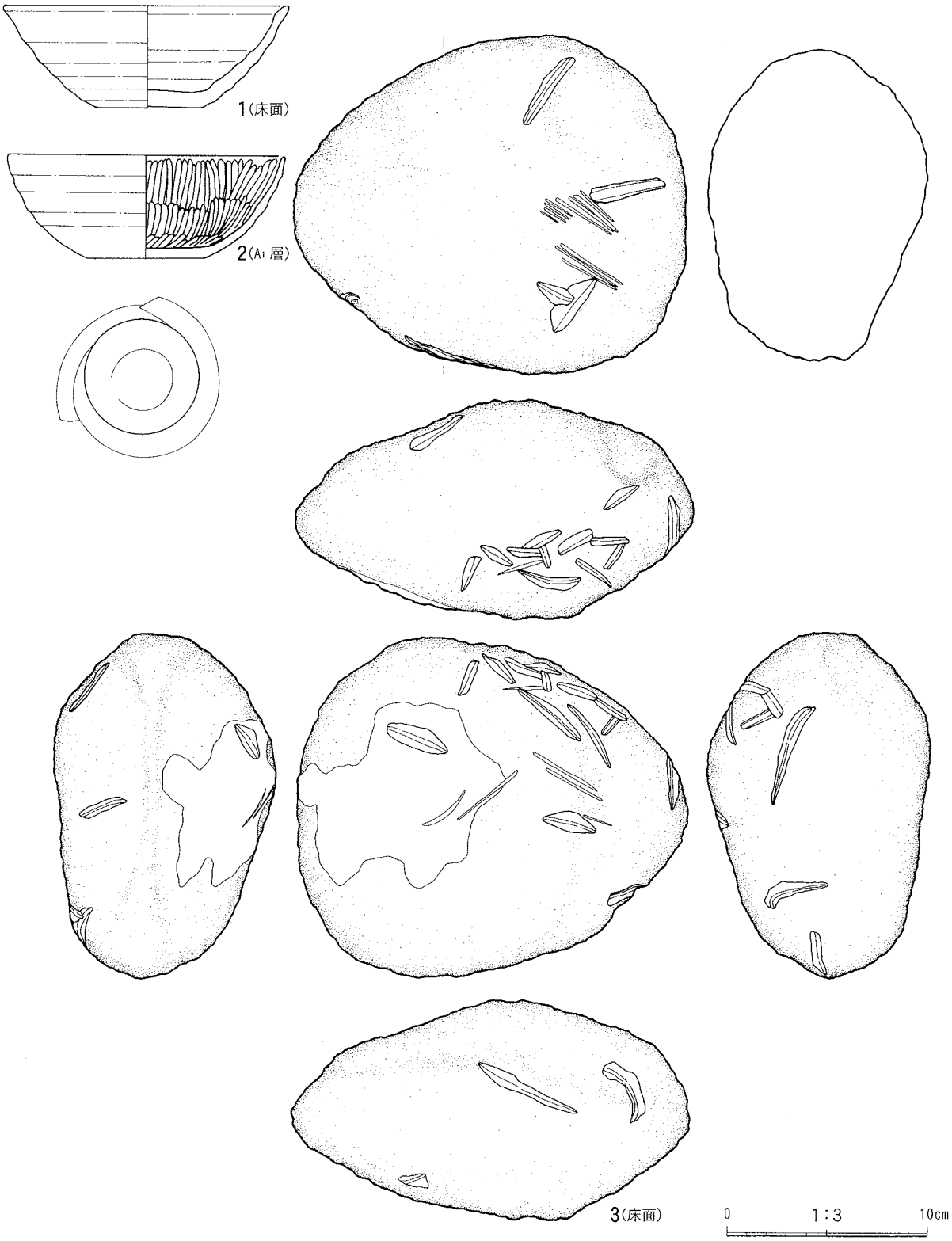
壁の状態　壁は、上方に向かいやや外傾する。検出面から床面までの深さは0.05～0.1mをはかる。

床の状態　床面はほぼ平坦で、顕著な起伏はみられない。構築土（Ｃ層）は褐色シルトに若干の黒褐色土が混入する。層厚は0.05～0.18mをはかる。構築面は起伏があり、部分的に大きく窪んでいる。

出土遺物（第37図１～３）　１はあかやき土器坏で、底部糸切り無調整のもの。２は土師器坏で、内面に黒色処理およびヘラミガキが施され、底部は回転糸切り後に回転ヘラケズリを施すもの。３は安山岩製の砥石で全面にわたって使用痕がみられる。



第36図　RA538竪穴住居跡



第 37 図　RA538 竪穴住居跡出土遺物

ＲＤ９７４土坑（第38図）

位　　置　調査区南東　　**平面形**　方形　　**長軸方向**　N45°E

規　　模　長軸1.75m、短軸1.10m以上、検出面からの深さ0.11m

重複関係　ＲＧ４２７溝跡に切られる。　**掘込面**　削平　　**検出面**　表土直下褐色シルト層上面

埋　　土　自然堆積で、黒褐色土を主体とし、褐色土を粒状に含むＡ層からなる。

底の状態　ほぼ平坦　　**出土遺物**　あかやき土器および土師器の小破片が数点出土。

ＲＤ９７５土坑（第38図）

位　　置　調査区南東　　**平面形**　長楕円形　　**長軸方向**　E15°N

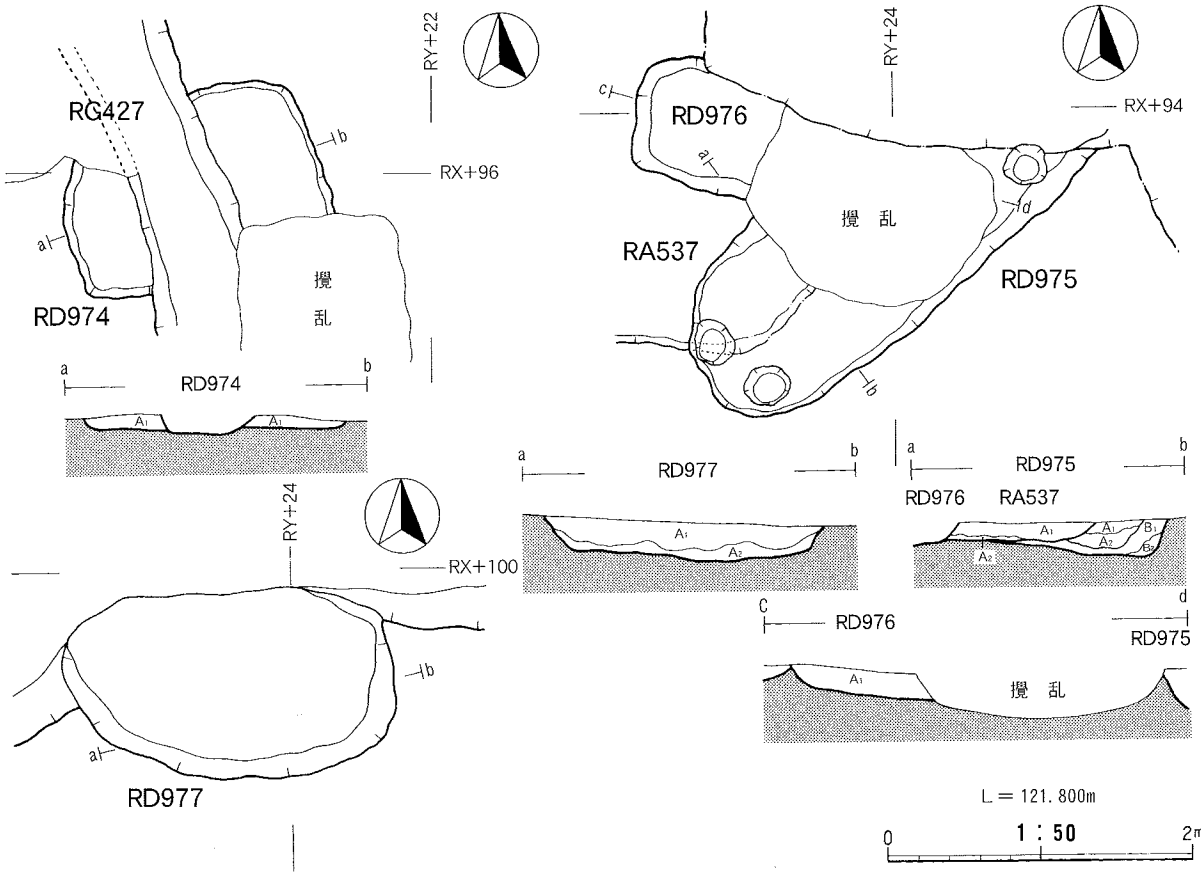
規　　模　長軸3.00m以上、短軸1.22m、検出面からの深さ0.20m

重複関係　ＲＡ５３６・５３７竪穴住居跡に切られる。

掘 込 面　削平　　**検出面**　表土直下褐色シルト層上面。

埋　　土　自然堆積で層相の違いにより２層に分かれる。黒～黒褐色土を主体とし、褐色土を粒状に若干含むＡ層。黒褐色土主体で、褐色土を粒状に含むＢ層からなる。

底の状態　平坦　　**出土遺物**　土師器小破片が数点出土。



第38図　RD974・975・976・977土坑

ＲＧ１０１溝跡（第39・40図）

位　　置　調査区南側　　**平面形**　ほぼ直線状に東西に延びる

規　　模　検出した長さは16.3mで、幅は上端1.35～2.08m、下端0.41～1.25m

断 面 形　逆台形、一部皿状　　重複関係　ＲＧ336・359・425・427溝跡に切られる。

掘 込 面　削平　　**検出面**　表土直下褐色シルト層上面

埋　　土　自然堆積で層相の違いにより３層に分けられる。黒褐色土主体で褐色土を少量含むＡ層。黒褐色土主体で褐色土を粒状に多く含むＢ層。褐色土を主体とし黒褐色土を多く含むＣ層からなる。

壁の状態　検出面から底面までの深さは0.29～0.39mで、緩やかに立ち上がる。

出土遺物（第41図１～７）　１～４はあかやき土器坏で、底部は糸切り無調整である。５は土師器坏で、内面に黒色処理およびヘラミガキが施されるものである。６は土師器の高台付坏で、底部のみを残し、内外面黒色処理を施された痕跡がある。７は安山岩製の砥石で、扁平な円礫の一面を使用しているものである。

ＲＧ３３６溝跡（第39・40図）

位　　置　調査区西半

平 面 形　北東－南西を軸に直線状に延び、北側の第41次調査区でも検出されている。

規　　模　検出した長さは17.0mで、幅は上端0.42～0.78m、下端0.15～0.29m

重複関係　ＲＧ101・359・360・361溝跡を切る。　**掘込面**　削平　　**検出面**　表土直下褐色シルト面

埋　　土　自然堆積で黒褐色土主体、褐色土を粒状に少量含むＡ層からなる。

壁の状態　検出面から床面までの深さは0.25～0.30mで、上方に向かいやや外傾する。

出土遺物　あかやき土器・土師器の小破片が出土。

ＲＧ３５９溝跡（第39・40図）

位　　置　調査区東半　　**平面形**　北西－南東を軸にやや蛇行しながら延びる。

規　　模　検出した長さは18.5mで、幅は上端0.40～0.78m、下端0.16～0.48m

重複関係　ＲＡ537竪穴住居跡・ＲＤ974土坑・ＲＧ101・360溝跡を切り、ＲＧ336・361溝跡に切られる

掘 込 面　削平　　**検出面**　表土直下褐色シルト層上面

埋　　土　自然堆積で黒褐色土主体、褐色土を粒状に含むＡ層からなる。

壁の状態　検出面から床面までの深さは0.06～0.14mで、上方に向かいやや外傾する。

出土遺物　須恵器、あかやき土器、土師器の小破片が出土。

ＲＧ３６０溝跡（第39・40図）

位　　置　調査区中央　　**平面形**　調査区の東西を南西－北東軸にのび、南北方向に緩やかに蛇行する。

規　　模　検出した長さは20.5mで、幅は上端1.25～2.15m、下端0.12～1.50m

重複関係　ＲＧ336・359・361・424・425・427溝跡に切られる。　**掘込面**　削平

検 出 面　表土直下褐色シルト層上面

埋　　土　自然堆積で３層に大別される。黒褐色土主体、褐色土を粒状に少量含むＡ層、黒褐色土を主体とし褐色土を粒状に含むＢ層、黒褐色主体で砂礫および鉄分を含むＣ層からなる。

壁の状態　検出面から床面までの深さは0.28～0.42mで、上方に向かい緩やかに外傾する。

出土遺物（第42図１～６）　１・２は須恵器坏で、底部は糸切り無調整である。３・４はあかやき土器坏で、底部糸切り無調整のもの。５は土師器高台付坏の底部、６は土師器甕の底部である。

ＲＧ３６１溝跡（第39・40図）

位　　置　調査区北西　　**平面形**　南西－北東軸にのび、緩やかに蛇行。

規　　模　検出した長さは16.0mで、幅は上端0.45～0.78m、下端0.26～0.46m

重複関係　ＲＧ359・360溝跡を切り、ＲＥ054竪穴、ＲＧ424・336溝跡に切られる。

掘 込 面　削平　　**検出面**　表土直下褐色シルト層上面

埋　　土　自然堆積で、黒褐色土主体、褐色土を粒状に少量含むＡ層からなる。

壁の状態　検出面から床面までの深さは0.14～0.18mで、上方に向かいやや外傾する。

出土遺物　あかやき土器および土師器の小破片が出土

ＲＧ４２４溝跡（第39・40図）

位　　置　調査区西側

平 面 形　ほぼ直線状に南北にのびる

規　　模　検出した長さは11.7mで、幅は上端0.30～0.50m、下端0.15～0.28m

重複関係　ＲＧ360・361溝跡を切る　　**掘込面**　削平　　**検出面**　表土直下褐色シルト層上面

埋　　土　自然堆積で、暗褐色土主体、褐色土を粒状に含むＡ層からなる。

壁の状態　検出面から床面までの深さは0.14～0.19mで、上方に向かいやや外傾する。

出土遺物　なし

ＲＧ４２５溝跡（第39・40図）

位　　置　調査区西側　　**平面形**　ほぼ南西－北東にのび、緩やかに蛇行する。

規　　模　検出した長さは約10.0mで、幅は上端0.25～0.55m、下端0.13～0.45m。

重複関係　ＲＧ360溝跡を切り、ＲＧ336溝跡に切られる。　　**掘込面**　削平

検 出 面　表土直下褐色シルト層上面

埋　　土　自然堆積で、黒褐色土主体、褐色土を粒状に含むＡ層からなる。

壁の状態　検出面から床面までの深さは0.11～0.19mで、上方に向かいやや外傾する。

出土遺物　あかやき土器、土師器の破片が数点出土。

ＲＧ４２６溝跡（第39・40図）

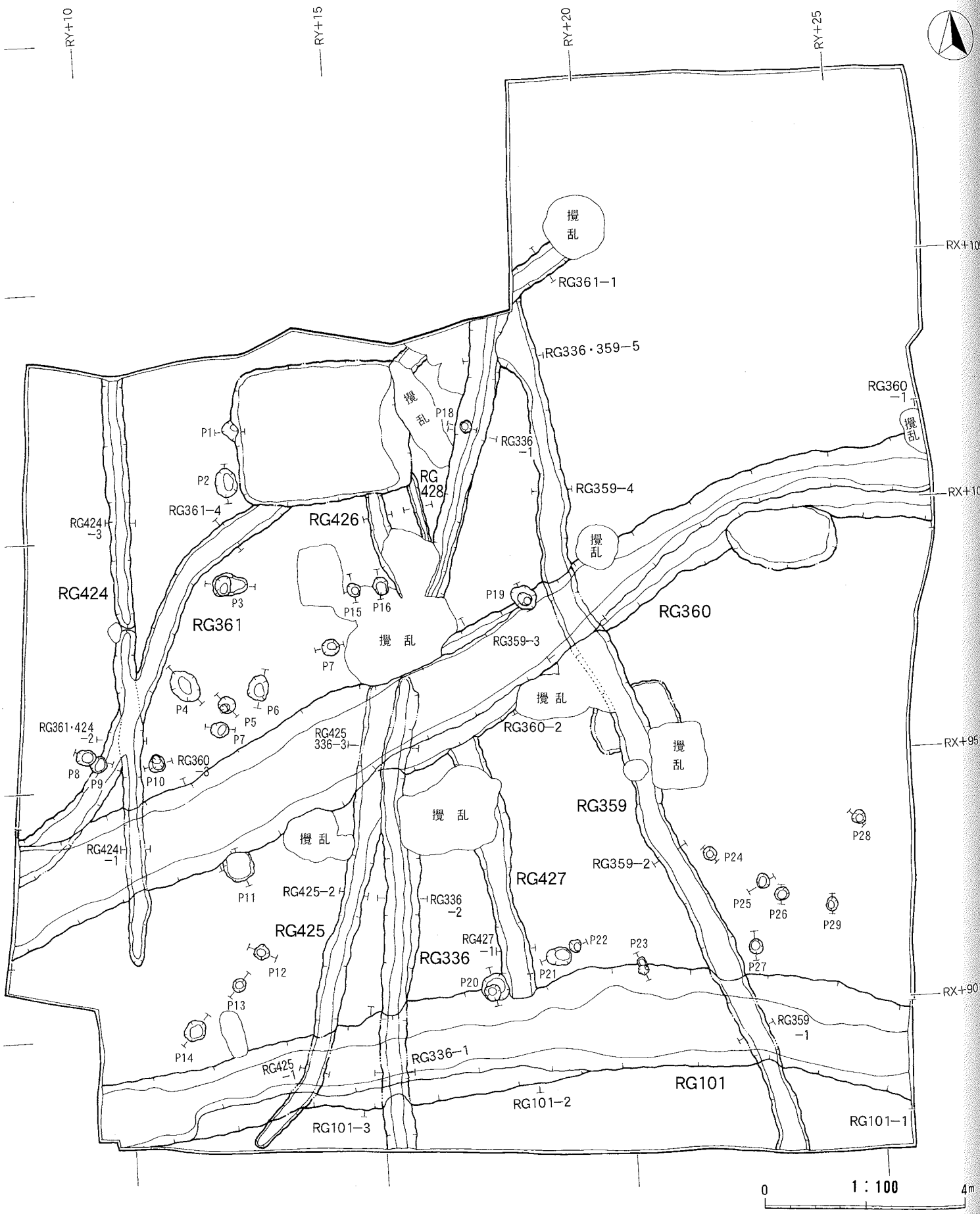
位　　置　調査区北西　　**平面形**　南東－北西を軸に南北にのびる。

規　　模　検出した長さは2.2mで、幅は上端0.31～0.40m、下端0.19～0.27m。

重複関係　ＲＥ054竪穴に切られる。　　**掘込面**　削平　　**検出面**　表土直下褐色シルト層上面

埋　　土　自然堆積で、暗褐色土を主体とし褐色土を粒状に含むＡ層からなる。

壁の状態　検出面から床面までの深さは0.08～0.10mで、断面形はⅢ形。　　**出土遺物**　なし



第39図　RG101・336・359・360・361・424・425・426・427・428 溝跡、ピット

ＲＧ４２７溝跡（第39・40図）

位　　置　調査区南半中央　　**平面形**　南東－北西を軸に南北にのびる。

規　　模　検出した長さは5.3mで、幅は上端0.42～0.75m、下端0.25～0.48m。

重複関係　ＲＡ538竪穴住居跡を切り、ＲＧ101・360溝跡に切られる。

掘 込 面　削平　　**検出面**　表土直下褐色シルト層上面

埋　　土　自然堆積で、黒色土を主体とし褐色土を粒状に含むＡ層からなる。

壁の状態　検出面から床面までの深さは0.15～0.2mで、上方に向かいやや外傾する。

出土遺物　あかやき土器の小破片が１点出土。

ＲＧ４２８溝跡（第39・40図）

位　　置　調査区北西　　**平面形**　北西－南東を軸にほぼ南北にのびる。

規　　模　検出した長さは1.40mで、幅は上端0.13～0.20m、下端0.06～0.16m。

重複関係　ＲＥ054竪穴に切られる。　**掘込面**　削平　　**検出面**　表土直下褐色シルト層上面

埋　　土　自然堆積で、黒色土を主体とし褐色土を粒状に含むＡ層からなる。

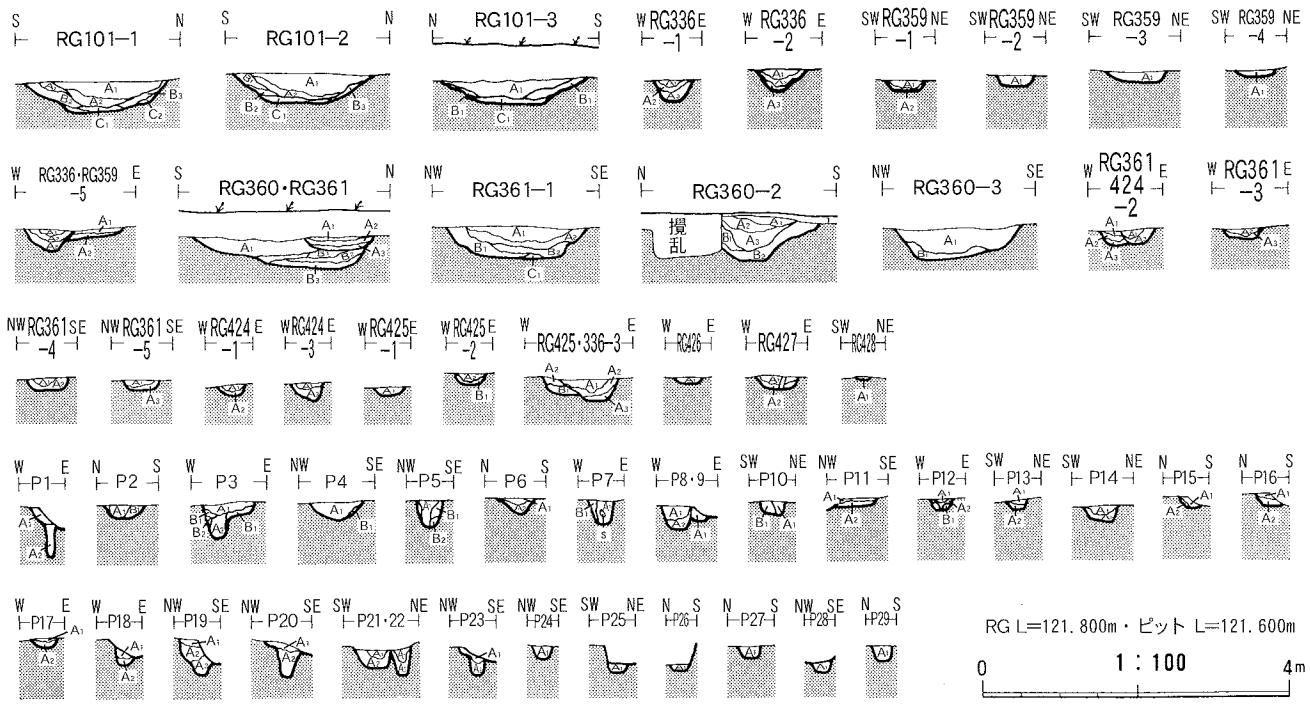
壁の状態　検出面から床面までの深さは0.04mで、断面形皿状である。　**出土遺物**　なし

近世以降の遺構

ＲＥ０５４竪穴（第43図）

位　　置　調査区南東　　**平面形**　方形か　　**主軸方向**　Ｅ５°Ｎ

規　　模　東西3.50m、南北2.85m　　**重複関係**　ＲＧ361・426・428溝跡を切る。



第40図　RG101・336・359・360・361・424・425・426・427・428溝跡、ピット土層断面

掘 込 面　削平　　**検出面**　表土直下褐色シルト層上面

埋　　土　自然堆積で層相の違いにより２層に大別される。暗褐色土～黒褐色土を主体とし、黄褐色土を粒状に含むＡ層。暗褐色土を主体とし褐色土を含むＢ層からなる。

壁の状態　検出面から床面までの深さは0.12～0.32mをはかり、壁は若干上方に向かい開く。

底の状態　東側底面が壁に向かって高くなっている。　　**出土遺物**　なし

ＲＤ９７６土坑（第38図）

位　　置　調査区南東　　**平面形**　楕円形　　**長軸方向**　Ｅ15°Ｓ

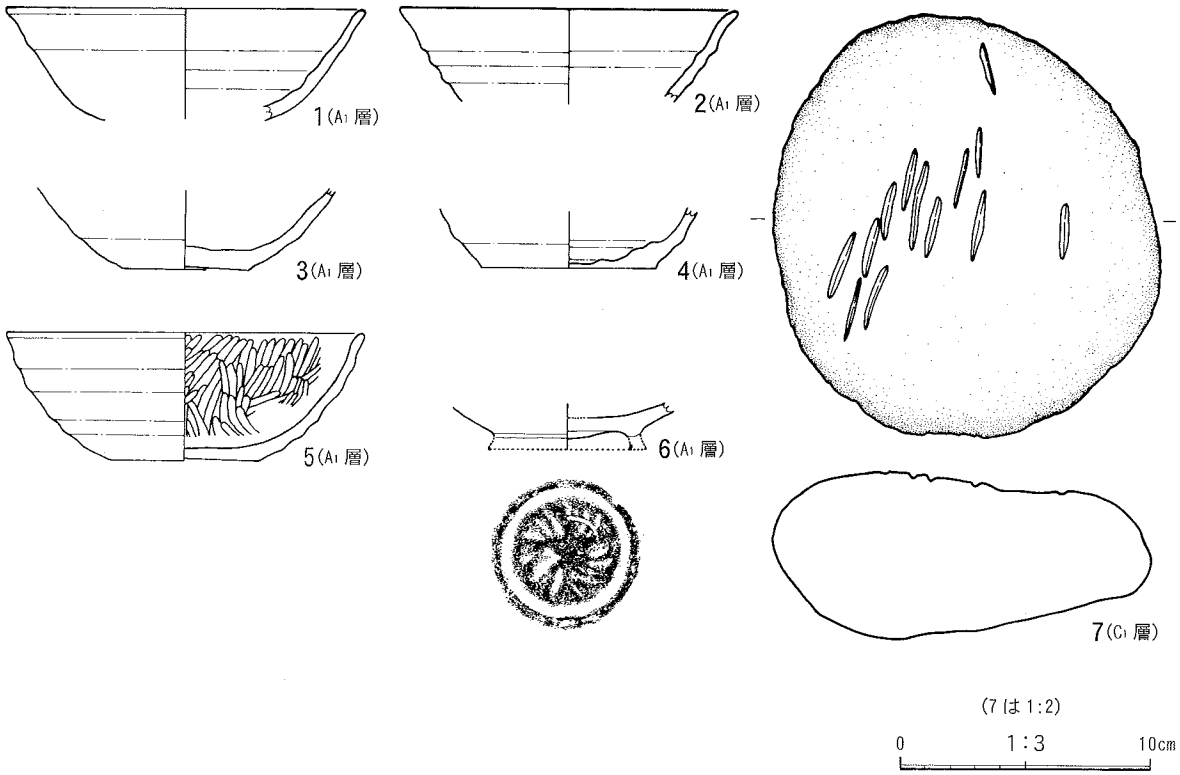
規　　模　東西0.92m以上、南北0.82m、検出面からの深さ0.16m。

重複関係　ＲＡ536・537竪穴住居跡、ＲＤ975土坑を切る。

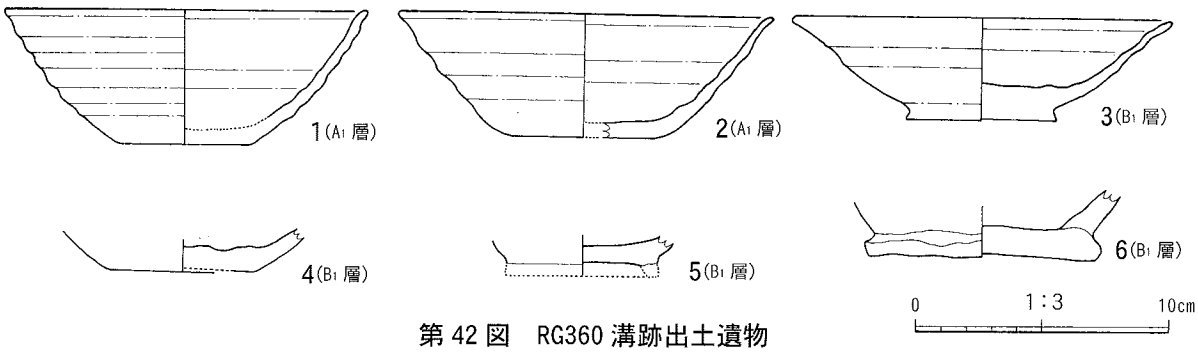
掘 込 面　削平　　**検出面**　表土直下褐色シルト層上面

埋　　土　自然堆積で、黒褐色土を主体とし褐色土を粒状に含むＡ層からなる。

底の状態　ややくぼむ　　**出土遺物**　なし



第 41 図　RG101 溝跡出土遺物



第 42 図　RG360 溝跡出土遺物

ＲＤ９７７土坑（第38図）

位　　置　調査区東半　　**平面形**　楕円形　　**長軸方向**　Ｅ５°Ｓ

規　　模　東西2.05m、南北1.20m以上、検出面からの深さ0.25m。

重複関係　ＲＧ360溝跡を切る　　**掘込面**　削平　　**検出面**　表土直下褐色シルト層上面

埋　　土　自然堆積で、黒褐色土を主体とし砂礫を多く含むＡ層からなる。

底の状態　ほぼ平坦　　**出土遺物**　なし

ピット（第39・40図）

位　　置　第40次調査で検出したピットは総計29口を数える。分布は、調査区西半および南東側で認められるが、何らかの掘立柱建物跡を構成する柱穴とは確認し得ないものばかりである。

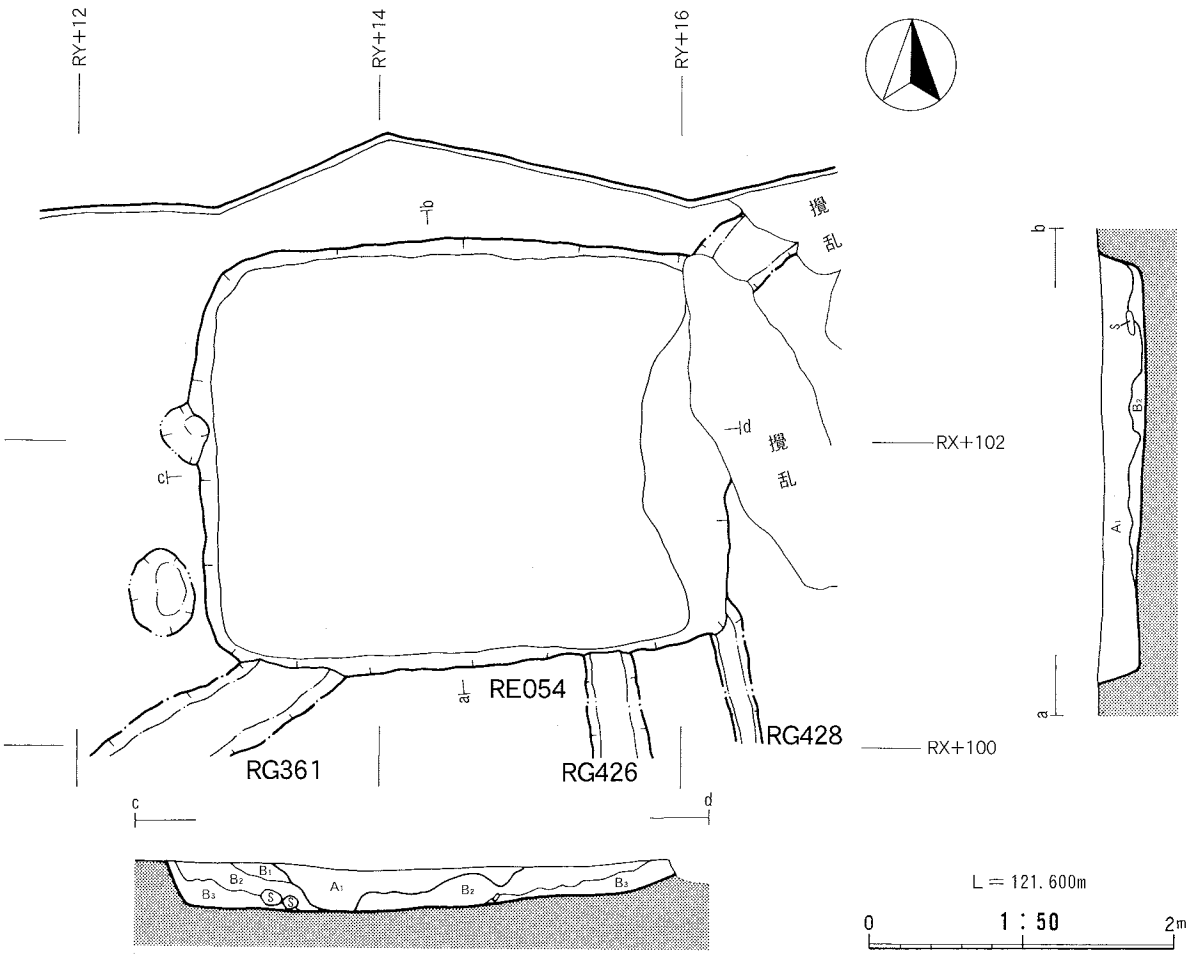
規　　模　径が0.25～0.30m前後のものはＰ１・５・７・９・10・12・13・15～17・18・22・24～29。径が0.35～0.50m前後のものはＰ８・14・19～21・23。径が0.60～0.70m前後のものはＰ３・４・６・11である。

柱 痕 跡　柱痕跡が認められるのは、Ｐ２・３・５・７・10の５口である。

埋　　土　検出面は削平された地山シルト層上面で、埋土の大半は黒褐色～暗褐色土を主体とし、褐色土を含むものである。また、近接するピットにおいては規模と同様に層相にも共通性はみられない。

出土遺物　なし

（三浦　陽一）



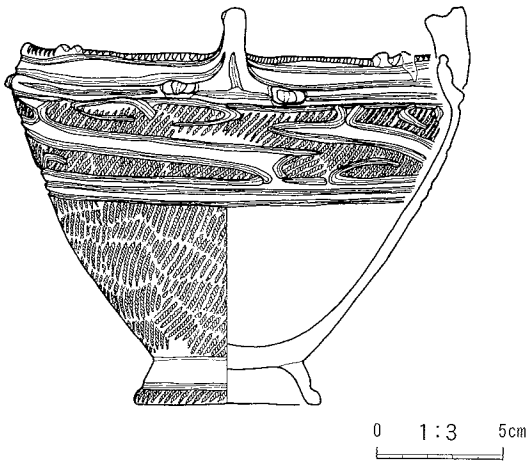
第43図　RE054竪穴跡

（２） 第41次調査

縄文時代の遺物

遺構外出土遺物（第44図１）　１は縄文時代晩期中葉の台付鉢である。ＲＡ540竪穴住居跡北側の地山シルト層より出土。口縁から底部まで3/4残存している。体部上半が外傾し、口縁部が内湾する。また口縁部・頸部には突起がつく。胴部には直線状雲形文が施文されている。大洞C2式に分類できる。

台太郎遺跡など、雫石川西岸に立地する沖積台地上の遺跡では、地山シルト層より極稀に縄文時代晩期～弥生時代の遺物が出土する。地山シルト層の一部が遺物包含層を形成しているためと考えられる。遺構はほとんど見つかっていない。



第44図　遺溝外出土遺物

古代の遺構・遺物

ＲＡ５３９竪穴住居跡（第45図）

位　置　調査区北東部　**平面形**　方形と考えられる　**主軸方向**　不明

規　模　東西3.2ｍ以上、南北3.5ｍ以上　**重複関係**　ＲＧ045・435溝跡に切られる。

掘込面　削平　**検出面**　褐色シルト層上面

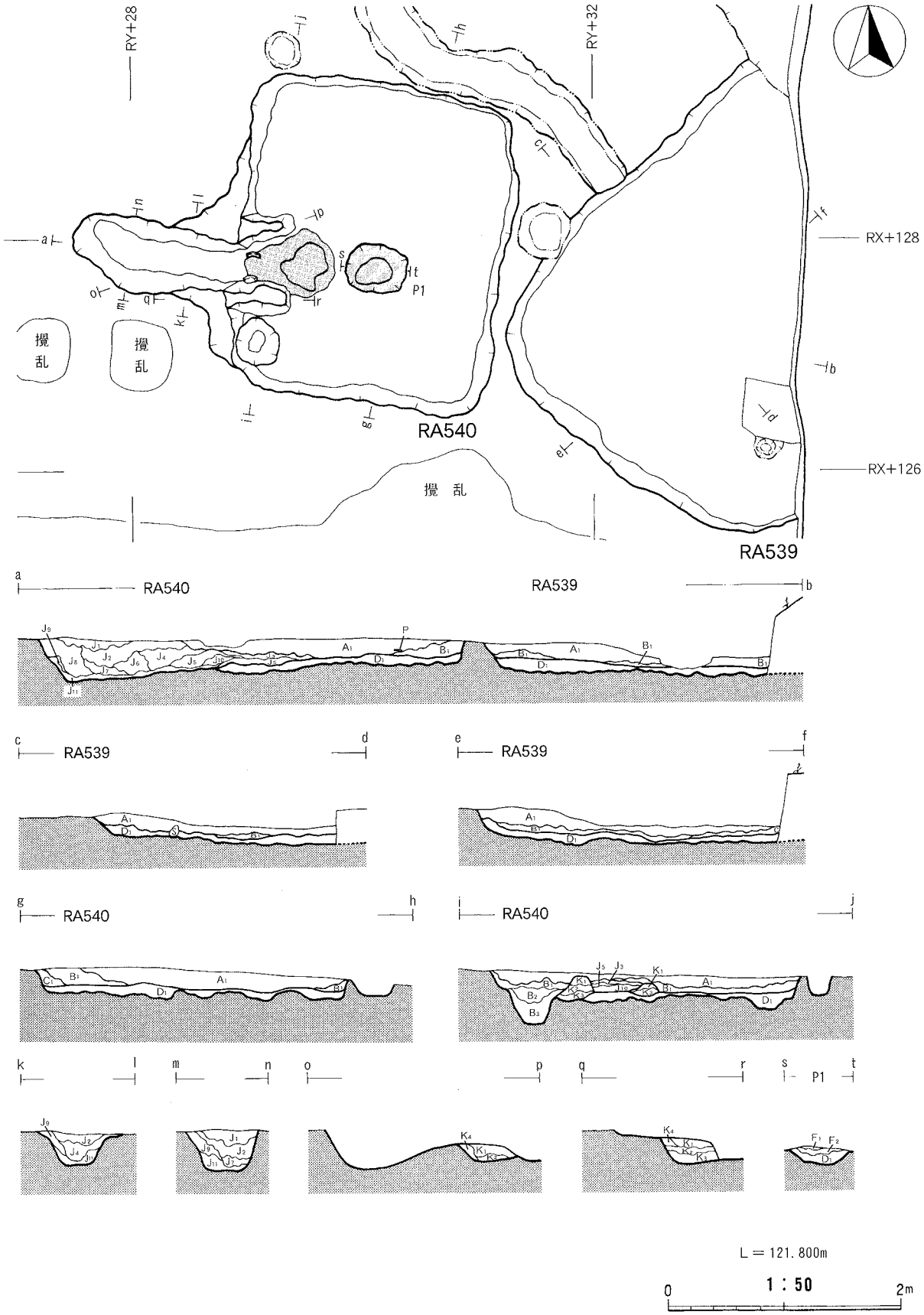
埋　土　自然堆積で層相の違いにより、Ａ～Ｄの４層に大別できる。Ａ層は黒色土主体で暗褐色土、焼土粒を少量含む。Ｂ層は褐色土と暗褐色土を主体とし、Ｃ層は褐色土を主体に暗褐色土を粉状に含む。Ｄ層は暗褐色土を主体とし褐色土、砂礫粒、炭化物粒を含む床面構築土である。

壁の状態　検出面から床面までの深さは、0.06～0.20ｍで壁は外傾して立ち上がる。壁面に一部砂礫層が露出している。北西壁上端の一部は撹乱をうけていた。

床の状態　ほぼ平坦である。床は厚さが0.01～0.12ｍほどの床面構築土Ｄ層上である。

かまど　不明

出土遺物（第46図１・２・３）　１はロクロ非使用土師器坏で、体部外面下半にわずかに段が認められる。内外面ともヘラミガキ調整され、内面は黒色処理が施される。２はロクロ非使用土師器甕である。口縁部のみ残存する。緩やかに外反する。３はロクロ非使用の土師器小形甕である。口縁部から体部下半まで約半分残存する。口縁部は外反し口端で直立する。頸部には段を持つ。口縁部は内外面ヨコナデ、体部外面はヘラケズリ、内面はヘラナデ調整が施されている。



第45図　RA539・540竪穴住居跡

ＲＡ５４０竪穴住居（第45図）

位　　置　調査区北東部　　**平面形**　方形　　**主軸方向**　N91°W

規　　模　東西2.32m、南北2.75m　　**重複関係**　なし

掘込面　削平　　**検出面**　褐色シルト層上面

埋　　土　自然堆積で層相の違いによりＡ～Ｄの４層に大別される。Ａ層は黒褐色土が主体で褐色土を少量含む。Ｂ層は暗褐色土を主体とし、褐色土を粉～粒状に含む。Ｃ層は褐色土を主体とし、暗褐色土を含む壁面崩壊土である。Ｄ層は床面構築土で褐色土を主体に暗褐色土を含む。

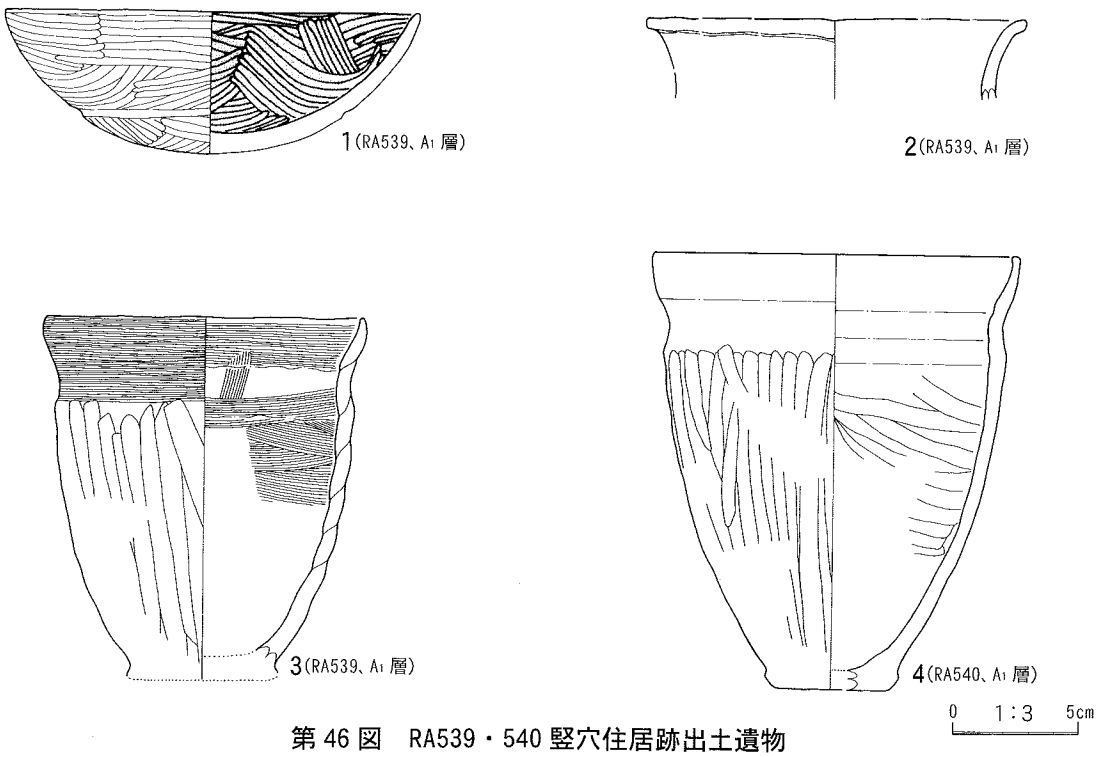
壁の状態　ほぼ直立する。検出面から床面までの深さは0.15m前後をはかる。

床の状態　ほぼ平坦である。床は床面構築土Ｄ層上面で、構築土の厚さは0.03～0.1mである。

かまど　西壁南寄りに検出。煙道の平面形は不整溝状を呈し、底面は火床面から緩やかに深くなり、煙出部が最も深くなる。かまどそでの外側の壁面は内側に崩落している。かまどの規模は西壁から煙出し先端までの長さは1.42m、幅0.35～0.42m、検出面から平坦面までの深さは0.24～0.38mである。かまどそではほぼ直線的である。かまどそで構築土（Ｋ層）は褐色土を主体に暗褐色土を少量含む。火床面は長径0.87m、短径0.57mの不整楕円形である。火床面の西端に支脚の一部と考えられる自然石が２点検出されている。浸透層の厚さは0.12m程である。かまど堆積土（Ｊ層）は暗褐色土～褐色土を主体に焼土粒・炭化物粒を含む。

ピット　床面より２口（Ｐ１、Ｐ２）検出されている。Ｐ１は床面ほぼ中央に検出され、長径0.52m、短径0.43mの楕円形を呈し、焼土が堆積している。Ｐ２は住居南西隅の壁面直下に検出され、直径0.40mほど、深さ0.31mをはかり不整円形である。カマドに近接することより貯蔵穴と考えられる。

出土遺物（第46図４）　４はロクロ非使用土師器小形甕で、およそ1/3残存している。口縁部は外反し口端で直立する。口唇部は平坦でやや角張る。頸部には緩やかな段を持つ。底部外面は弱く張り出し、底面には木葉痕がみとめられる。口縁部は内外面ともヨコナデ、体部外面はヘラケズリ、内面はヘラナデ調整が施されている。



第46図　RA539・540竪穴住居跡出土遺物

ＲＡ５４１竪穴住居（第47図）

位　　置　調査区北西部　　**平面形**　方形　　**主軸方向**　N58° W

規　　模　北西・南東2.90m、北東・南西3.10m　　**重複関係**　ＲＧ336溝跡に切られる。

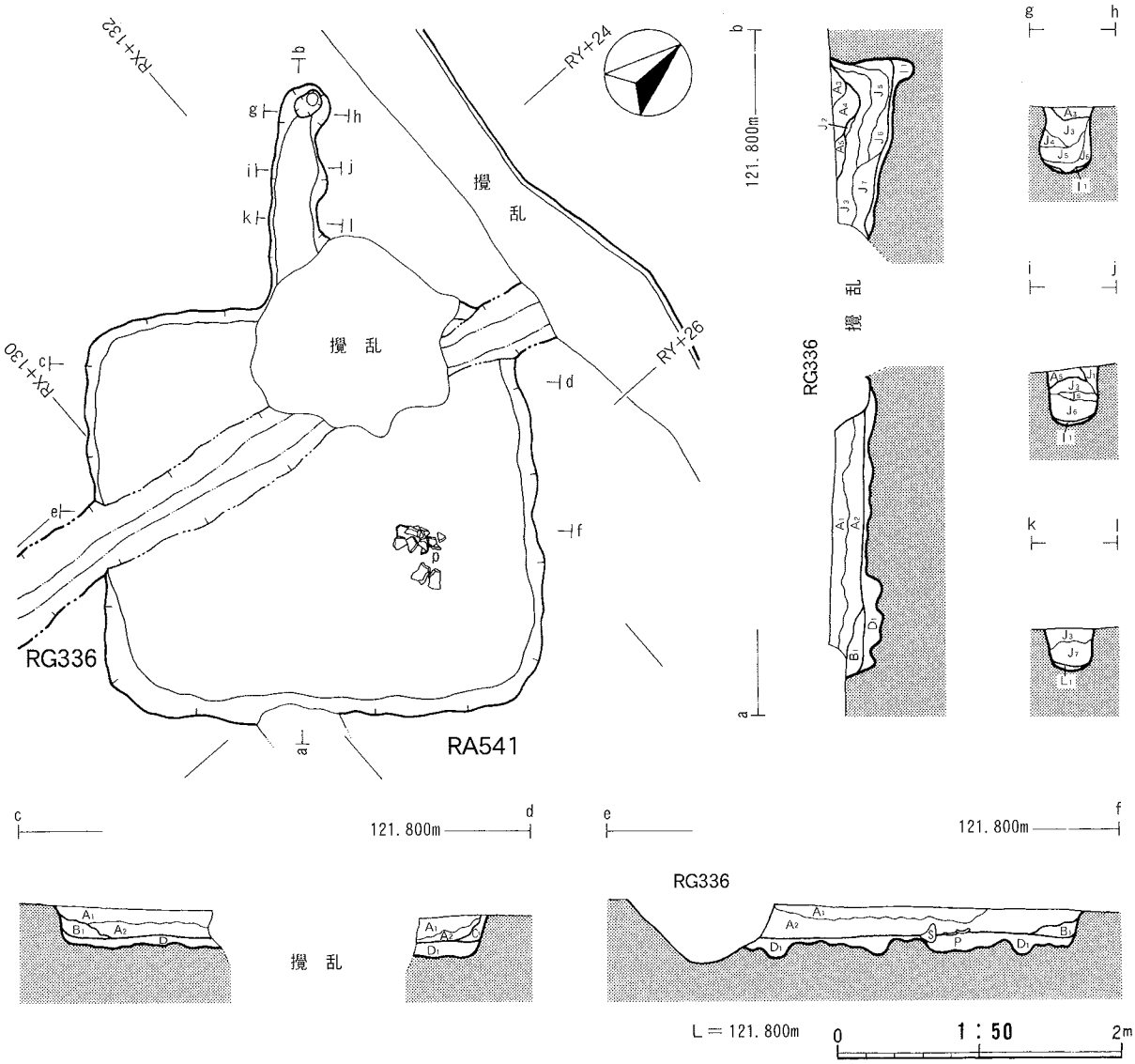
掘 込 面　削平　　**検出面**　褐色シルト層上面

埋　　土　自然堆積で層相の違いによりＡ～Ｄの４層に大別できる。Ａ層は暗褐色土を主体として褐色土を含む。Ｂ層は黒褐色土を主体として褐色土を粉・ブロック状に含むもの。Ｃ層は暗褐色土を主体に褐色土を多く含む。Ｄ層は床面構築土で褐色土に暗褐色土を含む。

壁の状態　検出面から床面までの深さは0.18～0.25mで壁は直立気味に外傾する。

床の状態　ほぼ水平である。床は床面構築土Ｄ層上面で、構築土の厚さは0.03～0.15mである。

か ま ど　北西壁中央に検出。煙道の平面形は溝状を呈する。火床面やかまどそで部はカクランされており不明。煙道の底面は住居床面より緩やかに傾斜しており、煙出部がもっとも深くなる。煙道部の規模は、北西壁から煙出し先端までの長さが1.55m、幅が0.25～0.40m、検出面からの深さは0.19～0.46mをはかる。煙出部は直径0.32m前後の円形を呈する。かまど堆積土（Ｊ層）は暗褐色土と褐色土を主体とし、黒色土や焼土粒を含む。



第47図　RA541竪穴住居跡

出土遺物（第48図）　１はロクロ非使用土師器の小型単孔式甑である。口縁部から底部まで2/3ほど残存する。口縁部はやや外反する。頸部に緩い稜がみとめられる。底部のほぼ中央に穿孔されている。内外面ともに口縁部はヨコナデ、体部はヘラケズリ、底面内側穿孔部の周りは、ヘラミガキ調整が施されている。２はほぼ完形のロクロ非使用土師器の無底式甑である。口縁は直立し底面はない。底部上部に内側から２箇所ほぼ対角線上に穿孔されている。体部は内外面ともにミガキ調整が施されている。

ＲＡ５４２竪穴住居（第49・50図）

位　　置　調査区南西部　　**平面形**　方形と考えられる。　　**主軸方向**　N29° W

規　　模　北東・南西7.9m以上、北西・南東7.3m以上

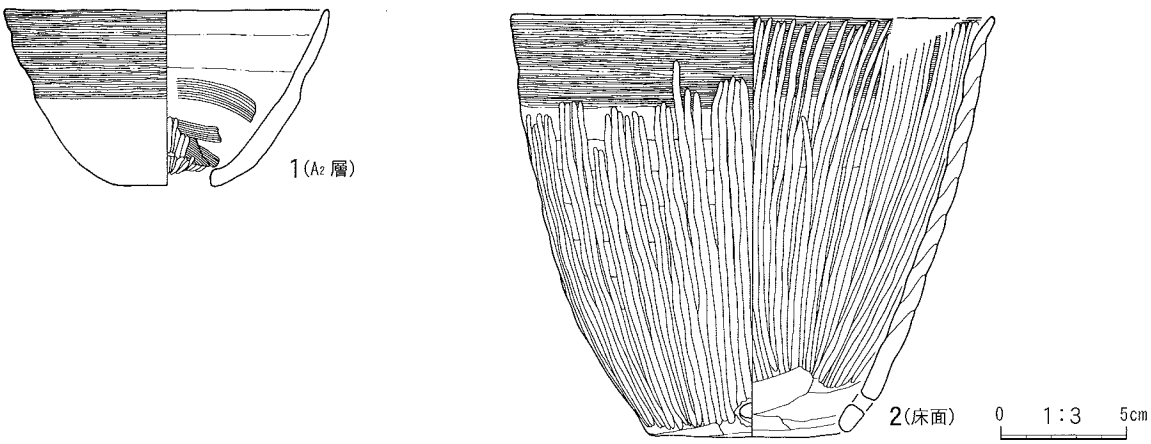
重複関係　ＲＧ336に切られる。　　**掘込面**　削平　　**検出面**　褐色シルト層上面

埋　　土　自然堆積で層相よりＡ～Ｅの５層に大別できる。Ａ層は黒褐色土を主体とし、褐色土、少量の焼土粒を含む。Ｂ層は暗褐色土を主体とし、褐色土を含む。Ｃ層は褐色土・暗褐色土を主体とし、黒色土・炭化物粒・焼土粒を含む。Ｄ層は床面構築土で褐色土に暗褐色土を含む。Ｅ層は壁面直下の周溝内堆積土で暗褐色土に褐色土や炭化物粒を若干含む。

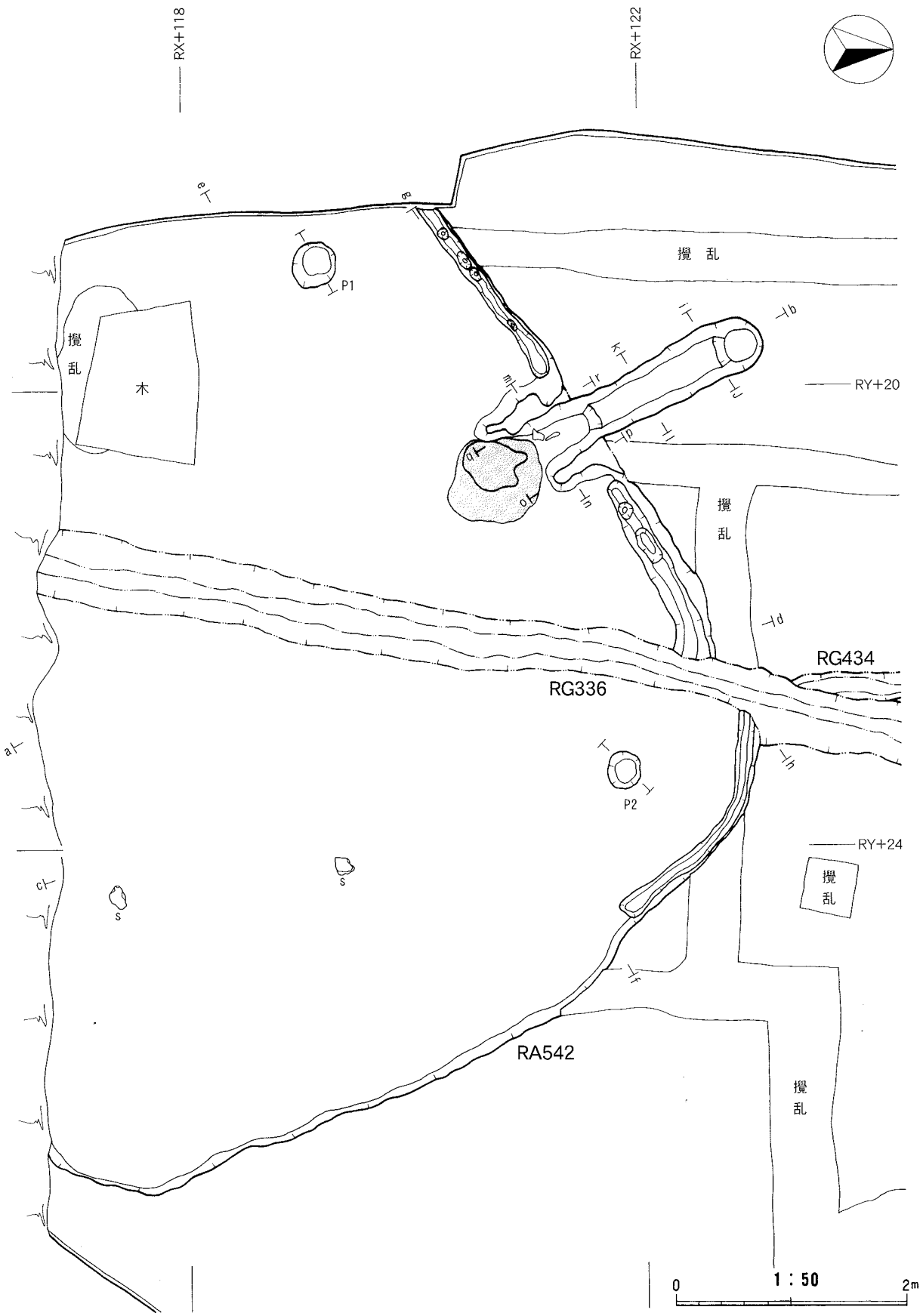
壁の状態　外傾気味に直立する。検出面から床面までの深さは0.05～0.29mである。

床の状態　ほぼ平坦である。北西から北東側一部の壁際には、幅0.11～0.21m、床面からの深さ0.02～0.14mほどの周溝がめぐる。床は床面構築土Ｄ層の上面である。

か ま ど　北西壁中央に検出。煙道は火床面や煙出し部より一段高い構造になっていおり、底面がほぼ平坦な溝状である。規模は北西壁より煙出し先端までの長さ1.80m、幅0.40～0.48m、検出面から平坦面までの深さは0.12～0.20m程である。かまど堆積土（Ｊ層）は、褐色土を主体とし暗褐色土や焼土粒、炭化物粒をふくむ。底面は厚さ0.02～0.06mほどでのかまど構築土（Ｌ層）上面である。かまどそでは南そでが一部崩壊しているものの直線的に検出された。そで構築土（Ｋ層）は褐色土に暗褐色土を若干含む。規模は北そでが長さ0.55m、幅0.11～0.37m。南そでは長さ0.76m、



第 48 図　RA541 竪穴住居跡出土遺物

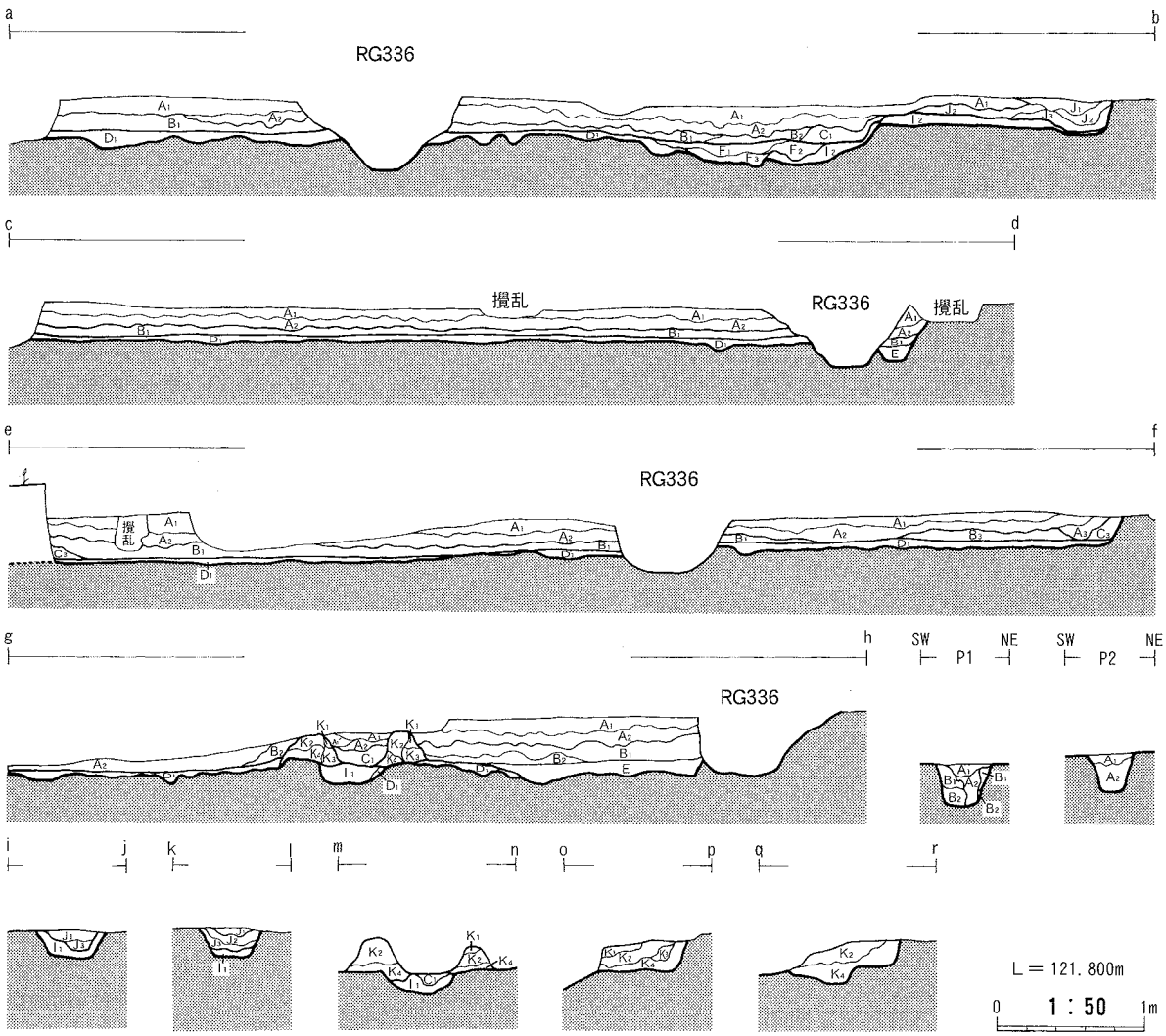


第 49 図　RA542 竪穴住居跡

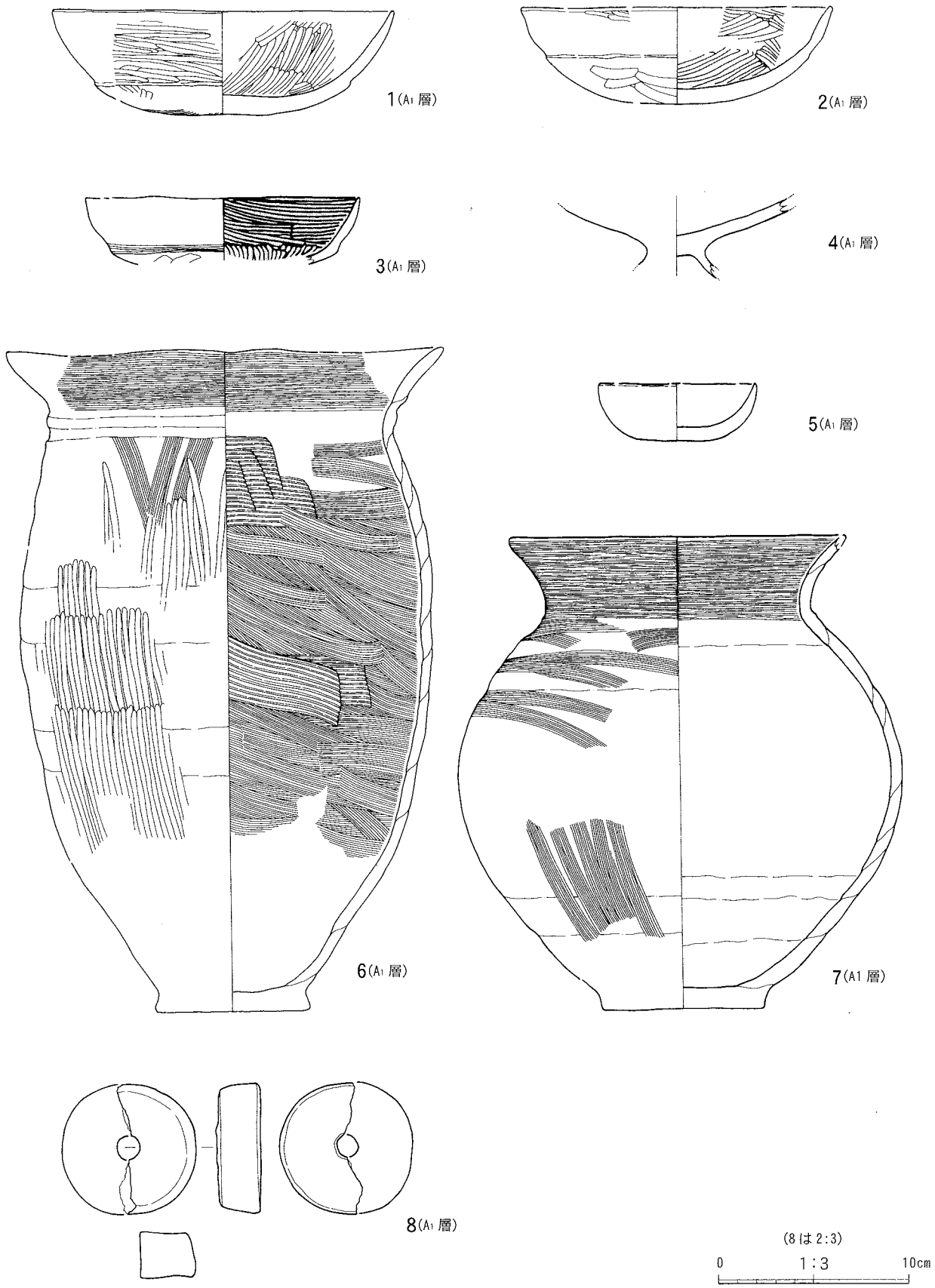
幅0.06～0.26mである。火床面は両そでのやや前方に長径0.90m、短径0.78mほどの楕円形の範囲で、床面より0.07m掘り窪められ、焼土（F層）が0.09mほど堆積している。煙出しの平面形は直径0.48mほどの円形を呈し、検出面からの深さは0.20mほどである。

ピット　床面より２口（Ｐ１・Ｐ２）検出した。いずれも住居の柱穴の一部になるものと思われる。Ｐ１は床面北西寄りに検出した。直径0.37m、深さ0.29mをはかる。埋土は暗褐色土を主体に褐色土を含む。Ｐ２は床面北西寄りに検出した。直径0.30m、深さ0.26mをはかる。埋土は暗褐色土～黒褐色土を主体に褐色土を含む。

出土遺物（第51・52図）　１～３はロクロ非使用土師器坏である。１は口縁から底部までおよそ2/3残存している体部に段のつく平丸底の坏である。外面は口縁部がヘラミガキ、体部はハケメの調整が施されている。内面はヘラミガキ調整である。２は体部上半から底部までおよそ1/3残存する平丸底の坏である。体部に弱い段が付き、外面は体部上半がヘラミガキ、体部下半がヘラケズリ、内面はヘラミガキ、黒色処理の調整が施されている。３は口縁から体部上半までおよそ1/5残存する体部に段の付く坏である。外面は体部上半が不明瞭なヘラミガキ、体部下半がヘラケズリ、内面は黒色処理とヘラミガキがほどこされている。４は体部がおよそ1/5残存するロクロ非使用高台

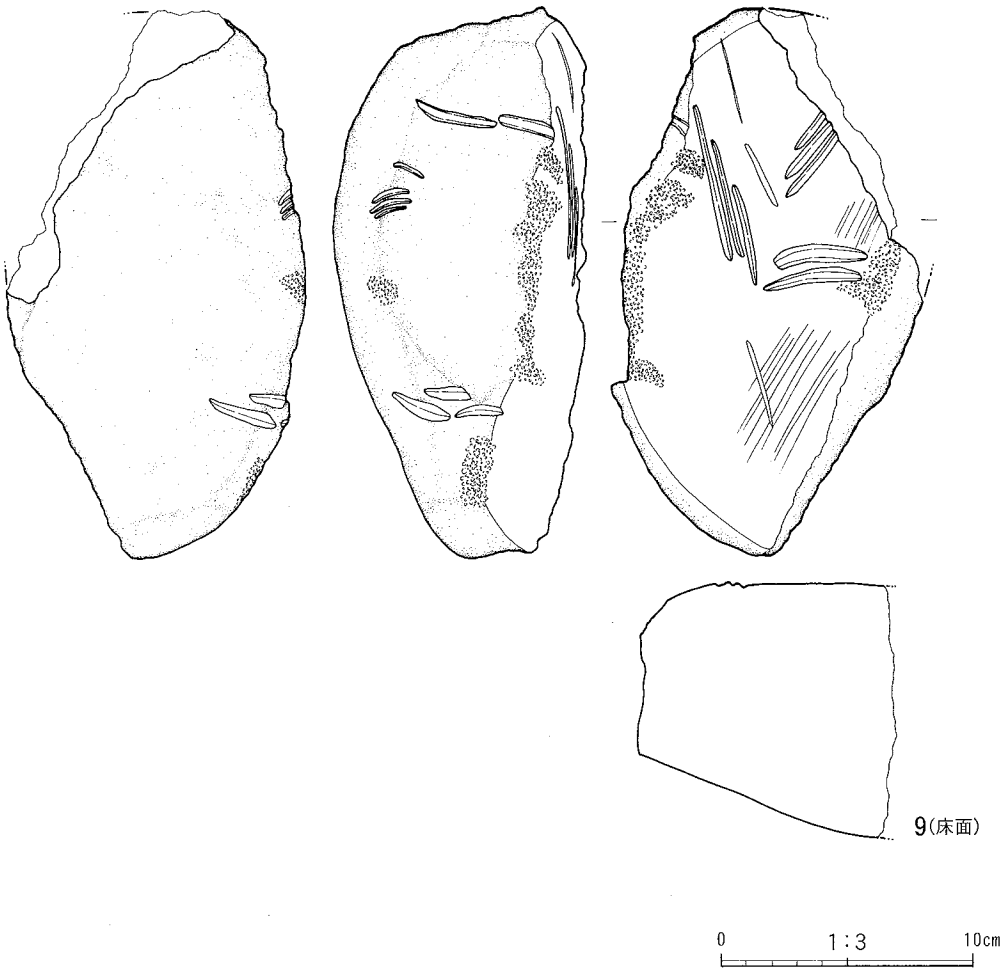


第50図　RA542竪穴住居跡土層断面



第51図　RA542竪穴住居跡出土遺物（1）

付き土師器坏である。表面はひどく摩滅しているが、内面に黒色処理が施されていた痕跡がある。５はロクロ非使用土師器小型埦である。およそ1/2残存する。表面はひどく摩滅している。６はロクロ非使用土師器甕である。口縁より底部まで2/3ほど残存する。口縁は外反し、頸部に段を持つ。体部中ほどが膨らみ、底部外面が弱く張り出す。底部内面はやや丸みを帯びた平底である。口縁は内外面ともヨコナデ、体部外面はハケメの後ヘラミガキ、体部内面はハケメ、ヘラナデの調整が施される。７はロクロ非使用土師器甕である。およそ2/3残存する。口縁は広く外反、体部が球状に膨らみ、底部は平底である。表面は摩滅しているが、口縁は内外面ともにヨコナデ、体部外面はヘラナデの調整が施される。８は土製紡錘車である。1/2残存する。表面は摩滅しているが、ヘラミガキの調整が施されているようである。９は安山岩製砥石である。片面に使用痕がみとめられる。



第52図　RA542竪穴住居跡出土遺物（2）

ＲＡ５４３竪穴住居（第53図）

位　　置　調査区南東部　　**平面形**　方形と考えられる。　　**主軸方向**　不明

規　　模　東西1.50m以上、南北2.20m

重複関係　ＲＧ362溝跡、ＲＤ980・981土坑に切られ、ＲＡ544竪穴住居跡を切る。

掘 込 面　削平　　**検出面**　褐色シルト層上面

埋　　土　自然堆積で層相の違いによりＡ～Ｃの３層に大別。Ａ層は黒褐色土を主体に褐色土を少量粉状に含む。Ｂ層は暗褐色土～黒褐色土に褐色土を粉状に含み、炭化物粒と焼土を少量含む。Ｄ層は床面構築土であり、褐色土を主体に暗褐色土を粉状に含む。

壁の状態　外傾気味に立ち上がる。検出面から床面までの深さは0.13mほどである。

床の状態　ほぼ水平である。床面は床面構築土Ｄ層上面であり、Ｄ層の層厚は0.02～0.10mほどである。

出土遺物（第54図）　Ｄ層より１点出土している。１は須恵器の坏である。底部から体部下半の1/4ほど残存している。底部は糸切り無調整である。

ＲＡ５４４竪穴住居（第53図）

位　　置　調査区南東部　　**平面形**　方形と考えられる。　　**主軸方向**　N99°W

規　　模　東西3.30m、南北2.90m　　**重複関係**　ＲＡ543、ＲＤ979、980に切られる。

掘 込 面　削平　　**検出面**　褐色シルト層上面

埋　　土　自然堆積で層相の違いによりＡ、Ｄの２層に大別。Ａ層は暗褐色土を主体に褐色土を粉状に含み、炭化物粒、焼土粒を少量含む。Ｄ層は床面構築土であり、褐色土に暗褐色土と炭化物粒、焼土粒をわずかに含む。

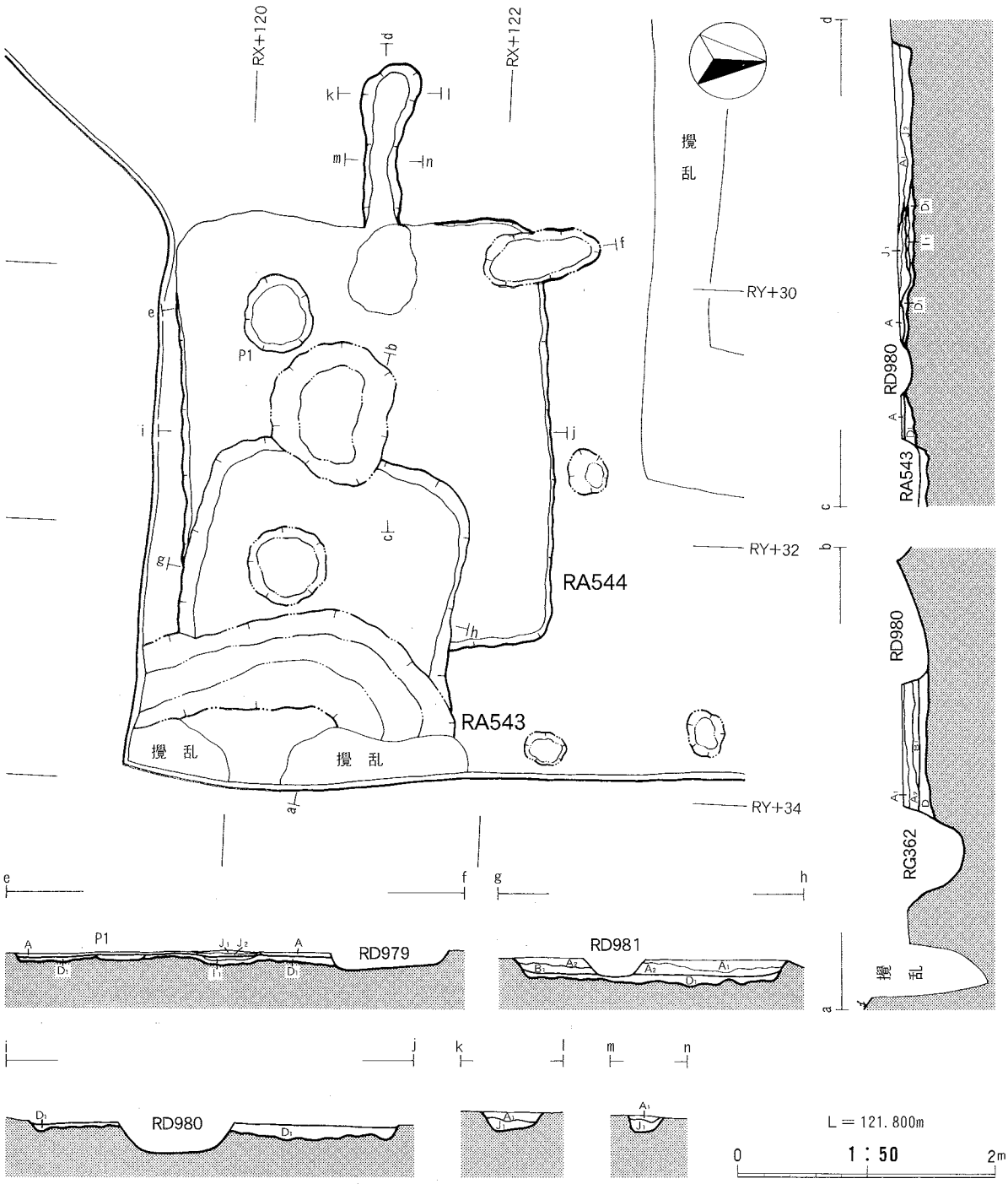
壁の状態　削平を受けており、東壁は残存していなかった。残存する壁もわずかであり、検出面から床面までの深さは0.02mほどである。

床の状態　ほぼ水平である。床面は層厚0.02～0.07mほどの床面構築土D層上面である。

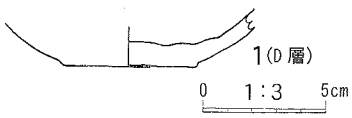
か ま ど　東壁中央付近に検出した。煙道は底面が平坦な溝状を呈し、火床面から緩やかに煙出し部に向けて傾斜している。規模は西壁より煙出し先端までの長さ1.28m、幅0.24～0.42m、検出面から平坦面までの深さは0.02～0.14m程である。かまど堆積土（Ｊ層）は、褐色土を主体とし暗褐色土や焼土粒、炭化物粒をふくむ。底面は地山面である。かまどそでは残存していない。火床面は西壁中央付近に長径0.72m、短径0.53mの楕円形状に層厚0.10mほど堆積した焼土層（Ｆ層）を確認した。

ピット　面南西寄りに１口検出された。長径0.62m、短径0.5mの不整楕円形を呈し、床面からの深さは0.30mほどである。埋土は暗褐色土を主体に褐色土を粉状に含む。

出土遺物　なし



第 53 図　RA543・544 竪穴住居跡



第 54 図　RA543 竪穴住居跡出土遺物

ＲＤ９７８土坑（第55図）

位　　置　調査区北西部　　**平面形**　隅丸方形　　**長軸方向**　Ｎ８°Ｗ

規　　模　長軸上端　2.56m以上、長軸下端2.43m、短軸上端1.60m以上、短軸下端1.49m

重複関係　なし　　**掘込面**　削平　　**検出面**　褐色シルト層上面

埋　　土　自然堆積で層相の違いによりＡ、Ｂの２層に大別。Ａ層は黒褐色土に褐色土が少量混じる。Ｂ層は黒褐色土を主体に褐色土を含む。

壁の状態　北～西壁は撹乱され下端のみ検出。壁高は0.14mほどで、緩やかに立ち上がる。

床の状態　ほぼ平坦で、地山面である。　　**出土遺物**　なし

ＲＤ９７９土坑（第55図）

位　　置　調査区南東部　　**平面形**　不整楕円形　　**長軸方向**　Ｎ25°Ｗ

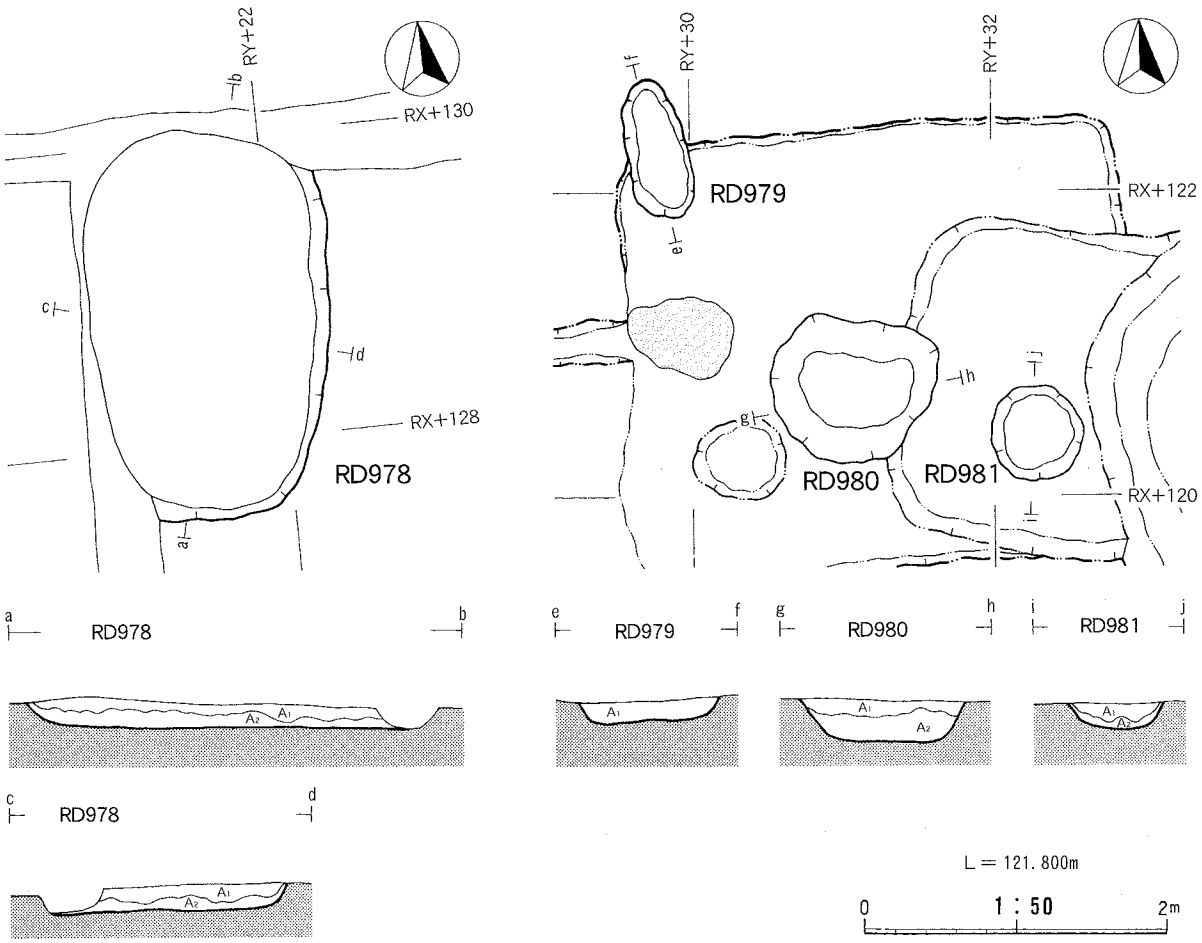
規　　模　長軸上端0.94m、長軸下端0.80m、短軸上端0.41m、短軸下端0.27m

重複関係　ＲＡ545を切る　　**掘込面**　削平　　**検出面**　褐色シルト層上面

埋　　土　自然堆積で暗褐色土を主体に褐色土が若干混入する。

壁の状態　壁高0.13m前後。外傾して立ち上がる。　　**床の状態**　ほぼ平坦。底面は地山面である。

出土遺物　なし



第55図　RD978・979・980・981土坑

ＲＤ９８０土坑（第55図）

位　　置　調査区南東部　　**平面形**　不整円形　**長軸方向**　N119°W

規　　模　長軸上端1.16m、長軸下端0.75m、短軸上端0.92m、短軸下端0.45m

重複関係　ＲＡ543・544を切る。　**掘込面**　削平　　**検出面**　褐色シルト層上面

埋　　土　自然堆積で層相の違いによりＡ、Ｂの２層に大別。Ａ層は暗褐色土に褐色土がわずかに含む。Ｂ層は暗褐色土を主体に褐色土・焼土粒・炭化物粒をわずかに含む。

壁の状態　壁高0.26m前後。緩やかに外傾して立ち上がる。

床の状態　ほぼ平坦。底面は地山面である。

出土遺物　土師器甕とあかやき土器の甕の小破片が2点出土している。

ＲＧ０４５溝跡（第56図）

位　　置　調査区北東隅　　**平面形**　ほぼ直線

規　　模　検出した総延長は4.50m。幅は上端1.85m以上、下端は検出していない。

重複関係　ＲＡ539を切り、ＲＧ435に切られる。　**掘込面**　削平　　**検出面**　褐色シルト層上面

埋　　土　自然堆積である。黒褐色土に黒色土を含む。酸化鉄を含み、若干グライ化している。

壁の状態　緩やかに下がる。下半は撹乱されており、不明。　**床の状態**　検出していない。

出土遺物　検出面よりあかやき土器坏の小破片が7点出土している。

ＲＧ３３４溝跡（第56図）

位　　置　調査区中央西寄り　　**平面形**　直線状に南北に延び、北端で屈曲する。

規　　模　検出した総延長約3.90m。幅は上端0.14～0.20m、下端0.06～0.13m。

重複関係　ＲＧ336に切られる。　**掘込面**　削平　　**検出面**　褐色シルト層上面

埋　　土　自然堆積である。黒～暗褐色土を主体に、褐色土を若干含む。

壁の状態　検出面から底面までの深さは0.04～0.10mほどである。断面形が皿状を呈し、ほぼ直壁である。

床の状態　底面は地山面である。　**出土遺物**　なし

ＲＧ３３６溝跡（第56図）

位　　置　調査区中央西寄り　　**平面形**　直線状に南北に延び、南側で若干上端が広がる。

規　　模　検出した総延長は16.6m。幅は上端0.45～0.85m、下端0.10～0.22mほどである。

重複関係　ＲＡ541・542、ＲＧ434を切る。

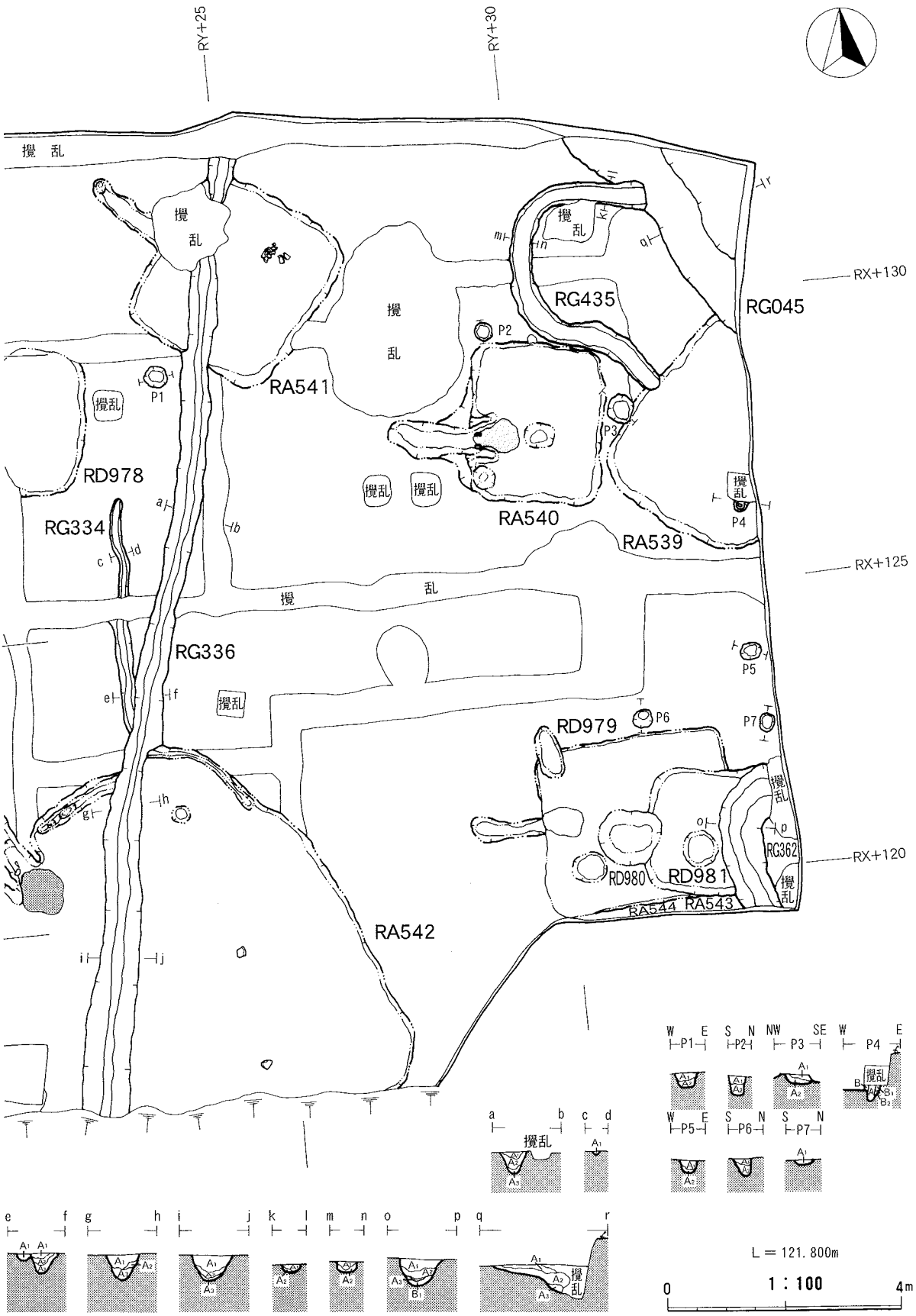
掘 込 面　削平　　**検出面**　褐色シルト層上面

埋　　土　自然堆積で層相の違いによりＡ、Ｂの２層に大別。Ａ層は暗褐色土を主体に褐色土をわずかに含む。Ｂ層は暗褐色土を主体に砂質の褐色土を含む。

壁の状態　検出面から底面までの深さは、0.20～0.54mほどである。断面形は上部がやや開いたU字状を呈する。

床の状態　底面は地山面である。緩やかに北から南へと傾斜している。

出土遺物　図示していないが、埋土中より高台付き土師器坏の底部やあかやき土器坏・甕、土師器坏・甕、などの小破片が出土している。



第56図　RG334･336･362･435 溝跡、ピット

ＲＧ３６２溝跡（第56図）

位　　置　調査区南東隅　　**平面形**　東－南へ弧を描き屈曲する。

規　　模　検出した総延長はおよそ2.50m。幅は上端0.60～0.90m、下端0.20～0.30m。

重複関係　ＲＡ544を切る。　**掘込面**　削平　　**検出面**　褐色シルト層上面

埋　　土　自然堆積で層相の違いによりＡ、Ｂの２層に大別。Ａ層は黒褐色土を主体に褐色砂質土・炭化物粒をわずかに含む。Ｂ層は暗褐色土を主体に褐色土と砂礫を含む。

壁の状態　検出面から底面までの深さは0.31～0.47mほどである。断面形は不整U字形を呈する。西壁は直壁気味に、東壁はやや外傾して直立する。

床の状態　底面は地山面である。

出土遺物　あかやき土器の坏や土師器甕の小破片が埋土上層より出土している。周辺から流入したと考えられる。

ＲＧ４３５溝跡（第56図）

位　　置　調査区北東　　**平面形**　コ字状に屈曲する。

規　　模　検出した総延長約2.50m。幅は上端0.60～0.85m、下端0.20～0.28m。

重複関係　ＲＡ539、ＲＧ045を切る。　**掘込面**　削平　　**検出面**　褐色シルト層上面

埋　　土　自然堆積で層相の違いによりＡ、Ｂの２層に大別。Ａ層は暗褐色土を主体とし、褐色土を粉状に含み、Ｂ層は褐色土を主体に暗褐色土を含む。

壁の状態　検出面から底面までの深さは0.05～0.16mほどである。断面形が皿状を呈し、ほぼ直壁である。

床の状態　底面は地山面である。　**出土遺物**　なし

ピット（第56図）

調査区内に７ロピットを検出した。径0.30～0.42m、検出面からの深さ0.10～0.35mほどをはかる。いずれも出土遺物はないが、重複関係や埋土の状況より、古代以降の遺構と考えられる。

埋土の状況や位置関係より、掘立柱建物等を構成する柱穴とは考えられない。

（今野　公顕）

4．調査のまとめ

今回の第40・41次調査において、検出した遺構は奈良時代の竪穴住居跡４棟、平安時代の竪穴住居跡５棟、古代以降の土坑６基、近世以降の土坑２基、近世以降の竪穴跡1棟、古代以降の溝跡14条である。

古墳～奈良時代　奈良時代の竪穴住居跡は第41次調査区で４棟（ＲＡ539・540・541・542）検出されている。カマドの方向は北～西方向を向くものがほとんどである。そのうちＲＡ542竪穴住居跡は、一辺が７ｍ以上をはかる大型のもので、そのほかの竪穴住居跡は一辺が３ｍ以下の小型のものである。大型竪穴住居跡の周囲を取り囲むように数棟の小型竪穴住居跡が配置される様子は、台太郎遺跡の中でも各所に見られ、この時期の集落体系のひとつと考えられる。また小型竪穴住居跡であるＲＡ541竪穴住居跡は、大型のＲＡ542竪穴住居跡の北側に近接し、カマド方向がほぼ同じに配置されており、中型と小型の土師器甑がセットで出土している。甑は大型竪穴住居跡からは出土せずに、それと近接する小型竪穴住居跡より出土することが多く見受けられ、これも当該期の集落様相のひとつである可能性がある。出土土器について考えてみる。土師器の坏はいずれもロクロ非使用、丸底の器形であり、体部に弱い段、もしくは稜が付く。内面は黒色処理とヘラミガキ、外面はヘラミガキもしくはハケメの調整が施されているものである。土師器の甕は、口縁部が直立気味に外反し、頸部に段もしくは稜がつき、底部外面は弱く突出す。最大径は口縁部にみられる。口縁部は内外面ともヨコナデ、体部内面はハケメやヘラナデ、体部外面はヘラミガキ、ヘラケズリの調整が施されている。以上の特徴より、７世紀後半～８世紀前半のものと捉えられる。

平安時代　平安時代の竪穴住居跡は第40次調査区で３棟（ＲＡ536・537・538）、第41次調査区で２棟（ＲＡ543・544）検出されている。平安時代の竪穴住居跡は一辺が３～４ｍほどの規模である。台太郎遺跡全体でも、平安時代の竪穴住居跡はこの規模のものが最も多い。カマドは概して南～東方向を向いている。次に出土土器について概観する。坏はあかやき土器がほとんどである。底部再調整は一個のみで、ほとんどが糸切り無調整である。土師器の坏はロクロ整形で、内面に黒色処理とヘラミガキ調整が施されている。あかやき土器の甕は口縁部が短く外反し、最大径は体部上半のものが主体である。底部の内面は平底である。体部の調整はヘラナデ、ヘラケズリのものが多い。以上の特徴より、９世紀後半のものと考えられる。

台太郎遺跡は、これまでの調査で古代（古墳～奈良・平安時代）を中心にした遺構が多く検出されている。今後、遺構の時期と分布やあり方を詳細に検討することで、集落の変遷やあり方がより見えてくるものと考えられる。

中　世　また、今回の調査区内には検出されていないが、本遺跡のほぼ中央には、中世（13世紀後半～14世紀前半）の大規模な堀跡が検出されている。さらに、この堀で囲郭された内部より掘立柱建物跡が、また遺跡の南部からは中世土坑墓群が検出されている。堀跡埋土の中～下層より、龍泉窯系青磁鎬蓮弁文盤や椀、常滑焼５～６型式の甕などをはじめとした陶磁器類が出土していることなどより、この時期の在地勢力の居館跡と考えられる。中世の遺構や遺物の詳細については、今後検討を進め本報告で稿を改めたい。

（今野　公顕）

V．田貝遺跡　（第９次調査）

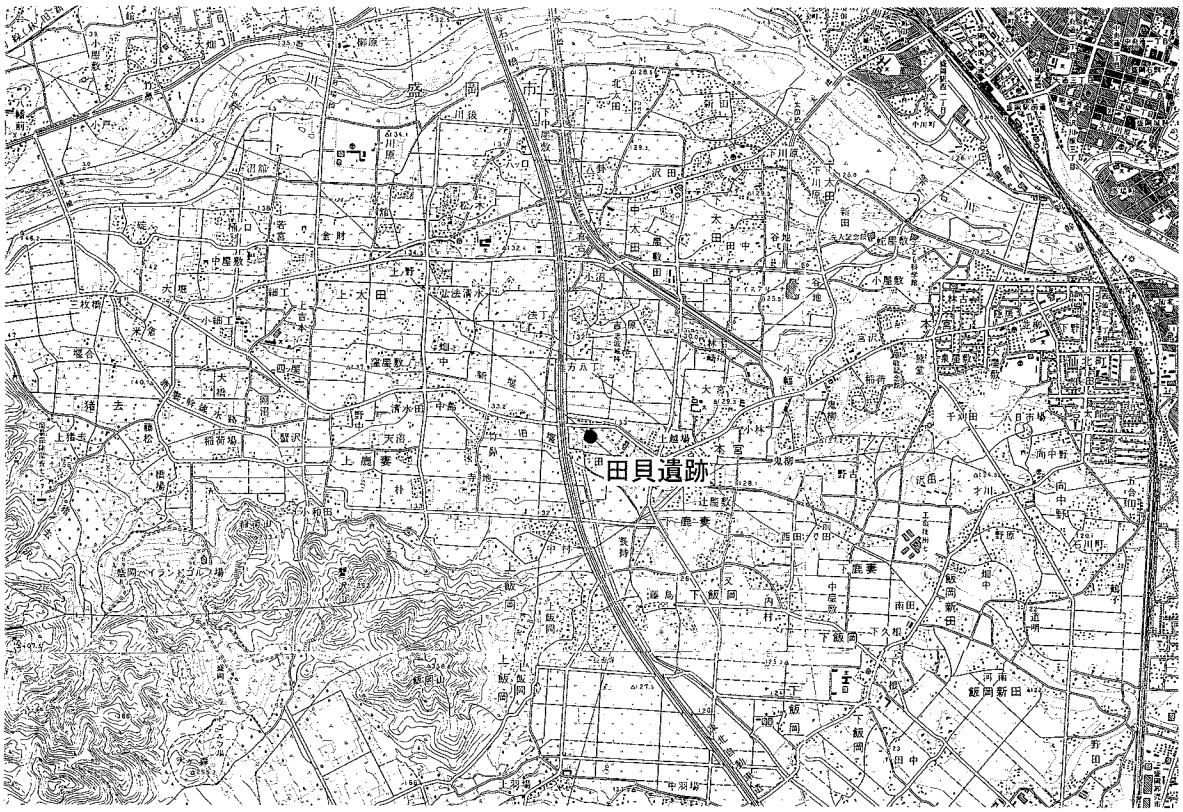
１．遺跡の概要

遺跡の位置　田貝遺跡は、盛岡市の中心部より南西へ約3.5km の盛岡市上鹿妻字田貝地内に所在する（第57図）。史跡志波城跡外郭南辺の南西に隣接し、現況は宅地や水田・畑・果樹園などの農地が主体となっている。遺跡範囲は東西約400m、南北約150mと推定され、標高は131.000m前後をはかる。

遺跡の地形　田貝遺跡は台太郎遺跡と同様に、雫石川南岸に発達する沖積段丘上に立地する（第１図）。雫石川は南岸において流路の転換が著しく、それによって形成された幾筋もの沖積段丘が発達している。

周辺の遺跡　田貝遺跡の立地する沖積段丘上には、古墳時代末～平安時代を中心とする遺跡が多く分布する。本遺跡西方約２kmには終末期古墳である太田蝦夷森古墳群が所在する。また北側には古代陸奥国最北端の城柵志波城跡が隣接し、西側には竹花前遺跡が、東側には新堰端遺跡、石仏遺跡が位置し、それぞれ主に平安時代の遺構が検出されている。特に竹花前遺跡では10世紀代の緑釉陶器が出土している（岩手県教育委員会1979『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』）。

また、数は少ないが縄文時代後期～弥生時代の遺構・遺物も確認されている。本遺跡東に隣接する石仏遺跡では焼土遺構とそれに伴う多量の縄文時代後期の遺物が出土しているほか、新堰端遺跡からは縄文時代晩期の遺構・遺物も検出されている。



第 57 図　田貝遺跡の位置（1:50,000）

2．調査成果

（1）これまでの調査

田貝遺跡の発掘調査は、1988年以降９次に渡って実施されている。また、下記以外にも上下水道工事や小規模な掘削工事時には、随時立会調査を実施しているが、遺構は検出されていない。(第58図)

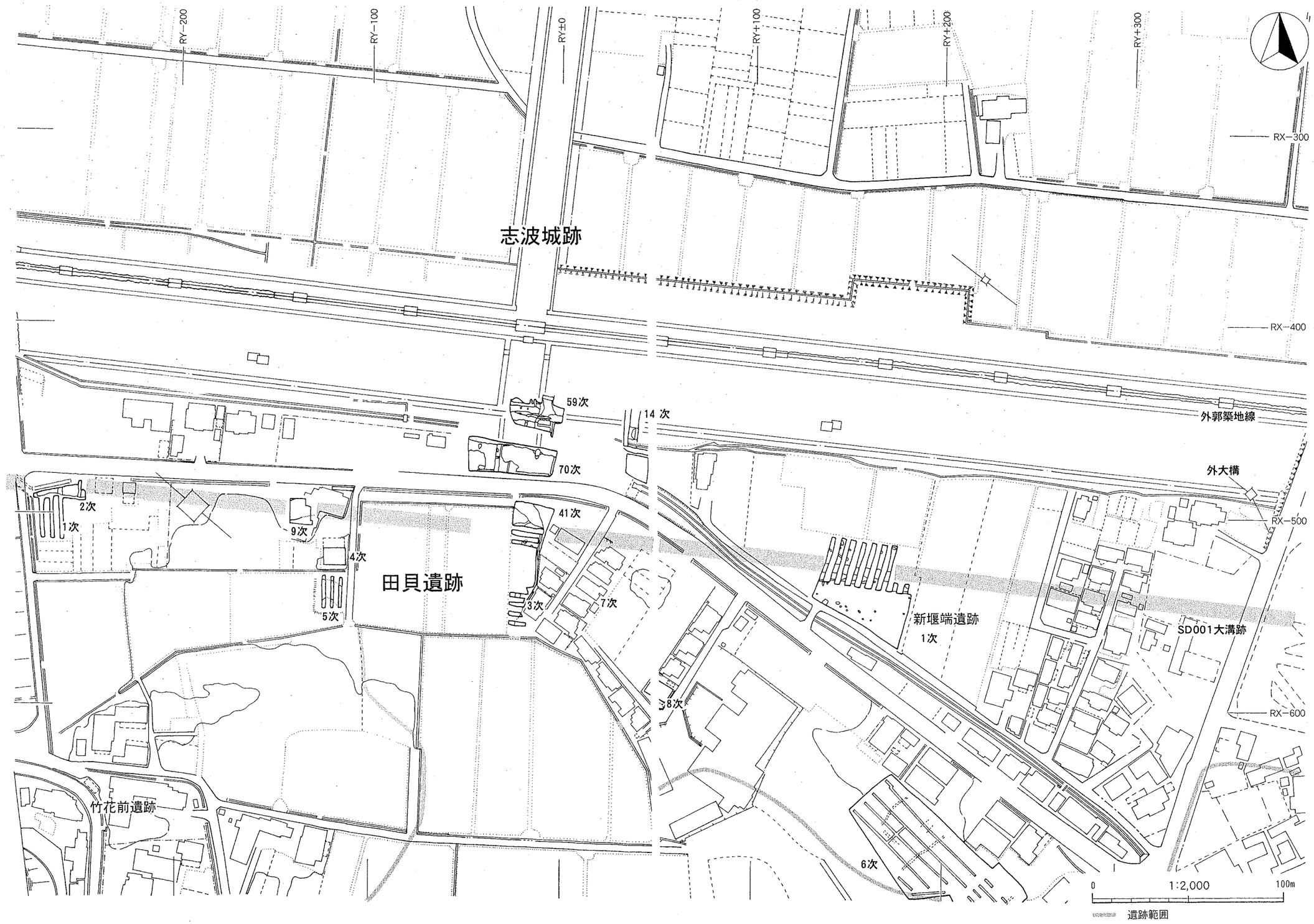
次数	所在地	調査原因	面積	期間	検出遺構・遺物
1	上鹿妻字田貝71-4	住宅新築	215㎡	88,05,06 88,05,11	平安時代大溝跡１条、土師器等 遺構保存
2	上鹿妻字田貝71-1	農作業小屋新築	55㎡	89,04,17 89,04,26	平安時代大溝跡１条、 土師器等
3	上鹿妻字田貝19-5	住宅増築	5㎡	89,04,19	遺構・遺物なし
4	上鹿妻字田貝62	農作業小屋新築	32㎡	94,04,12 94,04,13	遺構・遺物なし
5	上鹿妻字田貝100番２号	住宅新築	98㎡	95,06,07 95,06,19	縄文時代晩期包含層・旧河道
6	上鹿妻字田貝８番４・５号	農作業小屋新築	383㎡	95,12,04 95,12,05	古代溝跡９条、土坑、ほか
7	上鹿妻字田貝17-12	住宅新築	㎡	96,07,20	遺構・遺物なし
8	上鹿妻字田貝14-2	住宅新築	176㎡	98,07,27 98,07,29	中世溝跡1条
9	上鹿妻字田貝59-2	住宅新築	188.5㎡	01,05,01 01,05,11	平安時代大溝跡1条、土師器等 遺構保存

第３表　田貝遺跡調査成果

（2）平成13年度の調査

今年度実施した第９次調査区は、盛岡市上鹿妻字田貝59番２号に所在する。遺跡の中央部やや西寄りに位置し、個人住宅新築工事にともなう調査を国庫補助事業として実施した。発掘調査は平成13年５月１日から５月11日までおこない、調査面積は188.50㎡である。

第９次調査区では１次・２次調査区および新堰端遺跡第１次調査区（志波城跡第39次調査区）で検出されているＳＤ００１大溝跡が検出されると予想されたため、トレンチによる試掘調査を実施した。検出作業は、褐色シルト層上面にて行い、表土下約0.40mよりＳＤ００１大溝跡を検出した。そのため、建築範囲全面に調査区を拡張し、基礎工事掘削深度（地表より0.65m）までの精査を実施し、遺構の下半は地下保存とした。調査終了時には遺構検出面全体に0.05mほどの厚さで川砂を敷き詰め、土を埋め戻した。検出面は、以前の住宅の基礎等によって、部分的に大きく撹乱されていた。調査区内はほぼ平坦な地形で、検出面の標高は130.800m前後である。



第58図　田貝遺跡全体図（1:2,000）

3．遺構・遺物

ＳＤ００１大溝跡（第59図）

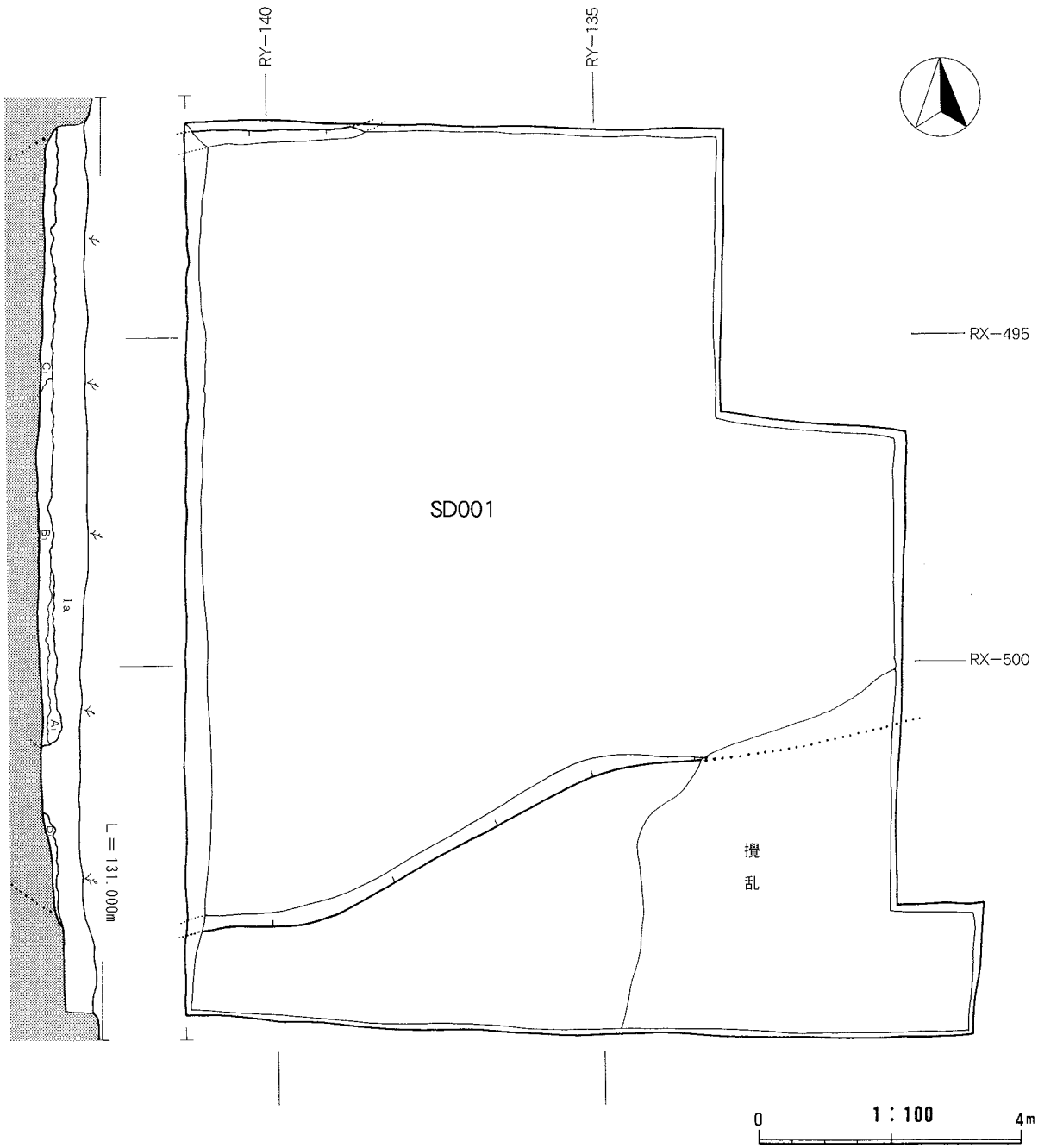
位　　置　調査区北寄り　　**平面形**　南縁東半分は撹乱されているがほぼ直線に東西に走る。

長軸方向　N76°Ｅ　　**検出した総延長**　10.7m　　**幅**　12.0～11.5m

断 面 形　不明　　**掘込面**　削平　　**検出面**　表土直下褐色シルト層上面

埋　　土　自然堆積で層相の違いによりＡ～Ｃの３層に大別できる。Ａ層は黒褐色土を主体とする。Ｂ層は黒色土を主体とし、褐色土を粉状に含む。Ｃ層は褐色土を主体とし、黒褐色土を粉状に含む。

出土遺物　埋土上層より土師器小破片が数点出土



第 59 図　田貝遺跡第９次調査全体図

４．調査のまとめ

今回の調査区では、平安時代のものと考えられる大溝跡１条を検出した。底面まで精査をせずに保存処置をとったため、詳細については不明である。しかし、検出状況より、第１・２次調査区および新堰端遺跡第１次調査区（志波城跡第39次調査区）で検出されているＳＤ００１大溝跡と埋土状況および走向が酷似しているため、同一のものと考えられる。

ＳＤ００１　このＳＤ００１大溝跡は、志波城跡の外郭南辺築地線より約108m（１町）、ＳＤ０１０外郭南辺外大溝跡より約62m南に位置し、埋土状況がＳＤ０１０外郭南辺外大溝の埋土状況と近似する点や出土遺物、志波城外郭築地線と併走すること、より志波城跡付属の区画施設の可能性が指摘されている。(1)

外郭東辺　また、志波城跡の北東側に位置する林崎遺跡では、南北方向に走る同様の大溝跡（ＲＧ０１７）が検出されており、こちらの大溝跡も志波城跡外郭東辺築地線から約108m（１町）東に位置し、埋土状況が志波城外郭東辺外大溝（ＳＤ０３０）のものと酷似している。(2)志波城跡外郭北辺は、雫石川の氾濫により流出してしまっており不明であり、志波城跡外郭西辺でも未確認だが、これらの大溝跡は志波城跡外大溝の、さらに外側に築かれた区画溝である可能性が高い。

志波城外郭　これまで、志波城跡の外郭は１辺928mの外大溝と１辺840m（方八町）の築地線によっての二重構造で囲郭されているとされてきた。これは志波城跡の大きな特徴のひとつといえるが、今後志波城跡の外郭構造を考える上で、築地線より108m（一町）南に位置する今回検出されたＳＤ００１大溝跡を最も南側に位置する外郭施設、または付属の区画施設としてとらえていく必要性があろう。

今後、西辺の様相もふくめて、志波城跡周辺の調査の蓄積が必要である。

（今野　公顕）

註　（１）　盛岡市教育委員会1988.3『志波城跡－昭和62年度発掘調査概報－』

（２）　盛岡市教育委員会1998.3『盛岡市埋蔵文化財調査年報―平成５・６年度―』

Ⅵ. 見前館遺跡　（第２次調査）

１．遺跡の概要

遺跡の位置　見前館遺跡は盛岡市の南部、岩手県立盛岡南高等学校より南に約200mの盛岡市西見前字館地内に位置する。現況は宅地や水田、畑などの農地が主体となっている。周辺には三百刈田・見前古館・上畑遺跡など、古代から中世の遺跡が分布している。遺跡の範囲は東西約200m、南北約250mと推定され、標高は約111～112mである。（第60図）

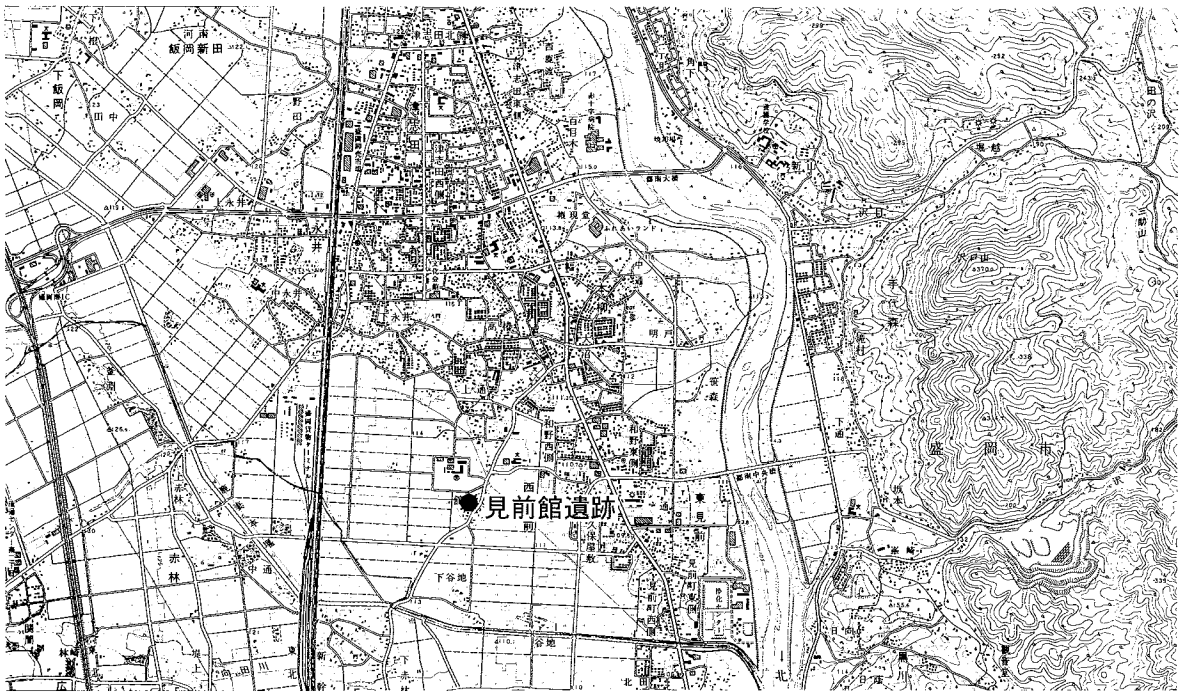
遺跡の地形　見前館遺跡は、周辺を水田に囲まれた微高地上に立地し、その比高差は１～２mほどである。堀跡や土塁跡などは現況ではほとんど確認することはできないが、遺跡北西部から北東部は場所によっては周辺の水田と大きな段差となっており、堀跡の存在が予想される。明治時代に描かれた絵図などをみると、堀跡やそれに並行する土塁跡と思われる地割が確認することができる。

２．調査成果

（１）これまでの調査

過去の調査　見前館遺跡のこれまでの発掘調査は、平成10年度に実施された第1次調査のみである。（盛岡市教育委員会1999.3『盛岡遺跡群―平成10年度発掘調査概報―』）

第１次調査　第１次調査区は遺跡の北部に位置し、個人住宅改築に伴う事前の遺構確認調査として実施した。



第 60 図　見前館遺跡の位置（1:50,000）

検出された遺構は平安時代の竪穴住居跡が１棟、中世以降の掘立柱建物跡が５棟、溝跡が１条、井戸跡が２基、柱穴222口である。遺物は唐津産の陶磁器１点で、16～17世紀初頭と考えられる。

なお、基礎工事が遺構検出面に達しないことと、その上に一定の保護層を設けることを条件に、ほとんどの遺構は精査せずに検出だけにとどめている。

（２）平成13年度の調査

今年度の見前館遺跡の発掘調査は、第２次調査の１件である。個人住宅新築にともなう遺構確認調査を国庫補助事業として実施した。

第２次調査　第２次調査区は、盛岡市西見前8-3に所在し遺跡の南西部に位置する。調査は平成13年７月23日から７月27日まで行い、調査面積は173.90㎡である。

遺構検出は現地表面より30～40cm下の黄褐色シルト層で行ったが、改築前の住宅基礎などによりかなりの撹乱・削平を受けていた。調査区内の地形は北から南にかけて緩やかに傾斜しており、調査区中央に小さな沢が入り込んでいる。検出された遺構は土坑が２基、柱穴が13口である。２基の土坑のうち、調査区南側で検出された土坑の埋土には、多量の焼土が混入していた。遺物は出土していないため時期は不明である。

なお、基礎工事が遺構面に達しないことから、精査は行わず遺構の検出作業のみを実施し、遺構地下保存とした。よって今回の報告では、遺構の詳細図は割愛し、遺跡全体図にのみ掲載した。(第61図)

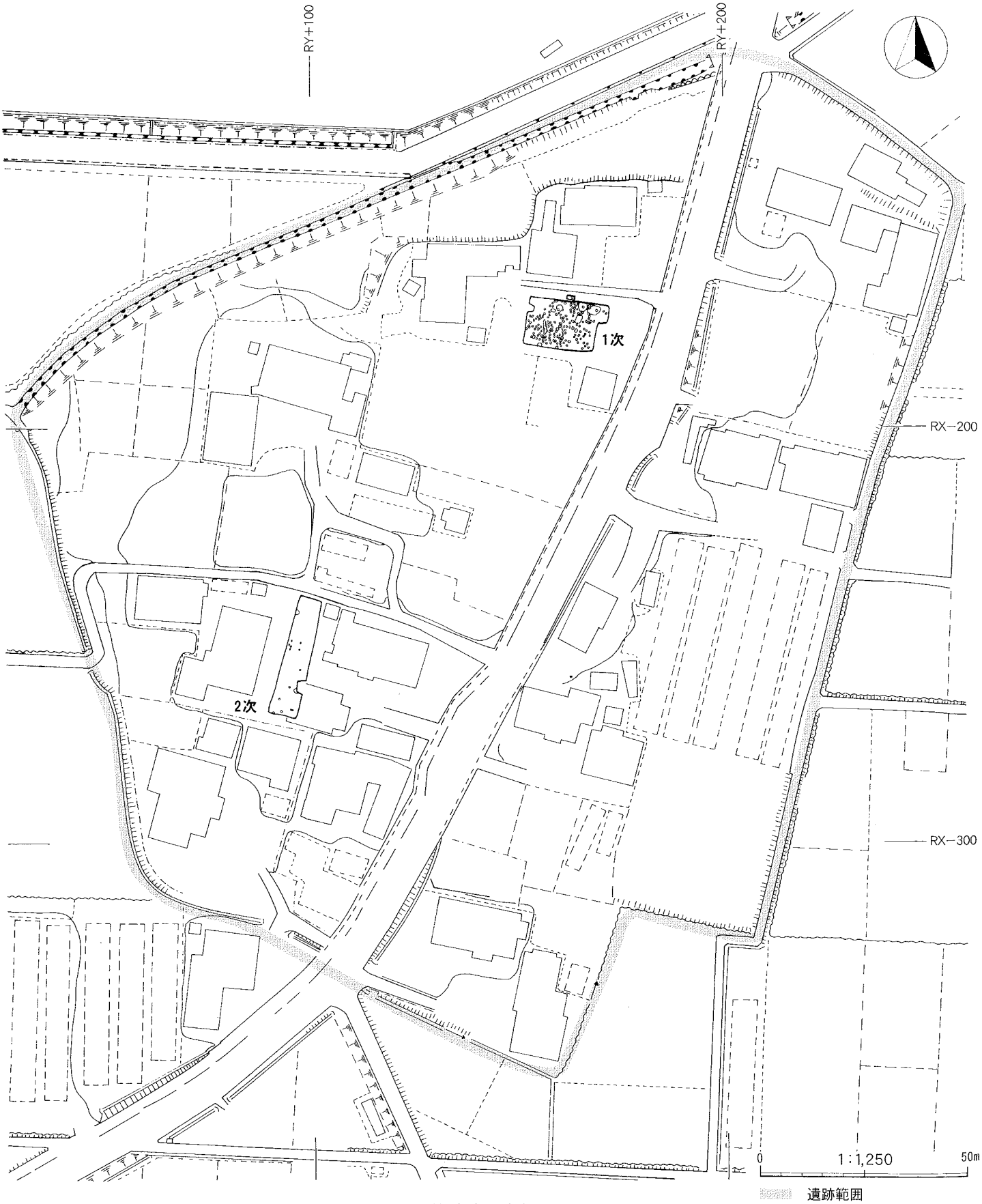
３．調査のまとめ

現在、遺跡の中央には南北に道路が走っているが、明治時代の絵図によると元来この道路は遺跡中央付近でクランク状に曲がっており、遺跡北部では館の主郭を区画する堀と重複あるいは並行すると想定される。掘立柱建物跡など多数の遺構が検出された第１次調査区は、この主郭内に位置すると考えられる。今回の調査区で検出された遺構数は、第１次調査に比べると格段にその数は少なく、本遺跡の主要となる部分からは外れていると考えられる。

遺構の埋土　遺構の時期について考えてみる。第一次調査区で中世のものとされた遺構の埋土は黒褐色～暗褐色を呈し、古代の遺構埋土は暗褐色土が主体となることが確認されている。今回の調査で検出された遺構の埋土は黒褐色～暗褐色土を呈するものがほとんどであった。出土遺物は無かったため詳細は不明であるが、埋土の状況より中世に属する可能性も考えられる。

見前館遺跡はこれまでの調査事例が少なく、城館の構造等を明らかにするには今後の調査事例の蓄積が必要であろう。

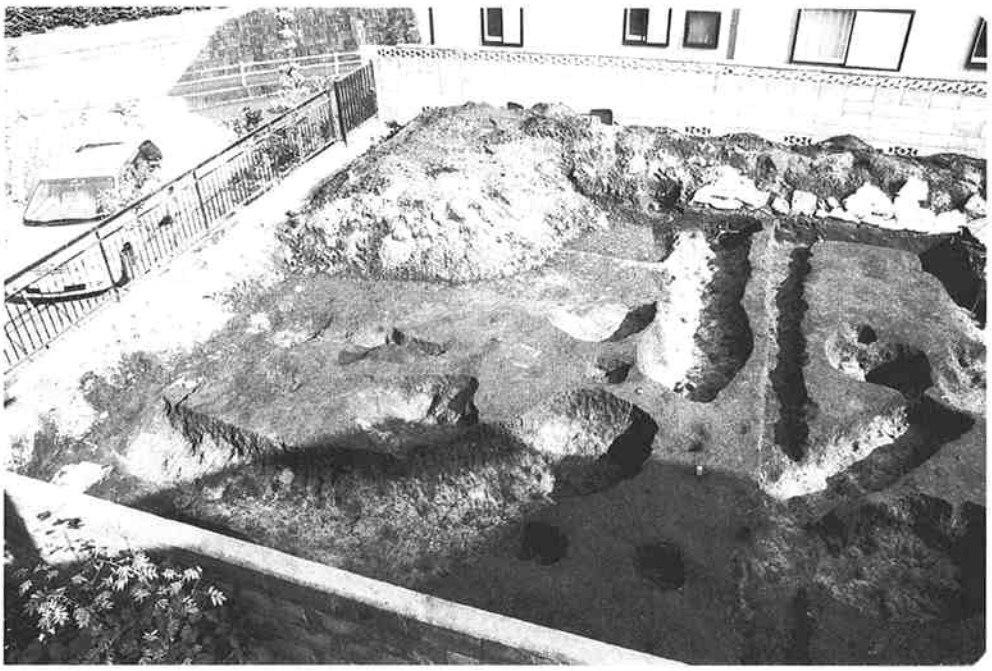
（佐々木　亮二）



第 61 図　見前館遺跡全体図（1:1, 250）

写 真 図 版

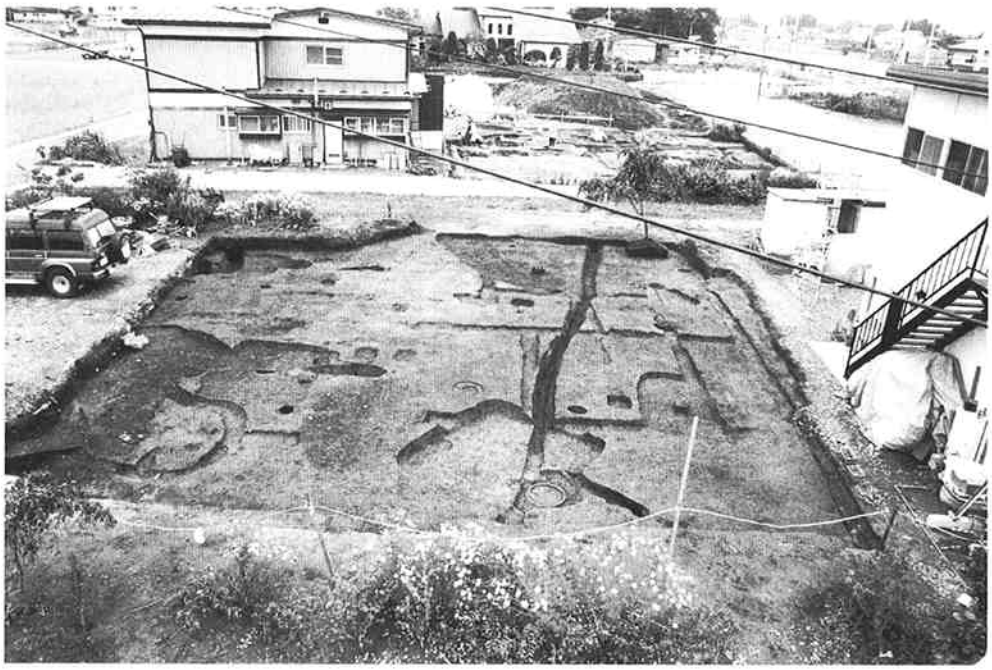
宿田遺跡第４次
発掘調査区全景



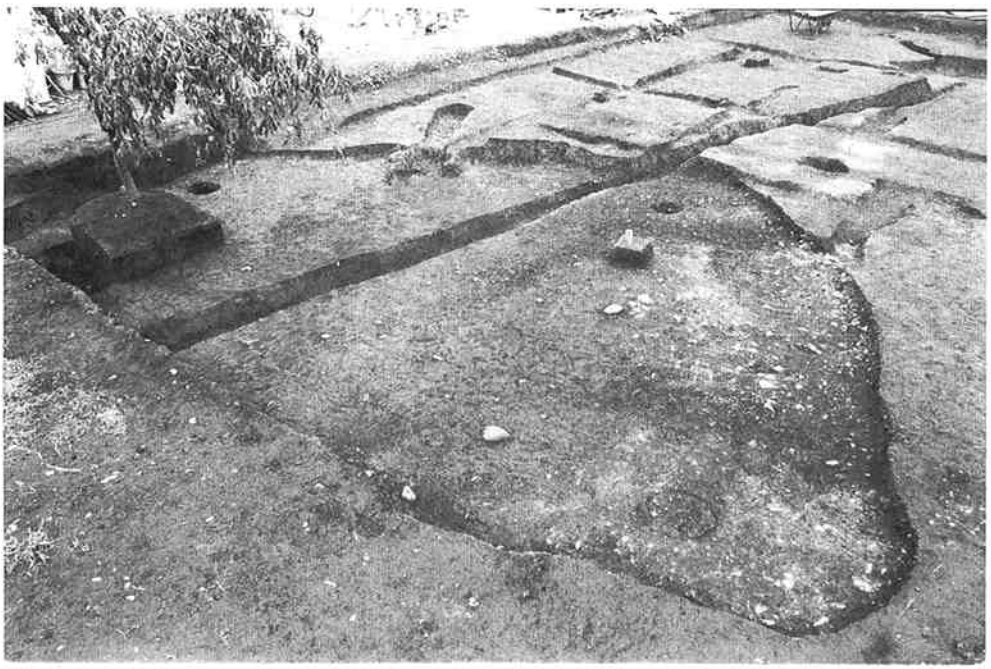
宿田遺跡第４次
発掘調査区北半部全景

宿田遺跡ＲＤ００７
土坑出土遺物

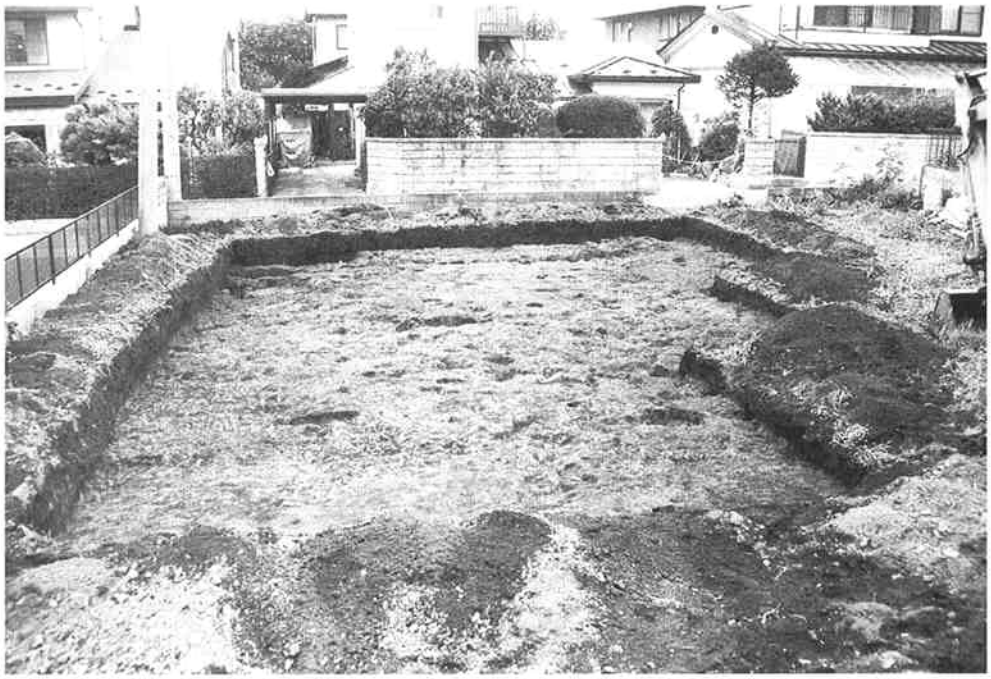
台太郎遺跡第 40 次
発掘調査区全景



台太郎遺跡第 41 次
発掘調査区全景

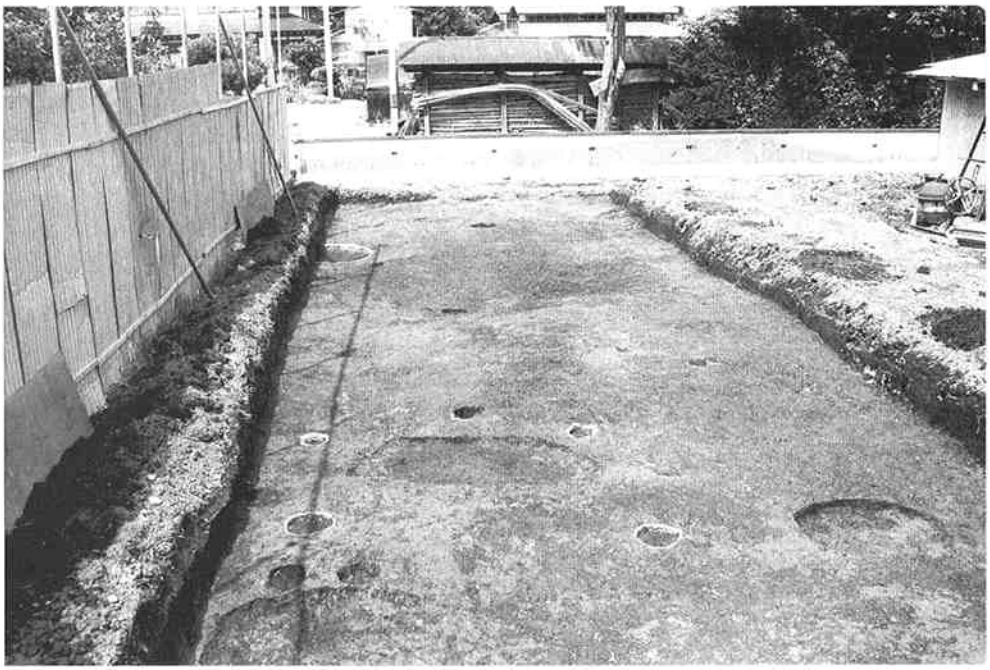


台太郎遺跡ＲＡ５４２
竪穴住居跡全景



大館町遺跡第 71 次
発掘調査区全景

田貝遺跡第 9 次
発掘調査区全景



見前館遺跡第 2 次
発掘調査区北半全景

報告書抄録

ふりがな	もりおかしないいせきぐん
書名	「盛岡市内遺跡群」
副書名	平成13年度発掘調査概報
巻次	
シリーズ名	
編著者名	今野公顕・神原雄一郎・三浦陽一・佐々木亮二・岩城志麻　他
編集機関	盛岡市教育委員会
所在地	〒020-8532　岩手県盛岡市津志田14地割37番2　TEL019-651-4111（内線7353）
発行年月日	2002年３月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
宿田遺跡	岩手県盛岡市 前九年一丁目5－19	03201		39° 42′ 39″	141° 07′ 02″	第４次 2001.10.01～ 2001.10.31	174	個人住宅建設
大館町遺跡	岩手県盛岡市大新町 10－2			39° 42′ 48″	141° 07′ 03″	第71次 2001.08.03～ 2001.08.07	94.4	個人住宅建設
台太郎遺跡	岩手県盛岡市向中野 八日市場41－2			39° 40′ 51″	141° 08′ 33″	第40次 2001.08.01～ 2001.09.19	300	個人住宅建設
	岩手県盛岡市向中野 八日市場45－9			39° 40′ 51″	141° 08° 33″	第41次 2001.08.01～ 2001.08.30	220	個人住宅建設
田貝遺跡	岩手県盛岡市上鹿妻 田貝59－2			39° 40′ 47″	141° 06′ 30″	第９次 2001.05.01～ 2001.05.11	188.5	個人住宅建設
見前館遺跡	岩手県盛岡市西見前 8－3			39° 38″ 11″	141° 09′ 38″	第２次 2001.07.23～ 2001.07.27	173.9	個人住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宿田遺跡 第４次	集落跡	縄文時代	土坑　6	縄文土器・石器	縄文時代早期後葉のムシリ1式土器と槻木１式土器が、同一の土坑から共伴して多量に出土した。
		古代	土坑　2 円形周溝　3	土師器	
大館町遺跡 第７１次	集落跡	縄文時代	なし	なし	
台太郎遺跡 第40・41次	集落跡	奈良時代 平安時代	竪穴住居跡　9 土坑　15 溝跡　8	土師器 あかやき土器 須恵器	奈良・平安時代の大規模集落。
田貝遺跡 第９次	集落跡	平安時代	大溝跡　1	土師器	史跡志波城跡外郭築地線より南に約108m（一町）の位置に大溝跡を検出。
見前館遺跡 第２次	城郭跡	中世	なし	なし	